青蒼気圏　web.ver

吉野水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青蒼気圏　ｗｅｂ．ｖｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ３６０９Ｘ

【作者名】
吉野水月

【あらすじ】
一九四六年、大日本帝国滅亡。敗戦国日本は米ソによって三八度線で分断された。

それから約半世紀。

政治の混乱、経済の疲弊、外交の失策。ソ連崩壊後の日本民主人民共和国は危機に瀕していた。アメリカとの対立は深まり戦争の影が差す。

そんな中、人民防空赤衛隊Ｓｕ２７ＳＪ翔鶴の若きパイロット北上護三尉は、政治文化指導員の紫藤慧子二尉と出会う。

甲騎舎　ＷＥＢページにも掲載

青蒼気圏　web. ver　〈1〉（前書き）

「青蒼気圏」は元々、ヴィジュアルノベルとして考えていたのですが頓挫、なら小説にということで、２００８年８月に新書版同人小説として完成させたものです。小説として完成させるにあたり、兵器関連のエセ薀蓄やら架空歴史設定、宮沢賢治ネタ、大状況の説明など大幅に付け加え、最初の暗いトップガンで恋愛もの、というコンセプトから大幅にズレてしまい、ただ、かさ張ってクドく、重〜い代物と化してしまいました。

そこで、今回、吉野眞人から吉野水月にＰＮを変えた記念（？）として元のヴィジュアルノベル版に立ち返ろうと、本筋（話の大筋には関係ない戦闘シーンなども含む）以外はバッサリ切り詰めた代物を、ＵＰさせていただきました。切り詰めに切り詰めたところ、なんと、ちょうど半分ほどの分量になりました。そのため、「おいおい、なんでこうなっているんだ」的なところも無くは無いですが、随分読みやすくなったと自負しております。

また、大した変更ではないのですが、終章が多少異なります。２０１１年の今に合わせたという形でしょうか。

もし万が一、サークルで小説版の方をお求め下さった方がいらっしゃいまして、「チッ、なんだよ。こうやって筋がわかるんだったら、ワザワザこんなもの買わねえよ」と思われたら、まことに相済みません。ここは平に御容赦くださいませ。

私のしたためました代物が、多少なりとも時間潰しになっていれば、まこと幸甚でございます。

青蒼気圏　web. ver　〈1〉

青の中を飛んでいた。

二機の白い点のようなＳｕ２７ＳＪ翔鶴が、縦二機編隊を組んで下北半島から南東一一〇キロのポイントを飛行していた。

翔鶴は、ロシアの長距離迎撃及び護衛を任務とするＳｕ２７をライセンス生産した機体だった。双胴式の機体、長く伸びた機首から主翼にかけての優美なラインは鶴の名に相応しい。翔鶴の名もロシア語の愛称であるジュラーヴリク＝子鶴からとられている。白に近い明灰白色の塗装も、鶴の印象を濃くしていた。

現在の任務は、国籍不明機を祖国、日本民主人民共和国の領空から追い払う警戒待機任務だった。

護は、一三歳で赤衛隊の基礎訓練を一年、防空赤衛隊飛行訓練学校で三年三期のパイロット教育を受けて三沢基地に配属された。その後、翔鶴の複座練習機型で一年の訓練を受け、去年からようやく単座機を任された。警戒待機任務もすでにこなしている。

目標は自機から一一時、距離一三〇キロの位置に一機、針路一七五度に向けて、高度八〇〇〇メートルを速度六〇〇キロで飛行中。

データリンク・システム、土耳古石を介して計器パネル右上のヘッド・ダウン・ディスプレイ……ＨＤＤに地上のレーダー・サイトからのデータが転送される。無線を傍受されている可能性があるので、誘導する地上のレーダー・サイトと無線のやりとりはしない。領空侵犯機の予期せぬ場所から不意討ちのように現れて、プレッシャーを与えるためだった。

目標は、防空識別圏を超え領空に向けて飛行している。
今までに一度も無い。まずいことになりそうだった。
護は力を入れずに操縦棹を僅かに動かし、翔鶴を会敵ポイントに向けて上昇させる。紅色の円、十六本の光条を放射状に広げた白い太陽、中央に赤い星という国籍円形標識がついた大型の垂直尾翼を遙かな地上に見せ付けるように翔鶴は飛ぶ。

空を飛ぶということは泳ぐことに似ている。戦闘機は主翼のフラップ、垂直尾翼のラダー等の舵の組み合わせによって、自由自在に方向転換して飛ぶ。鳥というより、尾鰭や背鰭を使って大気圏を泳ぎまわる魚のような存在だった。
手綱であるアナログ式の四重のフライ・バイ・ワイヤ・システムにより、機体は操縦桿を動かす護の意志に難なく従う。
キャノピーに守られた静かなコックピットにいても、深海の底のような空へとあがっていく感覚がわかるような気がする。宇宙に近い紺色はいつもながら、ひどく冷たく感じた。
「ミサゴ二番機より一番機、一一時方向、ナホートカ（発見）」
白いゴミのような点が前方に見える。
「了解、確認した」
自分に見つけさせるために何も言わなかったのだろう、と護は思った。
第三飛行連隊、第三飛行中隊の一二機の翔鶴を率いる安倉怜人三等空佐の声が聞こえる。飛行時間二〇〇〇時間のベテランだった。
「ミサゴ一番機よりシラカバへ。目標を確認した」
「シラカバよりミサゴ一番機へ。接近して国籍、機種、状況を報告せよ」
地上のレーダー・サイトで護たちを誘導する地上邀撃管制官から怜人へ入った通信が聞こえる。
「ミサゴ一番機、了解。ミサゴ一番機より二番機へ、後方から回り

込む。続け」
「ミサゴ二番機、了解」
酸素マスク越しの声は微塵も乱れが無い。
自分の息の音がひどく五月蝿い。
「ミサゴ二番機、了解」
二機編隊の翔鶴が加速する。コックピットの中では、僅かな加速など感じない。目標の左後方につく。自機から見て左側にある領空には入らせないつもりだった。
護は、目を四発エンジンの大型機に据えたまま、さらに六〇〇メートルまで接近する。ミサゴ一番機の怜人が先行した。二番機の護はそれより上空後方について、目標の動きに即座に対応できるようにする。

大型機がはっきりと姿を現す。一見、旅客機に見えないこともないが、黒く塗られた機首の犬の鼻面のような出っ張りや機体各部の妙な突起部など、明らかに旅客機とは異なっていることがわかる。何より、白と灰色に塗り分けられた機体の横にくっきりとUS・AIR・FORCEと書かれている。
「目標、航跡五三〇はアメリカ機。RC135型、一機、水平直進飛行中。異常行動は無し」
「了解」
護も確認した。学科で何度も見せられた写真に間違いなかった。

領空に近づいているのは、アメリカ空軍が保有する電子偵察機RC135だった。通信やレーダー波を解析するための空飛ぶ高度精密機器。自機のレーダーを待機モードにしているので翔鶴のレーダー波は探知されていない。警戒待機任務の際、目標がRC135のような電子情報収集機である可能性が高いので、邀撃機のレーダーは使用せず、レーダー・サイトに頼ることが多い。

「ミサゴ二番機、写真を撮影します」
「了解」
領空侵犯機の撮影は二番機の仕事だった。護は、操縦を自動飛行にしてカメラを取り出す。西側の日本製品、ニコンというメーカーのカメラだった。カメラ一つとってもロシア製とは比べ物にならない。大きく深呼吸して、しっかりとカメラを構える。引き金を引くような気持ちでシャッターを切る。
ＲＣ１３５は、そのまま直進した。
護たちも監視を継続する。

三分後、目標のＲＣ１３５に変化が見えた。
「ミサゴ一番機よりシラカバへ。変針している。旋回中」
怜人の声が耳に入った。いつも通りなら、このあたりで引き返すはずだった。このまま旋回すれば日本本土に到達するコースに入る。
「貴機は日本の領空に接近中。ただちに針路を変更せよ」
レーダー・サイトから、英語での呼びかけが何度もなされている。無線を聞きながら、護はＲＣ１３５を見つめた。針路を変更する気配はない。
「通告に対して行動変化はあるか」
「変化無し」
怜人の翔鶴はＲＣ１３５の左真横につく。これ以上はいかせない、というようなブロックの動きだった。
機体信号を実施せよ、という指示が下る。ＲＣ１３５のコックピット左横についた怜人が、機体を左右に激しく傾ける。主翼を振っているように見えるバンクは、我に従え、という万国共通の合図だった。
「ミサゴ一番機、このままだと領空を侵犯します」
「ミサゴ二番機、慌てるな」
ＲＣ１３５は刻一刻と領空に近づいていた。あと二〇キロ足

らずだった。
「こちらは、日本民主人民共和国、防空赤衛隊。現在、貴機は日本の領空に接近中。ただちに針路を変更せよ」
　怜人は、それなりに流暢な英語で国際周波数に乗せた警告を送るが反応はない。
「シラカバよりミサゴ一番機へ。目標は領空を侵犯。着陸のための誘導を行え」
　地上は強制着陸をさせる決意を固めたらしい。
「貴機は日本の領空を侵犯している。我が方の誘導に従え！」
　地上からの呼びかけは、通告から警告へ、厳しい調子に変化していた。機体信号を行え、という指示が出る。編隊長の怜人が、ＲＣ１３５の上を機首から尾部の軸を基として回転する機動、ロールで抜けて右側に回りこむ。軽業師のようだった。護も、そのまま前に出て怜人がもといたＲＣ１３５の左側面に占位して挟み込む。
　目標との距離はわずか一五〇メートル。もはや至近距離と言ってよかった。ＲＣ１３５は、のしかかってくるような巨大感を与える。
　再度バンクを行う。次に右バンクで離脱してみせる。右旋回で我が機に従え、という意味だった。
「目標は誘導に従わず」
「誘導を続行せよ」
　着陸させるから指示に従え、というレーダー・サイトの呼びかけや、怜人の機体信号にも応じない。ＲＣ１３５は無視を決め込み、ひたすら直進していた。
「ミサゴ一番機よりシラカバへ。目標は誘導に従わず。指示を乞う」
「信号射撃を実施せよ」
　護は思わず耳を疑った。今までは警告のみで侵犯機はすぐに退去した。射撃は初めてだった。
「ミサゴ一番機、了解」

一瞬遅れて、怜人からの通信が入った。
「ミサゴ一番機、プレメット（機関銃）」
翔鶴の機首の右側が爆発するように光り、排気煙と共に弾丸が吐き出される。光点が目標の前方を遮るように飛んだ。翔鶴のＧＳｈ３０１、３０ミリ機関砲の威力と迫力は領空侵犯機を怯ませるのに充分なはずだった。
だが、ＲＣ１３５は何事もなかったように青い空間を飛び続けている。
警告射撃をされても飛行を続けるＲＣ１３５の行動は常軌を逸していた。
「シラカバよりミサゴ一番機へ。撃墜の準備に入れ」
護の背筋に嫌な汗が流れる。

刻一刻と領空を侵犯されている現状で、警告も威嚇射撃も通じないならば撃墜するしかない。
国際法上では認められていたし、地上や海上で部隊が攻撃されて死傷者が出たり、軍艦が沈没したりすることに比べ、空中での撃墜が戦争に直結することは少ないが、開戦の口実となることを日本民主人民共和国は恐れていた。そのため、防空赤衛隊は撃墜を禁止していた。撃墜を警告する撃墜準備は最後の段階だった。
「ミサゴ一番機、了解。これより撃墜準備に入る」
怜人の翔鶴が再びＲＣ１３５の左側に戻った。護はＲＣ１３５から距離をとって斜め下後ろにつける。
翔鶴に搭載されている熱を感知して敵機を追いかける短射程のＲ６０赤外線誘導ミサイルを護は選ぶ。わずか五キロの距離。パイロットが、いちいち計器に目を落とさず、操縦したまま必要な情報を得ることができるヘッド・アップ・ディスプレイ、ＨＵＤの照準を魚の腹のようなＲＣ１３５につける。ミサイルの頭につけられたセンサー、シーカーが目標の熱を捉えたことを示すブザー音が鳴る。この短距離なら必中は間違いない。

「ミサゴ二番機より一番機へ。目標を照準」
「ミサゴ一番機、了解」
「シラカバよりミサゴ一番機へ。三〇秒後、撃墜せよ。秒読み開始」
大型機のＲＣ１３５に、もう逃げ場はなくなった。同時に護と怜人にも逃げ場は無くなった。
怜人が、接触事故を引き起こしそうなほどの距離でＲＣ１３５の真横につける。
「こちらは、日本民主人民共和国、防空赤衛隊。警告する。現在、貴機は日本の領空を侵犯中。三〇秒後に貴機を撃墜する」
怜人のあくまで冷静な声。
護は祈るような気持ちで目標を見つめる。
何かの間違いがあってはいけない。操縦桿のミサイル発射ボタンに手はかけない。息と心臓の音がやけに大きく聞こえた。
三秒が過ぎる。ＲＣ１３５は上昇をはじめた。右に四五度変針して加速、領空から出て行くコースをとる。

「ミサゴ一番機よりシラカバへ。目標は変針、現在領空から離れつつあり」
「シラカバよりミサゴへ。確認した」
ＲＣ１３５は、こちらの無線も傍受して分析している。最後の段階でＲＣ１３５は、こちらが本気かもしれないと思ったようだった。
護は大きく息をつく。コックピットの中では無理な話だが、ヘルメットを脱いで一息入れたかった。
「ミサゴ一番機より二番機。監視を続行する」
「ミサゴ二番機、了解」
護は遠ざかっていく機影を睨んだ。

青蒼気圏　web. ver　〈2〉

航法支援システムのもたらす帰還針路に合わせて、二機の翔鶴が地上への道を辿る。競技場のように見える滑走路に順番に着陸する。レーダー・サイトの地上邀撃管制官から、基地管制塔のターミナル・レーダー管制官に誘導が引き継がれる。帰投要請に応え、ターミナル・レーダー管制官が着陸許可と指示を出す。

基地上空を通過してから三六〇度旋回。進入角表示灯に従って滑走路に進入可能な位置に直し、減速しつつ滑走路端に翔鶴をもっていく。スロットルを絞ってさらに減速。機械装置状況指示器にも異常は無い。フラップと主脚を下ろす。スラストを絞る。背面のエアブレーキが立ち上がる。車輪が接地。機首をややあげながら速度を落としていく。機首の脚を下ろしブレーキ。翔鶴は大型の迎撃機とは思えぬほど軽やかに地上へと降り立つ。安定感のある荘重な着陸。

誘導路へと入り駐機場に停止した。ガクンと機体が揺れ、翔鶴が止まった。ほぼ定位置だった。先に下りた怜人も全くずれていない。機体を止めることは護も得意だった。

透明のキャノピーが開く。初夏の光が跳ね返ってキャノピーが煌く。誘導員が用意したタラップを降りる。護はヘルメットを脱いだ。一九歳にしては多少幼い顔立ちをしている。パイロットというより、どちらかと言えば素朴な勤労青年という、この国では最も好感を持たれるタイプだった。汗で額に張り付いた前髪を拭う。規定ギリギリに髪の毛を伸ばしているが、洒落っ気があるわけでもなく単に不精なだけだった。

整備員と共に簡単な機体のチェックを終わらせる。
「まずまずだな。大事にいたらないでよかった」
「敵機が近くに見えたときは、慌てました」
本当に今日は危なかった。最後の最後で向こうが引いてくれて助かった。
「最初はそんなものだ」
ヘルメットを脱いだ怜人は汗一つ掻いていない。

怜人はパイロットとしても、指揮官としても優秀だった。二九歳という諸外国の空軍では若い方だが、全体的に低年齢の防空赤衛隊飛行中隊長としては平均的な年齢より少し若い程度だった。筋肉質の長身痩躯、苦味ばしった容貌はまさに人々がイメージする通りのパイロットだった。
「よし、写真機をよこせ。早速現像させる。手が震えてないか、お楽しみだぞ」
怜人はそう言うとカメラを受け取り、先に立って歩き出した。

整備車輌や行き交う整備員の喧騒で何も聞こえない。
二人は連れ立って、警戒待機任務用の格納庫に向かう。誘導路には空気を滲ませる陽炎が立ちのぼっている。

警戒待機任務用の掩体では、予備の翔鶴と別のパイロット二人、飛行管理員や整備員が待機していた。何かありそうだという空気を嗅ぎ取り、すでに待機所から出ている。三沢に展開する第三飛行連隊は中隊ごとに二四時間、昼夜三交代制で国籍不明機の警戒待機任務にあたっている。燃料消耗を抑えるため、やや低調気味ではあったが。
「おい、どうだった。なんだかまずそうだってな」
丸坊主の羽生鋭二等空尉が、軽薄な笑みを浮かべて近づく。背の

低いがっちりとした体形だった。護の先輩にあたる。二五歳の中堅、地上では常にヘラヘラしているようにしか見えないが、腕前は確かだった。
「はい。撃墜一歩手前でした」
「米帝め。俺たちのことを舐めてやがるんだな」
米帝とはアメリカ帝国主義の略だった。仮想敵国アメリカを呼ぶときは、帝国主義をつけて呼ぶ。米帝は略称だった。
「しかし、米帝も随分と大胆になったよなあ。ずかずか領空まで入ってくるとは。ソビエトが無くなってから舐められてんだ」

かつては、日本民主人民共和国の三八度国境線、非武装地帯を挟んだ地域のみならず、各地がソ連軍の基地だった。三沢防空基地も元々は日ソ共用の一大基地で、ここからソ連海空軍の爆撃機が示威と訓練を兼ねて遠く太平洋上まで出撃した。

「お疲れ」
鋭とペアを組んで待機していた風野鋼三等空尉が護に声をかける。護とは同期で、防空赤衛隊には少ない女子パイロットだった。くせのついた短い髪が駐機場の熱気に揺れている。女性にしては長身で、褐色がかった肌と凛々しい顔つきから、異国の美青年のようにも見える。実際、パレスチナ人とのハーフだったが、この国自体、混血が多いため珍しくはない。
「たいへんだったな」
今から敵を邀撃するといっても相変わらず平静だろう。鋼はその名の通り、何があっても眉一つ動かさず、表情にも出にくい。飛行訓練学校時代からの同期だったが、最初はとっつき難くて閉口した。
「ああ、警告射撃までしたからな」
「今月に入ってからもう六件目だ」
「でも、今日まで大胆な奴はいなかったんじゃないか。逃げてくれてよかったよ。ともかく、こっちから戦争の引き金を引くのは願い

下げだ」
護は首を竦めた。
「おい」
怜人が護に声をかけた。
「よくやってくれた」
「ありがとうございます」
怜人が護を誉めることは珍しかった。ミネラル・ウォーターのペットボトルを放ってよこす。護は目を見張った。
「いいんですか」
「おう、もらっとけ」
ミネラル・ウォーターは西側の高級品で、空中戦闘訓練の勝者や基地内のスポーツなどで優勝したチームに配られる、ちょっとした賞品のように扱われているものの一つだった。
開けて口をつけた。気のせいか、西側の水は口当たりが柔らかくて甘いような気がした。汗を拭う。

「今日の領空侵犯機ですけど、ずいぶん無茶でした。今までもあったんですか？」
「お前らがくる前に何度かあったが、最近はあそこまで無茶する奴は見ないな」
あんな状況に何度も遭遇していると思うと、護は身がすくむ思いだった。もし、自分が編隊長だったら、怜人と同じようにできるかと問われれば、まだ無理だとしか言えない。
「それにしても、今年に入ってから妙に多い」
「飛ばす偵察機を増やしているのは確実では？」
鋼も尋ねる。
「どうせ、米帝の手の込んだ嫌がらせでしょうよ」
鋭の言葉に怜人は眉をひそめた。
「衛星打ち上げ用のロケットを朝鮮やイランに売ったとかで難癖を

つけてきているしな。八戸の海防から聞いた話だが、米帝太平洋艦隊の演習がいつもより早く始まったらしい」
「結局、むこうがいくら侵犯しても警告だけしかできないなんて、どうかしてますよ。いっそ、ソビエトみたいにスパイ機を撃墜しちまうわけにはいかないんですかねえ」
「今日の一回で終わりでは無い。今日だって下手をすると後続がいるかもしれない。気を抜くなよ」
怜人が二人に声をかけた。

護の撮った数枚の写真は半分がピンボケだったが、もう半分はプロのカメラマンが撮ったように鮮明にＲＣ１３５の姿を捉えていた。

青蒼気圏　web. ver　〈3〉

「一九四五年一〇月、アメリカ帝国主義軍が本土に上陸しました。九州を失い、東京を攻略されても、無謀な日本帝国主義は降伏しませんでした。日本帝国主義は、彼らの言うところの総司令部、大本営を信州の松代に移し、徹底抗戦を図りました」

しなやかな白い指先が、黒板に張られた日本地図の今は西日本領である長野県松代を指す。

赤衛隊では、二〇歳頃まで年齢に応じた一般政治教養の講義が非番に行われる。護や鋼をはじめとした赤衛隊の隊員たちは、パイロットから兵站部隊の要員まで、ほとんどが孤児出身者だった。共産圏の中では珍しく志願制である赤衛隊では、隊員を主に孤児から徴集していた。親の意見に左右されず、家庭も無く、国家が育てた孤児の方が忠誠心を期待できて何かと都合がよい、という判断からだった。全ては人民赤衛隊の、国家の所有物だった。

寝ては駄目だ。そう思いながら、護は目をこすった。飛行と直接関係の無い講義だという気の緩みから、ひどく眠い。

ポケットに手を入れ、太股をつねる。二四時間体制である警戒待機任務明けの上、何度も報告書、要報を書き直させられた後だから余計にきつかった。

「アメリカ帝国主義軍は、次々と核兵器を主要都市に使用しました。一方、一九四五年八月に、千島列島を解放したソ連邦軍は北海道を解放、青森に上陸。東北地方を解放しつつ、前進しました。ソ連邦軍の先頭に立ったのが、日本帝国主義占領地域で解放された愛国的共産主義者たちでした。愛国的共産主義者たちの活躍により、日本

人民は日本帝国主義の支配から解放されたのです。彼らが我が国を指導する民主的な勢力の代表、日本民主人民党を結成したのが一九四五年一二月、盛岡でのことです」

女性の柔らかい声がさらなる眠気を誘う。教壇に立っているのは、三ヶ月前に着任した飛行連隊付け政治文化指導員の紫藤慧子社会安全省二尉だった。赤衛隊では、旧ソ連や他の共産主義国家同様、一党独裁の党が軍の首に鎖をかけておくために、治安機関の社会安全省から出向する政治指導員という名の目付け役が置かれていた。党の軍ではなく、旧日本軍の残党とソ連軍の合作である赤衛隊を、人民党は全く信用しておらず、常に権力の奪取を恐れていた。政治指導員は全員が幹部（士官）以上で、ここ三沢基地の最高責任者である第三飛行連隊長も一佐待遇の政治指導員の最高責任者、連隊書記の承認がなければ作戦を実行できない。。

政治文化指導員の任務は赤衛隊員に正しい政治意識を持たせるため、政治講話や図書の推薦、映画の上映などを行う他、年少の隊員には一般政治教養講義も行う。

絶大な力をもっている政治指導員だったが、政治と経済の低迷により人民党と社会安全省はかつての力を失い、送り込まれる政治指導員もある程度、赤衛隊と妥協せざるを得なくなっていた。慧子も飛行連隊付け政治指導員の長である連隊書記のような昔気質のガリガリの政治指導員ではなく、協調的な政治指導員だった。外見も政治指導員にはとても見えない。後ろで結っているものの長く伸ばした艶やかな髪、おっとりした雰囲気を与える顔立ち、知性よりも地味な印象を与える眼鏡、二十代半ばといった年齢も頼りなさを感じさせる。政治指導員というより、人民図書館の司書や人民小学校の新任女性教師といった方が相応しい。見るからに世間ずれしていない様子は、人民党幹部の娘だからだという噂もあった。ちなみに独身だという。

「一九四六年四月、松代をアメリカ帝国主義軍が占領したことにより、第二次世界大戦は終結しました。その後、ヤルタで結ばれた日本の四分割案が修正され、北緯三八度で日本は東側共産主義勢力と西側帝国主義勢力に別たれることになります。南西側の占領地域は、アメリカ帝国主義によって傀儡政権が樹立され、今も不法に占拠されたままです。一方、北東側においてはソビエト連邦の下、即座に独立が達成されました」

護は、もう眠気に耐えられそうになかった。瞼が勝手に下がってくる。墜落だ。

「全ての民主勢力が加わった民主的選挙が一九四七年五月に実施され、日本民主人民党が第一党となり、我が日本民主人民共和国が成立しました。五月三日には人民主権と戦争放棄を謳った新憲法も発布され、日本人は独立と真の共産主義への道を歩き出したのです。日本民主人民党は、日本帝国主義とアメリカ帝国主義、二つの魔の手から北半分……北緯三八度以北の日本を救い出したと言えるでしょう」

もはやノートの字も読めないものと化し、鉛筆が掌から転がっていく。

「長かった東亜、太平洋における帝国主義国家間の大戦は、ソビエト連邦の参戦により、ようやく終止符が打たれました。この戦争を終わらせた要因はなんでしょうか？」

慧子は少し迷いながら、講義を受けている隊員を指差した。

「労働者、農民からなる日本人民、わけても前衛たる人民党員の抵抗です」

政治的に正しい模範解答以外は求められない。

「はい、その通りです。日本帝国主義が敗れたのは歴史の必然です。彼らは歴史の法則を学んでなかったのです。すなわち、帝国主義は

必ず人民民主主義勢力に敗れるという法則をです。日本帝国主義を破壊したのは、直接的にはアメリカ帝国主義の軍事力による海上封鎖と爆撃ですが、究極的な原因は日本帝国主義自身の搾取的体制にあります。ソ連邦軍の先頭に立った偉大な同志たちに呼応し、立ち上がった日本人民によって、日本帝国主義は葬り去られたのです」

事実は異なった。ソ連が占領した北海道と東北を管理するための傀儡政権として樹立されたのが、日本民主人民党の正体だった。愛国的共産主義者とはソ連の工作員に転身した日本人たちのことだった。

「長らく日本帝国主義の圧制に苦しめられ、同時にアメリカの非人道的攻撃にも晒されてきた日本人民の抵抗が戦争を終結させたのです。労働者が工場から去り、農民が田畑を耕さず、兵士が武器を取らなければ、帝国主義的戦争は遂行不能です」

慧子がチョークで日本人民の抵抗、と大きく板書した。

「では、正式に講和条約が発効し、戦争状態が終結したのはいつですか」

誰も答えない。

「えーと、同志風野三尉？」

少しざわつく。

ぼんやりとした頭で隣の席の鋼を見た。鋼は腕を組んだまま正面を向いて豪快に眠っていた。護の眠気はいっぺんに吹き飛んだ。

「鋼、起きろ」

肩をつつくが起きる気配が無い。護は慌てた。政治指導員に対してこんな無礼をはたらけば、罰則があるかもしれない。

「仕方ないですね。同志風野は警戒待機任務で疲れているのですから、寝かせておいてあげましょう」

慧子は苦笑を浮かべた。教室の中で笑いが漏れる。

「では……隣の同志北上三尉」

「……わかりません。同志指導員」
　眠くて講義どころではなかった。聞いていなかったのだ。
「あら、困ったわね。えーと、じゃあ……」
　おろおろとする。ひどく子供っぽい表情だった。
「同志指導員、一九五一年のハバロフスク講和条約です」
　十三、四歳の整備員が元気よく答えた。

　眼鏡を外せば美人と言われている慧子は、隊員にはなかなか人気がある。護も講義で積極的に答えて関心を惹こうとまでは思わなかったが、年上なのに可愛らしいと感じていた。一度、整備中のＳｕ２７ＳＪ翔鶴を熱心に見ていて、話かけられたことがあった。慌てて敬礼する護に頓着せず、うっとりとした表情で、綺麗な飛行機ねえ、と呟いた。はい、同志政治指導員、綺麗な飛行機はよく飛ぶんです、と答えると、なんとなくわかるわ、と言って笑っていた。邀撃機を見にきたり、仕事以外でパイロットに声をかける政治指導員など今まで見たこともない。慧子の政治指導員らしくないところには好感をもてる。
「そうです。ハバロフスク講和会議により、日本とソビエト連邦の間に、正式に講和条約が結ばれました。また、東欧及びアジアの国々とも講和条約を結び、国際社会の一員に迎え入れられたのです。不幸なことに前後して、中国および朝鮮戦争が勃発し、第一次日ソ安全保障条約が締結されて赤衛隊が発足します。今日の講義はここまでです」
　起立、礼。号令が響き渡る。ざわざわとした声が満ち始める。

「紫藤指導員で助かったな」
　誰かが寝ている鋼を見て笑っていた。
「おい、起きろよ」
　肩を揺らす。
「ん」

鋼は目を瞬いた。
「いったん、減速してそれから……」
ぶつぶつと呟く。
「夢の中でも空を飛んでいたのか」
「ああ。もう少しでうまくいきそうだった」

護は、旨くも無い玄米を噛み締める。
孤児院の頃や訓練生の時は、ゆっくり食事をとることさえできなかった。そこでは、共産主義の掲げる平等とは全く逆の競争が繰り広げられていた。誰かを蹴落とさなければ食事にもありつけない。防空赤衛隊の中でもエリートであるパイロットになるということは、きちんとした食事にゆっくりとありつけることだった。赤衛隊に志願したのも、出世はそれほど望めないし、のんびりとはできないが、食事だけは恵まれていると聞いたからだった。空を飛べて腹一杯食べられるなら言うことなしだ、などと今思えば護自身さえ笑ってしまうほど、単純に考えたものだった。
「鋼、さっきの講義で寝てただろ」
「うおっ、度胸があるな、鋼は」
「鋭さん。こいつ、堂々と腕組んで前向いて寝ているんですよ」
見知ったパイロット同士は、いちいち階級や同志をつけたりはしない。パイロットたちは、名前で呼び合うという風習があった。
「ノートを取らせて」
「少しは講義聞けよ」
「飛ぶことには関係ないから」
鋼は玄米を口に運ぶ。
「それもそうだけどさ」
「護は出世したいのか」
「違うよ」
「だったら、そんなに身を入れなくても構わない。飛べればいい」
防空赤衛隊のパイロットならば、誰しも同じだった。この国で手に出来る空を飛ぶチャンスを失いたくなかった。
「えー、あのーっ」

調子外れの声が割れたスピーカーから響いた。
「あっ、あれ、音がしませんよ。え……もうついている？」
慧子の声だった。誰かが笑った。
「三沢基地内の同志の皆さん。ただいまより人民の前衛、日本民主人民党代表、人民党首席書記による緊急放送があります。手の空いている同志はラジオ、ＴＶなどをつけて視聴してください」

食堂のＴＶが点けられた。ＴＶの放送は一七時から二二時までで、今は放送されていない。いつも通り砂嵐が映る。たまたまテーブルの隅にいた護が調子の悪い受像機を叩く。しばらくすると、緊急発表という文字が流れた。緊張した顔のアナウンサーが現れる。
「本日、我が日本民主人民共和国は、北方海域において核反応機材の実験に成功しました。繰り返します。本日我が日本民主人民共和国は北方海域において核反応機材の実験に成功しました。続いて首席書記の平和宣言をお聞きください」

棒読みの声が繰り返される。

画面がぶれる。政治の混乱でここ数年、首席書記は何度も代わっていた。日本民主人民共和国は奇妙な独裁国家だった。友好国の北朝鮮や今は亡きルーマニア、アルバニアのように全権を掌握した独裁者が君臨しているわけではない。党が人民を指導し生活の隅々まで管理していたが、実際の生産計画の管理運営は官僚が行っているため、官僚が予算配分の権限を持っていた。そして、体制を保証する監視、暴力装置である強力な警察力を持つ社会安全省に党と官僚は格別の計らいをしている。
ちなみに、赤衛隊は権力闘争の蚊帳の外だったが、かつてはソ連の後ろ盾で新兵器を購入する他、施設の拡充、海外派遣や有事における権限の強化を実現していたが、現在は予算を確保するだけで精一杯だった。それぞれの勢力が縄張りを持ち、勢力争いを繰り広げ

つつ、均衡を保って相互依存しながら共存共栄する独裁者無き独裁政治。それが日本民主人民共和国の姿だった。

「親愛なる同志日本人民のみなさん。本日、我が国初の核反応器材の実験が成功しました。今回の核実験は、挑発及び敵視政策を改めようとしない帝国主義国家の理不尽なる暴力からの、必要最小限度の自衛を目的としたものであり、正当なものであります……」

歯の間から息が漏れているような、上ずった声が流れる。

「昨日うろついていた米帝機は、これを調べていたのか」

鋼は無言で頷いた。

青蒼気圏　web. ver　〈5〉

毎朝六時起床。朝食後、飛行中隊ごとにジョギングをこなし、西側の機器が備えられたトレーニングルームで筋力を鍛える。遠心力を発生させる機器を使い、機動時にかかる負担を再現する耐G訓練もあったが、Gによる身体の負担を軽減するもっともよい方法は、単純に首の筋肉や腹筋、背筋を鍛えることだった。時々、荷物を背負ったまま長距離を踏破するという歩兵まがいの訓練までした。訓練を怠れば、首の骨がずれるなどGによる後遺症は大きい。

護は額にびっしりと浮いた汗を拭った。隊員訓練学校や飛行訓練学校の時は罵声を浴びせられながら、必死でトレーニングしたが、今は、それなりにこなせるようになっていた。最初は辛いだけだったが、段々と楽しくなっていく。身体を鍛えることは、自分が自分であることを実感させてくれる。

解散後、飛行中隊長は、来週の予定やローテーションを説明した。休日が巡ってきた。

休日といっても、飛行中隊でスポーツをするか、基地周辺をぶらついたりする程度だった。

「鋭さん、ビリヤールトでも行きませんか？」

「馬鹿いえ。お前らなんかと玉突きで遊んでいる暇なんかないよ。俺は女のところに行くので忙しいのさ」

隊内の男女付き合いは禁止されていたから、街に恋人を持っている隊員は少なくない。

フライトルームの出口で鋼と顔を合わせる。

「今日、どうするんだ」

「図書館」

「熱心だな」
鋼は付き合いのいい方とは言えなかった。パイロットは男所帯だから仕方がないかもしれないが、他の隊の女子パイロットたちともあまり一緒に出かけない。たまの休日でも、基地の図書館で勉強をしている。

不意に慧子が顔を出した。
「あら、同志北上、同志風野も、お二人ともお休みなの？」
「ええ。同志紫藤指導員」
「私も今日はお休み。よかったら、私と街まで遊びに行かない？」
「はあ……」
一瞬迷う。
「構いません。せっかく同志指導員がおっしゃるのですから」
珍しく鋼は積極的だった。政治指導員にゴマを擦ることなどしない性格なので、本当に慧子と外出する気なのだ。女同士の気安さもあるだろうが、監視役の政治指導員と出かけることなど考えられないことだった。
「おい。どうした」
怜人が声をかけた。部下が政治指導員に呼び止められているようにしか見えなかったのだろう。
「同志紫藤指導員、何か部下に問題でも？」
「いいえ、ただ、私も休暇なので若いお二人のピロートと親睦を深めるため、一緒に街まで出かけようとお誘いしているんです」
無邪気な笑顔を向ける慧子。
「そうですか。それは大変、結構なことですな」
妙な顔をする怜人。
こんなことを言い出す政治指導員など、ほとんどいない。面食らうのも無理はない。
「せっかくのお誘いだ。お前ら、いってこい」
「同志飛行中隊長も御一緒しませんか？」

「いえ、私は遠慮したい。仕事が残っているので」
　怜人の飛行中隊にかける並々ならぬ熱意は、誰もが知っていた。休日を返上して中隊の各部署の調整を自ら行い、少しでも稼働率をあげる努力をしていた。そのせいか、休日も隊員たちと過ごすことは少なく、月末の宴会でもさっさと席を立ってしまう。任務以外の話もしたことがない。宴会好きな他の中隊長とは違っていた。
「では、お二人をお借りしますね。着替えて十五分後に集合です。行き先は機密ということで」
　慧子は朗らかにそう宣言した。

　運行本数が少ない電車に乗った三人は、通り過ぎていく家や電信柱の数を数えたりした。ただ遊びでやっているわけではなく、眼の訓練だった。
「パイロットさんは、そんなことまでするのね」
　慧子は感心しきりだった。
「ええ、まあ、ちょっとしたことでも活かせますから。怜人さん、いえ、同志中隊長から習ったんです」
「あの人、真面目そうだものね」
「すごいパイロットですよ。俺たちは皆、尊敬しています」
「ふうん」

　慧子は飾り気の無い白いブラウスと黒いスカートという地味な私服、護と鋼は二人とも糊の利いたブルーグレイの防空赤衛隊制服を着用していた。
　護と鋼、慧子が降り立った青森駅舎は、モスクワ駅を模したソビエト式の建築物で外観は瀟洒に見える。大理石のがらんとした広大な駅に人影はまばらだった。旅行や長距離移動は許可制で、職場や党の許可証がないと出掛けることもままならない。赤衛隊も同様で二人は休暇外出許可証を発行してもらっていたし、慧子も連隊書記から外出許可証を発給されていた。唯一の例外は党幹部や官僚だっ

た。

三人は、この国ならどこにでもあり、そして、この国以外は歴史の遺物と化したマルクス像がある駅前広場に出る。

駅前や広場、公園などは映画のセットのように生活感のない清潔さを保っていたが、一歩、裏に入ると欠陥だらけで居住者のいない集合住宅が立ち並んでいる。街行く人々も冴えない表情をしていた。都市に戸籍のある人々は三代前から労働者、革命活動従事者でなければならないという法律があり、最も恵まれた人々であるはずだった。街全体がくすんだ色をしている。青森市もまた、この国の典型的な主要都市の一つだった。

「なんだか寂れてますね」

「そうね」

率直過ぎる鋼の言葉に慧子はくすくすと笑った。

九〇年代に入るとソ連崩壊により共産圏は消滅、日本経済はさらに厳しくなった。起死回生のため、市場経済を導入したが、今度は貧富の格差や腐敗が前にもまして進んでしまう。病状も酷いが治療法が輪をかけて酷いので、もはや手のつけようがなかった。

「どこか行きたい場所はある？」

「お任せします」

鋼は物珍しげに市内を見渡した。

「じゃあ、映画でも見る？　休日の定番」

青蒼気圏　web．ver　〈6〉

なぜか、鋼が見たいと言った怪獣映画を見終わると、ちょうど昼時だった。

「いいお店に連れて行ってあげるわ。二人とも、期待してね」

交差点では人民警察の女性警官が、ロボットのように腕を振り、交差点で交通整理をしている。電気を節約する生きた信号機だった。自動車の交通量は少ない。

社会安全省警備機動隊の黒い制服ばかりが、なぜか目立つ。角張った車体を持つロシア製のＢＴＲ６０ＰＢをライセンス生産した六八式装甲隊員輸送車が数台停車していた。

ソ連はＫＧＢ国境警備隊や内務省軍という大規模な国内保安軍を有していたが、日本民主人民共和国の治安を維持する社会安全省も、亡命者や密輸を取り締まる国境保安隊と、国内の反政府活動を鎮圧する警備機動隊、二つの武装組織を保有していた。特に警備機動隊は、赤衛隊を牽制するために治安部隊とは思えないほどの規模の拡大と重武装化が進んでいた。装備もよく、高い練度を保っており、軍と言って差し支えない。警備機動隊と国境保安隊の隊員もまた、ほとんどが孤児だった。治安機関である社会安全省の重武装を許し、軍そのものは少数に止めて在日ソ連軍に任せてしまうというやり方こそ、東側で最高の経済発展を遂げた要因の一つでもあったが、二つの系統の違う武装組織の存在はあらゆる面で非効率であり、不安定要因にもなる。特に政治経済が混乱している今は。

青森の県庁舎等、威圧的で無機質な建物が立ち並ぶ一角に位置するビル。その地下のロシア料理店に案内される。

ソ連崩壊後、ウラジオストクから流れてきた料理人の店だという。ロシア式の装飾が施された豪華な店内の客は党や官庁関係者ばかりで、防空赤衛隊制服の十代の隊員などは、まさに場違いそのものだった。護は気後れしたが、慧子は店内の訝しげな視線をものともせずに堂々とマホガニーのテーブルについた。好奇心剥き出しで、周囲を見回す鋼。

「あの、こんなお店入ったことないんですけれども」

外食は基本的に食券制だったが、この店は食券など使えそうになかった。基地内で生活の全てが賄え、そもそも物を買うという習慣自体がない。嗜好品も厚生といわれる売店で買い、外食券や小遣いとして支給される僅かな現金を使うこともそれほどない。外食と言っても、どこでもいつでも代わり映えの無い味の薄いメニューを出す人民食堂がせいぜいだった。

「大丈夫、大丈夫。私がいいって言っているんだから。当然私のおごりね」

社会安全省の一介の新人政治指導員が、こんな店に入れるのだろうか。慧子は噂どおり、党幹部の娘で何か中央や幹部と特別な繋がりがあるのかもしれない、と護には思えた。

料理が運ばれてきた。

前菜のサラダは新鮮でいい野菜を使っていたし、ボルシチも具が多かった。ピロシキも皮はサクサクと仕上がり、中には味付けされた茸がぎっしり詰まっている。ロシア式の水餃子であるペリメニは素晴らしい食感で、メインの壷焼きの中身は、タマネギとジャガイモだけではなく、牛肉までふんだんに入っていた。パイロットは特別に鶏肉を食べることができたが牛肉は珍しい。三人は単調な食堂の食事とは大違いの料理を堪能した。

締めくくりに西側のティーバックの紅茶が出た。鋼は早速、ジャムを入れる。戦後広まった日本式の飲み方で、本場のロシア式はジ

ャムをお茶請けにする。
「どう、美味しかった？」
「はい」
鋼が素直に頷いた。
「同志北上はいかが？」
「とても旨かったです。御馳走になりました」
「でも、何か気になっているのね」
慧子はすっと目を細めた。
「私のこと？」
「いえ……」
「私が、何でこういうお店に出入りできるかっていうことは、とりあえず秘密。あなたたちは、きっと、こんなお店で贅沢をすることに抵抗があるのよね」
図星だった。
「ええ、違和感があります」
赤衛隊では質実剛健が奨励されていた。パイロットの食事も栄養価は高いが質素なものだった。護もそれを好ましく思っていた。
「まだ誤解があるわね。贅沢は素敵よ。とてもいいことなの」
慧子が真面目な顔をする。
「でも、それは特権的な……」
きちんとしたサービスを受けられる店で食事ができるのは特権だった。特権のおこぼれに預かっているのだと思うと、あまりいい気はしない。
特権を享受できるかどうかは、特権層の家に生まれたか否かで決まる。孤児か、幹部の子弟か。結局は生まれが全てで、これでは金が全ての西側より悪い、と人目の無いところでこぼしている者もいた。
「確かに特権層というといいイメージは沸かないわね。本来なら人民を指導すべき立場の人々が、無能なくせに特権を振りかざして贅

沢をしている。よくない傾向だわ。でもね、だからといって贅沢そのものが悪いわけではないわ」
淡々と続ける慧子。
「贅沢がなければ、張り合いがないとは思わないかしら」
「張り合い……ですか。でも、俺は飛べるだけで充分です」
話を聞きながら紅茶を口に運ぶ。禁じられた味。西側の贅沢の味。
「あなたたちは親もいないから実力だけで、ここまできた。しかも、髪の毛の先から指の爪先まで国のものだし、米帝が攻めてきたら戦わなければならない。だから、少しくらい贅沢すべきなのよ。あなたたちは能力に見合ったものを与えられていないわ」
「そうでしょうか……鋼は？」
「私も別にそうは思っておりません。美味しいものを食べるのは好きだけれども、たまにでいいし。それより空中戦闘訓練を増やして欲しいです。燃料の問題らしいけれど」
「本当に真面目ね。あなたたちは。理想の共産主義的ピロートね。全てを祖国と主義のために捧げている」

入隊して以来、毎朝、神聖で地面に落とすことすら許されない国旗の掲揚、国歌であるインターナショナルの日本語訳版を歌わされ、二言目には、祖国日本と共産主義の栄光のため、と言われてきたが、その実感は薄かった。

祖国や主義よりも、孤児がまともに評価されて、いい飯を食うには赤衛隊が一番だったし、空を飛びたいという漠然とした憧れが護を突き動かしてきた。パイロット候補生になってからは、ひたすら学んで、職人のように技術を磨いた。国のことなど考える余裕もなかった。護や多くの孤児出身者にとって、防空赤衛隊パイロットとは、身分の保証であり、空への切符であり、腕を磨き競い合う職だった。

政治指導員が熱心に説く割に、国を愛するだとか守るという意識はあまりない。ひどい待遇の孤児院はともかく、パイロットとしての技能をつけさせ、評価してくれた国には恩義を感じてはいたが、それでも、どちらかといえば教官や怜人といった個人、配属された三沢基地、防空赤衛隊への感謝だった。

「あなたたちみたいな能力があって評価されるべき人が、評価されるようにしていかなければならないと思うの。だから、あなたたちが贅沢をすることは、とても素敵なこと」

政治指導員らしくないどころではない。慧子が全く別の世界からきたような、そんな印象さえ受ける。

「今までの我が共和国は、ありもしない、みんなのための幸せを追い求めてきて失敗した挙句、陰に隠れて特権層が暴利を貪ってきたの。これからはね、個人の幸せを追求するべきだわ」

「同志紫藤指導員は、西側みたいなことを言いますね。大丈夫なんですか？」

思わず口にする護。

「同志北上の方が、なんだか頭の固い政治指導員みたいよ」

慧子は苦笑して混ぜっ返した。

青蒼気圏　web. ver　〈7〉

様々な店が軒を連ねる人民市場、アーケード街が広がっている。店には物が溢れているのに、買っている人は少ない。護は二種類の人間がいることに気がついた。西側風の装いをした物を買える一割の人。東側の薄くて質の悪い人民服を着て、もの欲しそうに値札を眺める九割の人、一割の人々は札束を出してものを買い求め、九割の人々は安い店に行列を作っていた。ここにはいない種類の人々は、九〇年代から都市の周囲にドーナツ状に形成されたスラム街か、さもなければ世界のあらゆるものが手に入る党幹部、高級官僚専用のデパートに行く。その党幹部や官僚にしても細かい等級の区分付けがあって、買えるものと買えないものが決まっている。平等とは名ばかりの階級社会だった。

五年前、党の経済改革五ヵ年計画により、自主自活方針が打ち出されてから一部の商業が自由化されたが、経済は一向によくならず悪化した。配給を停止され、無料だった医療、教育費を負担させられる一方で、党幹部や官僚の係累が特権で私企業を経営してますます豊かになっていった。経営手法に疎い彼らが経営破綻を引き起こしても、全て国費で補填された。自称労働者と農民の理想郷で、党と官僚だけが不正な資本家として君臨しているというのは、ひどい皮肉だった。

「ここはね、正直、あまりお勧めできないわ。本物の市場に行きましょう」

三人は、どんどんと狭い路地に入り込む。小さな露店が茸のようにびっしりと詰まっている。怪しげな飲み屋から靴磨き、トラクターや地上赤衛隊のトラック、西側のビデオやCDまで、あらゆる物が売られていた。見るからに成金といった西側の格好をした者や、

ポケットを札束で膨らませた労働者風の男が行き交う。
「闇市ではないですか」
「ええ」
慧子は嬉しそうに頷いた。
闇市への出入りは当然、禁止されていたが、時々買い出しに行く隊員も少なくなかった。
闇市は、公認の人民市場を取り囲んで境目を無くす様に溶け合っていた。価値の下落した円に代わり、ドルか西日本のジャパンドルさえあれば、何でも手に入る闇市は拡大する一方で、さすがの社会安全省も全て取り締まることはできず、半ば黙認の形になっている。最近では党幹部が闇市を仕切り、後ろ盾となっているという話だった。
「禁止じゃないんですか。闇市は」
「そうよ。でも、ここが市場らしい市場よ。お金さえあれば党の幹部だろうが、労働者だろうが関係ない。ある意味、平等だと思うわ。ここなら、たくさんあるものは安く買えるし、貴重なものは高くなる。みな競争するから安くなるけど、かといって原価を割り込んだりはしないもの」
服より高い糸の笑い話は有名だった。市場が存在しないと適正な価格すらつけられなくなる。

闇市から表通りに出る。
「おい、待て！」
大声が響く。襤褸をまとった男の子が小脇に黒パンを抱えて走っている。後ろから一人の中年男が怒鳴って追いかけているが、子供の方がすばしっこい。
日本民主人民共和国には、いないはずの路上の孤児だった。時々、孤児院を逃げ出す子供がいた。街で必ず捕まり、厳しい折檻を受けることは間違いない。運良く逃げおおせても、孤児が生きていける環境ではない。夏を乗り切っても凍死は免れない。

子供が街路に飛び出す。十分距離はあったが、子供の存在を無視して大型車が走ってくる。急ブレーキの音が鋭く響いた。重い荷物の入った袋が落ちるような鈍い音がする。
国産車の大河が子供を跳ね飛ばした。
大河には青森市の公用車を示す小旗が立っていた。そもそも一般の市民は自家用車など持てない。二〇年前の自家用車予約は予約のままだった。
まばらな通行人はすぐに目を伏せて、足早に立ち去っていく。パンを盗まれた中年男も、舌打ちしてもといた道を引き返す。関わり合いにはなりたくない、という意志表示に他ならなかった。

護は、すぐに子供に駆け寄って様子を見た。救急の訓練は受けていた。腕が不自然に曲がっている。骨折だった。気を失っている。
大河は後ずさりするように、バックして再発進しようとする。
護の頭に血が上った。滅多にないことだったが、意識する前に行動していた。大河の窓を思いきり叩く。
ガマガエルのような男が、窓を開けて怒鳴った。
「私は青森市人民委員会道路建設課課長の高崎だぞ。何をする気だ！」
「子供を撥ねたんだぞ。自分の運転手が起こした事故に何の責任もとらないつもりか！」
護が、誰もが振り向くような大声で叫んだ。
「なんだ、貴様、赤衛隊風情か」
「俺は防空赤衛隊第三飛行連隊、北上護三尉だ。運転手は傷害過失だろう」
「馬鹿な、なぜ赤衛隊なんかに従わなければならない。ふざけるな！」
「赤衛隊員に臨時逮捕権があるんだ！　貴様は現行犯だ！」
当初、人民警察予備隊として創設された赤衛隊には逮捕権が与えられていたが、その逮捕権は専ら憲兵である赤衛警務隊が、隊内の

犯罪を取り締まるために行使していた。今ではほとんど忘れられていた権利だったが、護はなぜか、それを覚えていた。
「おい、少し落ち着け。護」
押さえようとした鋼を振り払う。
「もういい、出せ」
「逃げるな！」
窓に手を突っ込んで、無視をして車を出そうとした高崎の首を掴み、運転手に話しかける。
「何をする、離せ！」
「救急車より、こっちの方が早い。運転手さん、病院に連れていってくれ。あなたに有利な証言をしてやれる」
事故や急病でも救急車の出動はひどく遅れる。車を使ったほうが確実だった。だが、運転手は、まだ躊躇っていた。
「あの、同志。私、社会安全省、三沢基地第三飛行連隊政治文化指導員の紫藤慧子と申します。同志のお手伝いをできるかと思いますが」
慧子が真顔で、押さえつけられた高崎の顔を覗き込んだ。いかに下位とはいえ、社会安全省の要員を粗末に扱うことは、単なる市役所課長にはできない。
「ど、どうすればいい」
「この車で病院までお願いします。社会安全省が責任を持って処理します」
責任を持って処理するとは、揉み消してやる、ということだった。
「わ、わかった。こいつをどうにかしろ」
「わかりました。同志北上、もういいですよ。離してあげてください」
護は高崎を離して子供を抱えて車に乗りこんだ。慧子と鋼も続く。
「病院に連れていってやれ。あとで報告させてもらうからな」
高崎は三人を睨みつける。
大河は野次馬の中、エンジンをかけて走り始めた。膝に乗せた子

供は、意識を失っていたが脈拍や呼吸には乱れが無い。
「同志紫藤指導員、ありがとうございました」
「なんの、大したことじゃありません」
慧子は、ちらりと子供の顔を見た。
「同志北上三尉が助けようとしなければ、私も何もしませんでした。誰も他人を救ったりはできませんから」
少しだけ唇を歪める。
鋼は終始無言だった。

「馬鹿だな、お前らは」
飛行中隊長の怜人は笑っていたが、飛行連隊長は濃く煎れた代用コーヒーを飲んだような渋い顔をしていた。
護たちが、青森市から帰りついたのは今朝だった。電車が遅れていたため、門限はおろか、夜間外出禁止令にも違反していた。門限を四八時間オーバーすると脱走罪となる。
護と鋼は、慧子の上司、一佐待遇の政治指導員である連隊書記に絞られたあと、今度は飛行中隊長である怜人と飛行副連隊長の二佐に呼び出された。第三飛行中隊、第八飛行中隊、第六〇一飛行中隊、中部支援飛行中隊を束ねる三沢基地航空部隊の長、基地司令も兼務する空将補、第三飛行連隊長にまで出頭を命ぜられた。
「門限破り、その原因が役人ともめたとはな。同志指導員がなんとか収めてくれたからよかったようなものの、お前ら、下手すればピロート廃業だぞ。何をしたかわかっているのか！」
年のわりに老けて見える連隊長は、地上での指揮統制を行う立場であり、ほとんど邀撃機には搭乗しない。そのせいか、少し腹が出ている。パイロットの腕よりも管理や運用で出世した。実質上の統率者であるベテラン、副連隊長も二人を睨みつけている。
「青森市からは思いきり怒鳴り込まれたし、こっちはえらい迷惑だ」
「まったく、役人となんぞ喧嘩してもいいことなどないぞ。反省しろ」
口ではそういうが、怜人は明らかに面白がっているようだった。
「申し訳ありません」
鋼が不服そうな顔をする。
「さてと、処分の方だが……北上護三尉、風野鋼三尉、両名には二週間の労農作業部隊勤務を命ず。当然飛行は禁止だ」

「二週間もですか」
鋼が大声をあげた。
「軽過ぎるくらいだ。営倉入りにならなかっただけでも有り難く思え」
連隊長は言い捨てた。
「退出してよろしい」
三人は連隊長室を出た。

青蒼気圏　web. ver　〈9〉（前書き）

次の日から、護と鋼は政治生活組織指導員による無意味な講習を受ける他は、労働作業に精を出す羽目になった。
労農作業大隊長の鳥井一尉は赤衛隊員というより、農民そのものの相貌をした四〇代後半の人のよさそうな男だった。
「新しい人がくるって聞いてたけど、ピロートさんだとは思わなかったよ。もっと扱いづらいかと思ってたら、素直な若い人でよかった」と陽に焼けた彫の深い顔を皺くちゃにして笑った。

防空赤衛隊の花形であるパイロットは、階級にも頓着しない、時には政治指導員すらも重んじない、一種独特の空気を持っているエリート集団として羨望の眼差しを受けつつ敬遠されていた。もっとも、護や鋼は、他の隊員程意識していなかったが。
面倒な書類をいくつも作り、資材を調達して基地や寮の修繕工事や滑走路の清掃をし、自主自活のスローガン通りに基地に作られた畑や鶏の世話までした。燃料や機材に予算を使わなければならない防空赤衛隊は食糧を自前で賄うべく工夫しており、基地の周辺はほとんど畑や鶏小屋と化していた。労農作業大隊は本来の隊員の他、退官した隊員もいるパイロットとは全く違う世界だった。
鋼は、たちまち作業部隊の隊員と仲良くなって先に立って働いていた。翔鶴を飛ばすということは、翔鶴にさえ手を触れない様々な人々の力があってのことだった。
時々、鋭が冷やかしにきて、泥まみれの作業服姿の二人を見て腹を抱えて笑っていた。二人は黙々と働いた。

茄子や胡瓜、トマトなどの野菜が陽を浴びて輝いている。もう少しで収穫できるだろう。今年は、一九九三年の大凶作ほどではない

ものの、冷夏で収穫はいまいちのようだった。農民たちが作る米が心配だと鳥井は、いつもこぼしていた。餓死者を出すほどではないが、日本の食糧事情はよいとは言えなかった。

午前の畑仕事のあと、雑穀入りの握り飯二つという簡素な昼食を終えた鋼と護は陽射しを避けて、倉庫の影に寝転んだ。夏の光が垂直に降り注いでくるが、日陰はいくぶん過ごしやすく、時折風が涼を運んできた。崩れない積雲がゆっくり動いていく。護は空が変化するのではなく、プラネタリウムのように天球が動いているように思えた。横に目をやると鋼が目を瞑っている。鋼の短い前髪が風に揺れていた。

急に鋼が目を開けたので、なんとなく居心地が悪くなり、視線を青い空へ戻す。地上から、のんびりと空を見上げるのも悪くなかった。

「そうだ、誰か手の空いている人を呼んで欲しい。今日もやるから」

「わかった」

懲罰を受けた二人は飛行訓練を禁止されていたが、翔鶴に乗ることは禁じられていない。西側のシミュレーターのような機械もあるが、性能が低すぎて使い物にならなかった。コックピットに座って、色々と状況をシミュレーションしてイメージトレーニングをした方が役に立つ。

「休みの時間を使って、勘を無くさないようにしないと」

「復帰した後、しくじって、ずっと作業大隊配属はごめんだからな」

護は空に目をやった。青空が眩しい。早く、空に帰りたかった。

怜人は、パイロットスーツから作業服に着替え、中隊長室に戻った。十二機を率いる中隊長ともなれば、自分の飛行時間を割いて、管理や教育に集中せざるを得ない。

燃料の割り当てが減っているので、どうしてもまだ伸びて行く若いパイロットのためにも自重しなければならない一面もあった。千歳でＭｉＧ２９ＳＪ飛燕に乗っていた小隊長時代の方が気楽だった。部下たちには口うるさく指導しているが、肝心の自分の腕は、段々と落ちてきているような気さえしている。俺はパイロットのはずだが、と思うとやるせなくなる。

施設は空襲を避けるためほとんどが地下化されている。空調などという贅沢なものは、中隊長室にさえない。扇風機も故障していた。

連隊長室には空調があったな。

第三飛行連隊長は、地位を濫用して私腹をこやしていた。主に輸送飛行中隊の輸送機を使い、輸送業を行って輸送訓練と称する他、労農作業大隊でも輸送業を請け負っている。運んでいるのはロシアや北中国、韓国の品ばかりでなく、禁制の西側のものまで入っているという。

部下は無論、政治指導員さえも懐柔され、連隊長を訴える者はいなかった。

だいたい、自活方針を打ち出している時点で間違っている。金になるなら任務以外の活動に精を出すのは当たり前だ。

海防赤衛隊は組織ぐるみで哨戒艇によるカニ漁を行い、地上赤衛隊の普通科部隊の中には、完全に土木作業や農作業専門と化した屯田兵部隊まで出てくる始末だった。

ただ、連隊長は、任務に支障をきたすような機材の横流しなどは

絶対に行わない。それどころか、ロシア軍にまである広い人脈を利用し、足りない予備部品や高い航空燃料をどこからか調達してくるのを得意としていた。飛行の腕は大した事が無い連隊長だが、連隊長のおかげで第三飛行連隊が維持できていることは間違いない。怜人もその実力は認めていた。

どっかと腰を下ろす。暑いので作業服のボタンは締めていない。手拭いを首にかけた。

勝彦はようやくものになってきた。三人の小隊長の中では、まずまずだ。

ふと思う。

このままで終わり、俺も副連隊長のようになるのだろうか。部隊の管理はともかく、訓練などは俺に任せきりで酒浸りの。中隊長時代は腕のいいパイロットとして知られていたが、今は見る影も無い。飛ぶこと以外の仕事が多すぎて、腕をすり減らしていた。パイロットは飛ぶことを辞めれば、終わってしまう。常に泳ぎ続けなければならない鮫のようだった。飛行訓練学校出身の怜人は、出世しても二佐で副連隊長止まりだった。西側日本軍やアメリカ軍など、敵を演じて各飛行中隊の腕試しをする超エリートの教導飛行中隊も、政治的信頼性に欠けるという理由で怜人を誘わない。

党にも入らない。そんな頑なだから、お前は機会を逃すんだ、という先輩の声が耳に蘇る。そうかもしれなかった。あんな連中に媚を売りたくはなかった。怜人の心の中に、ふと横顔が浮かぶ。党に、この国に立ち向かって命を落とした彼女。もう戻れない時間の中にしかいない彼女。

鳥篭の中の鳥とは、なんとも哀れじゃないか。

空に近づきたい、腕一本でのし上がりたい、そんな思いでパイロットとなり、飛行中隊長にまで昇ったが先の見通しは暗かった。

いっそのこと、最近囁かれている戦争があれば面白いかもしれな

い、と物騒な考えを抱いてしまう。
この国は潰れて俺もピロートらしく空で死ねるだろう。

友好国のイランの認可を得た防空赤衛隊のパイロットたちが、イラク空軍として湾岸戦争を戦ったことがあった。怜人は、ＭｉＧ２９Ａではぐれた味方機と思わせて敵機を撃墜した。あの時の砂漠の美しい夜明けをまだ忘れられない。

パイロットは早く老いる。肉体的を酷使する上、Ｇで筋肉に貼りついた皮膚がたわみ、皺が増えるという表面的な老化も激しいが、何より精神的に達観しすぎるところがある。死生観が異様なほど淡白だった。

日々の雑務に磨り減らされていく前に、無償に何かがしたかった。

護は、紅茶をテーブルにおいて自分の手を見つめる。農作業や基地の修繕などの作業で手は豆だらけだった。
この手で、また操縦桿を握る。護は、飽きるほど読んでボロボロに擦り切れたマニュアルを手に取る。
騒いでいる隊員たちの声も耳に入らなかった。マニュアルを斜め読みした後に目を瞑る。頭の中で翔鶴を飛ばす。機体の強い力は、なんなく自分の意志に従ってくれる。点ほどの敵に相対し、背後をとるべく機動する。時間も忘れて没頭した。

不意に瞼が温かいもので覆われる。
「だーれだ？」
「う、うわっ」
護は椅子から転げ落ちた。
「あ、ごめんなさい、驚かせちゃった？」
慧子だった。
「誰かと思いましたよ」
護は起き上がった。
気がつくと周囲にはもう誰もいない。ＴＶも消されている。電灯の周りを羽虫が飛んでいた。もうすぐ消灯時間だった。
「この前は、ごめんね。私がいたのに……」
慧子は珍しく少し暗い表情をしていた。
「もっと早く謝ろうと思ったんだけど……私も……あんまり話しかけちゃいけないって注意されて。あ、今、同志風野のところに行ってきたの」
なんだか泣き出しそうな顔をしているように護には見えた。
「本当に、ごめんなさい」

「怜人さんが、いえ、飛行中隊長が言っていました。同志紫藤指導員が掛け合ってくれたおかげで、軽くすんだって」
「ううん、本当は連隊長が助けてくれたの」
散々、嫌味と文句を言っていた連隊長だったが、やはり、怜人や慧子の働きかけは無視できなかったのだろうと見当をつけた。二人が庇ってくれなければ自分ばかりか、鋼も、もっとまずい状況に追いこまれたはずだった。
「それより、いいんですか。男子寮になんか来て」
護は周囲を見渡した。誰かが戻ってきたらまずかった。
「あっ、そうね……あんまり来ちゃよくないわよね」
今度は慌てだした。ひどく子供っぽい。本当に政治指導員なんだろうか、という気さえする。
「ねえ、だったら、送ってくれる？　目立たないように。道々でお話しましょう」
「わかりました」

なるべく人目につかないように裏口から出る。巡回している隊員にも見つからないよう、遠回りに裏手の雑木林を通っていくことにした。これなら、十五分くらいは話せる。
「あなたたちは大変だったわね。労農作業に回されちゃって。昨日、働いているところを見たわ」
「それより、同志紫藤指導員は大丈夫なんですか？」
「なんとか減俸ですんだから」
「配置替えとかになったら、みんな残念がりますよ」
「ありがとう」
慧子が微笑んだ。柔らかな笑顔が向けられる。
雑木林を透かして滑走路が見える。滲んだオレンジ色のライトが広すぎる基地に灯っていた。滑走路との向こう側には、巨人の幽霊のように管制塔が立っている。
「夜間離発着訓練がある時は、あんなに賑やかなのにね……今日は

静か」
「賑やか？　五月蝿くないんですか？　基地の周辺の人たちは、騒音には随分うんざりしているみたいですが」
「うん、賑やか。いい音よね。いつも聞きたいとは思わないけれど。基地なんだから無いと淋しいわね」
「そんなこと言う人、初めてですよ」
基地に勤務しているのにジェットエンジンの音を煩がる人間も少なくない。
「ねえ、夜飛ぶのは、どんな感じ？」
尋ねられて、護は言葉につまる。
「夜飛ぶのは恐いです」
ナチヌイーイ・パリオートゥイ（夜間飛行）は苦手だった。
「恐いんだ。暗くて」
「ええ。空間識失調といって、上下感覚が無くなることがあるんです。星と街の光の区別がつかなくなって挙げ句に上昇していると思いこんで、墜落してしまうことだってあります。昼間でも雲の中や曇りの時に起こるんです」
パイロットが必ず経験すると言われる空間識失調は、視界の悪い日や雲の中を飛んでいる時などに三半規管が狂い、自機が通常飛行しているのか、背面飛行しているのかわからなくなってしまう。ついには操縦を誤り墜落する。
「飛んでいるつもりで落ちるのね。なんだか、私たちの周りでもありそう。そういう人とかいそう」
言われてみればそのような気もするが、黙っていた。
「パイロットのあなたたちは、本当に凄いのね。そういう恐怖と戦っているんだ」
「でも、なかなか克服できません。注意深くなることはよいことだと思っていますけれど……」
鋼のことが思い浮かぶ。鋼は、そんなことはない。
「けれど？」

「俺は度胸が足らないような気がします」
隠しておきたいことも、慧子の前では、すらすらと口にしてしまっていた。
正面からライトを浴びる位置に二人は立っていた。
「そう……」
慧子の綺麗な形をした横顔が影に浮かび上がる。雑木林の伸びた枝の影が、怪物の手のように地面を覆っている。
「いいのよ。それで。恐いことを恐いと感じられなくなるほうが、よほど恐いわ。感じることが一番大事なことだから」
慧子は、護の手をとって素早く腕を組む。梢が風になびくように自然だった。不思議と違和感はない。鋼と腕を組まされた時の恥ずかしさもない。護は少しだけ慧子の細い腕を引き寄せた。しばらく無言で歩き続ける。

女子寮の建物が見えてくる。
「送ってくれてありがとう」
腕を離す。名残惜しかった。
「あの……」
「何？」
「今日みたいに話をしてくれますか？」
慧子と歩きたかった。
「ええ、もちろん。また、散歩しましょうね」
寮の入り口で一度振り返って小さく手を振る慧子。
護は自分の腕に、まだ、慧子の暖かさが残っているような気がした。

青蒼気圏　web. ver　〈12〉

二週間ぶりの空だった。

四機からなる飛行小隊は、七歳年上の飛行小隊長の宮森勝彦一尉が率いていた。勝彦は飛行小隊長の資格を持っており、中隊長候補とみなされている。地上では絵に描いたような好青年だったが、空では鋭い感覚を備えた手堅いパイロットだった。

今日は肩慣らしを兼ねた二対二の空中戦闘訓練を行う。

かつてはソ連防空軍式の訓練一辺倒で、一本の隊列を組み、それぞれの機が高度を僅かに違え、地上管制による誘導の下で攻撃するという伝統的対爆撃機戦闘訓練が多かった。制空戦闘にしても、中距離から一斉にミサイルを発射して、反転するという多数機同士の訓練止まりだった。しかし、現在は西側に倣い、少数機同士の近接した対戦闘機訓練も取りいれていた。地上から完全に制御し、邀撃機をミサイルキャリアーとして扱うソ連防空軍式を改めた結果だった。護と鋭、勝彦と鋼のペアでだった。

「ミサゴ一番機より三番機へ。分離して所定の位置につけ」

「ミサゴ三番機、了解」

鋭の声がレシーバーから聞こえてくる。三番機の鋭、四番機の護は二機で緊密な編隊を組む。

地上邀撃管制からの連絡で戦闘開始が告げられる。

「ミサゴ三番機より四番機へ。地上の打ち合わせどおりにやるぞ」

示し合わせた通りにレーダーを待機モードにする。捜索レーダーを使用すると、暗闇で懐中電灯を振り回しているように、敵に位置を

知らせてしまい、奇襲の優位が失われる危険性もあった。
「ミサゴ四番機、了解」
護は鋭の機に隠れるように下にもぐりこむ。二機が重なると、レーダーに映った機影は一機に見えるはずだった。囮になるのは鋭だった。本来なら護が囮になるのが順当だったが、鋭は護に任せた。何としても期待に応えたかった。

水平に大きな間隔を開けて鋼と勝彦の翔鶴が飛ぶ。
鋼は機首に収められているＮ００１レーダーを、足元を照らすように下方に向けた。

鋼は低空を、勝彦は高空を走査しつつ、データリンク・システムの土耳古石を使用して情報を共有している。レーダーによる索敵を行うと、レーダー警戒装置にひっかかるにも関らず、編隊長の勝彦がリスクを承知で、先手必勝を狙っているのを鋼は理解していた。
じりじりするような時間が過ぎる。
「ミサゴ一番機より二番機へ。距離九五。三五度に目標を捕捉」
高空を捜索していた勝彦から連絡が入る。
ＨＤＤに自機と勝彦以外の輝点が浮かび上がる。輝点がぶれる。何か妙だと鋼は感じた。
「ミサゴ一番機より二番機。気づいたか」
「ミサゴ二番機。目標が分かれました」
一つの機影が二つに別れた。一機はレーダーの捜索範囲外の下方に逃れたのだ。
「シラカバよりミサゴへ。三番機、四番機が分離」
訓練に参加している地上邀撃管制官からの通信が入る。双方にレーダー・サイトに陣取る地上邀撃管制官が、一人ずつついていた。地上の味方機と呼ばれる地上邀撃管制官は貴重なヒントをもたらしてくれる。
どうやら地上からの見たても正しいようだ。どちらが囮かはわか

らなかったが、相手の意図は見抜いた。
「ミサゴ一番機より二番機。よく気がついた。囮に食いついたフリをしよう」
「ミサゴ二番機、了解」
鋼は答えた。二機で、高度を稼ぐ目標の翔鶴を追いかける。

レーダーに反応は無い。円錐形の索敵範囲を持つレーダーは、目標に接近するほど索敵範囲そのものは狭くなる。あまりレーダーに頼るのも危険だと言われている所以だ。
「ミサゴ一番機より二番機。よく探せ。下にいるはずだ」
「ミサゴ二番機、了解」
もう一つの目であるＯＬＳ２７赤外線捜索追尾装置の追跡モードを起動。レーダーとは異なり、目標の熱源そのものを探知可能だった。
ちらりと輝点がディスプレイ上に浮かんだような気がした。
鋼は、青に自分が埋まりこんでしまうほど目を凝らす。目を鍛えることは怠っていない。絶対に見つけてやる、という半ば意地に近い気持ちで眼を見開く。人が空を飛ぶようになってから、いや、人が人になった時、二本の足で立ち上がって平原を見渡したその時から使われてきた眼球こそ、最も信頼に足るセンサーだった。バックミラーも覗く。
いない。
もう一度、確認する。青が目に染みる。遙か彼方、この星の縁が白く霞んでいた。その境目で何かが動く。間違いない。空に浮いているかのように視界の良い翔鶴のコックピットから、下方を睨む。薄雲に紛れて見えない。いや、いた。もう近づいている。右後方側面を狙うつもりらしい。
「シラカバよりミサゴへ三番機、二番機の四時方向に目標接近中。一番機からは八時後方。どちらを狙うかは不明、警戒せよ」
駄目押しのような地上邀撃管制官の声。

ダミーのＲ６０赤外線誘導ミサイルでは相手に撃墜を知らせることができないので、射撃用のレーダー波を浴びせるために、レーダーを起動して搭載していないセミ・アクティブ・レーダー誘導ミサイルの射撃モードに設定し直す。ＨＵＤの表示を近接戦闘用の垂直走査モードに切り替える。

護は急降下した後、レーダーから逃れるために敵機からほぼ九〇度直角に飛行した。

断続的にレーダー波を発振することで、目標の位置を突き止めるパルス・ドップラー・レーダーは地表を飛ぶ目標が高速だと敵戦闘機が飛んでいると判断できるが、低速だと探知しにくい。地面によるレーダー反射反応だと捉えて自動的に信号を消去してしまう。さらに自機に対して、目標が直角に飛行するとドップラー変移がキャンセルされてしまい地面と誤認してしまうという特性があった。

目標との角度が正しければ、護は、うまく地面に同化しているはずだった。

あとは、急上昇して背後につけるだけだ。

「クスノキよりミサゴ三番機、八時に目標接近中」

護は慌てて左後方を見る。いつのまにか、自分と同じ高度に降りようと旋回しながら急降下してきている。もう距離がつまってしまっていた。目視確認し、ロールをうって上昇するがピッタリとついてきた。

読まれたか！

仕方なく旋回行動に移った。不利になりそうな場合は、敵に対して大きな針路交叉角をとって射界に入らないようにするしかない。Ｇが身体にかかる。単純で緩い旋回は飛行経路を読まれやすいのでなるべく小刻みにしなければならない。再度、上昇する。

右旋回。目標を追いかける。ミサイルの射界からは外れていた。降下したので運動エネルギーは充分だった。二機がそれぞれを前に

押し出そうとする航跡が鋏のように見えるシザーズという運動は、降下時のエネルギーが足りないのでエネルギーを互いに使い潰すまでの機動になるし、先に目標の方が失速してしまう。双方が互いに逆方向に位置するまで待ち、反転降下するという常道か、離脱、上昇して仕切り直す気かとも思うがそれも異なる。
目標の翔鶴は、バレル・ロールと言われる空中に円筒を描くようなロールを行い、急上昇や急降下も使い、複雑な機動で勢いのあまった自機をやり過ごして背後につこうとしていた。
このままだとせっかく、背後に位置したのに外されるおそれがある、と鋼は直感した。
思い切った手を使わねばならない。
鋼の身体がGで思い切りシートに押し付けられる。機首の仰角とGを示す計器のメーターが跳ね上がる。骨が軋み、自分の数倍もの重量がかぶさってくる。足に血が下がって脳に血が回らなくなるブラックアウトを防ぐため、耐Gスーツが下半身をギリギリと締め上げる。操縦桿を握る腕には重い砂袋をつけられたようだ。二週間のブランクのせいか、少し腕が重い。
操縦桿を引く。

おもむろに鋼の翔鶴は信じられないような動きを見せた。
機首を上にあげ、機体を斜めにしたままの姿勢で飛んでいる。背面には白い水蒸気を纏う。まるで失速したかのような状態だが、コントロールは失っていない。翔鶴を含むＳｕ２７シリーズがデモフライトの際によく演じてみせる、機体下部にエアブレーキの役割を果たさせることによって可能なプガチョフ・コブラと言われる飛行だった。

目標が自機を追い越したと思った途端、空中で仁王立ちしたかのように上面を晒している。距離には変化がないが、空中衝突するという錯覚に陥ってしまった護は、反射的に右にロールをうった。く

るりと世界が逆さになる。計器版の中央に引かれた白線に操縦桿を合わせて、機体を平衡に戻す。目標の位置を見失ってしまった。周囲を見まわす。目標はどこにもいない。
上か、左右に回りこんだのか。こんな短時間に。
「ミサゴ二番機、目標だ。五時方向！」
一呼吸遅れて地上邀撃管制官が叫んだが、もう遅かった。
レーダー警戒装置が鳴り響く。ロックオンされている。緊急回避しようとしたが、放たれたレーダー波に捉えられたままだった。
「撃墜！　ミサゴ二番機、四番機を撃墜」
鋼が誇らしげに撃墜を宣言するのが聞こえる。ガンカメラには真後ろを捉えた映像が映っているだろう。
鋼は護がロールをうった瞬間に態勢を立て直し、予測してロールをうって護の斜め右後方につけていた。
おそらく、最初から俺が避けると踏んで、そのつもりであんなコブラをしたのだろう。手の内を読まれていたようで悔しかった。
「ミサゴ二番機より四番機へ、参った」
護は降参の印にバンクした。
「ミサゴ二番機より一番機へ。ミサゴ三番機を撃墜した」
勝彦の声が聞こえる。囮役の鋭も負けたらしい。
地上邀撃管制から訓練終了の通信が届いた。翔鶴は、編隊を四機の飛行小隊に組みなおして再び古巣に引き返していった。

空中戦闘訓練が終了した後、パイロットの控え室であるフライトルームでのブリーフィングが待っていた。たいてい、絞られる。
中隊長の怜人は足を投げ出して、どっかりと座っていた。
ガンカメラの映像を西日本製ビデオで再生しながら講評を行う。
「鋼が急降下したことに気付くのが遅すぎる。囮が上手く行くかどうかなんてのは最後までわからない。作戦通り行くと思い込んで警戒を疎かにしている」
「撃てるところで撃ってない」

「作戦自体がまずいんじゃないか？　もっと僚機との連携をうまくやらないと、単に戦力を分散させているだけだぞ」
先輩たちの指摘が護に対して飛ぶ。鋼や鋭、勝彦にも同じように厳しいが客観的な講評がなされていた。仲間うちだからこそ容赦はない。敗北は確かに悔しかったが、経験だけでなく、人の意見でも知識でも、なんでも吸収して自分のものにしていくという姿勢が必要だった。
怜人は黙って聞いている。
戦闘が終盤に差し掛かり、鋼がプガチョフ・コブラで護を逸らしたところで、一瞬、どよめきが漏れた。
低速でのプガチョフ・コブラなどの機動は失速からの回復を誇示するショー向けのアクロバット飛行であり、空中戦闘に使うものではない。敵機をやり過ごすことはおろか、排熱を一時的に赤外線捜索追尾装置から逸らす程度にしか使えないという評価が専らだった。運動エネルギーを浪費して失速しやすい上、低速の機体はカモでしかない。だが、鋼は大きなGに耐え、かなりの速度を保ったまま、ダミーのミサイルを積んで、プガチョフ・コブラをやってのけて見せたのだった。
「お前な、ここは曲芸飛行団じゃないんだぞ。何をやっているかと思えば、こんなことか」
無言で講評の成り行きを眺めていた怜人が、初めて口を挟んだ。
「お前も知っているだろうが、ラキエータの発射時にも速度が必要だし、発射時にGがかかる。下手をしたら失速しかねない。お前は、結構な速度でやったが、燃料と全装備のラキエータを積んでコブラをできるかどうかもわからん。危険だ」
「しかし、翔鶴の能力を最大限に発揮した戦い方を追求したいのです」
鋼が食い下がる。
「ならば余計、危なっかしい曲芸飛行もどきはやめておけ。もっとやるべきことがあるだろう。事故を起こしたら終わりだぞ」

「この程度なら問題はないと思います」
「お前も翔鶴も防空赤衛隊のものだ。無闇に危険に晒すことは許さん」
鋼が黙り込む。
「こんな猫ダマシにひっかかる護も護だ。切り返しが遅すぎる」
全員に、鋼の真似はするな、と釘を刺した怜人は、失敗した囮作戦を材料に、鋼が護を、勝彦が鋭をどこで発見してどう攻撃したか、という話をはじめた。
「空中戦は原則通りだ。何度も言っているが、速度と高度を保って先に発見しろ。距離が詰まっても基本は同じだ。近距離用の魔法は無い。もっとラダール（レーダー）の避け方を考えろ」
怜人の講評が続いた。

青蒼気圏　web. ver　〈13〉

就寝前の僅かな時間、護は人目を避けて毎日のように女子寮の近くまで行き、慧子と一緒に歩いた。滑走路の見える雑木林を話ながら散歩する。もっぱら護が飛行訓練のことや、隊の仲間たちの話、邀撃機の話をした。慧子は申し分の無い上手な聞き手だった。時々、腕を組んだり、手を繋いだりした。最初は少し恥ずかしかったが、すぐに慣れた。温かい掌の感触を感じる度に、護は甘く胸が締め付けられるような気持ちになった。

「今日、同志風野とプールで会ったわ。凄いのよね。二時間も続けて泳いでいるんだから」
「あいつ、水泳は得意なんです」
「ね、なにか、心配事でもあるの？」
護の変化を目ざとく見つける慧子。
「いえ……」
「そう」
少し心配そうな顔が、暗闇の中でも目に浮かぶようだった。護は自分から、そっと慧子の手を握る。柔らかな、暖かい感触。
「あ」
少し驚いたような声を慧子が漏らす。
「すみません。驚きましたか」
離したくなかった。
「ううん。護から手を握ってくれるのって初めてじゃない？」
いつのまにか同志北上、ではなく名前で呼ばれていた。自分が慧子にとって近しい存在になったのだ、と思うとむず痒い。
「そうでしたか？」
「そうよ」

雑木林の隙間から覗く照明の光が眩しい。
「ちょっと嬉しいかな」
無言で歩き続ける。
その時、草のずれる音がした。二人は慌てて木陰に隠れる。懐中電灯を手にした見回りの基地警備隊員が通り過ぎていく。見つかったら明らかに疑われる。危険なことをしているのに、あまりにも自覚が薄かった。いったい自分でも何をしているのか、何を考えているのか、と思うが止めることもできない。
「ドキドキするよね」
慧子の笑いを含んだような声が耳元で聞こえる。
血が顔に上ってくるのがわかった。
暗くてよかった、と思う。
警備隊員をやり過ごしてから、雑木林の小道を歩いて女子寮の前に出る。眠りにつく前の散歩は、いつも通り終わった。
「ねえ、前から思っていたんだけれど、同志紫藤指導員って言い方は、どうかなって思うの。私だって護って呼んだんだし」
「しかし、同志紫藤指導員は、政治文化指導員で待遇は二尉でしょう。俺の上官にあたるわけですから……」
「うーん、お堅いわねえ」
少し眉間に皺を寄せるが、それすら可愛らしい。
「じゃあ、命令。こうやって二人きりでお話する時は、慧子って呼んで」
「……」
「命令しますよ」
眼鏡の奥の悪戯っぽい瞳が輝く。
「慧子」
「はい、よくできました」
慧子は笑い出した。
「これで、やっと仲間扱いしてもらえるのね」
そういう意味なのか、と思い、安心したような、残念なような気

持ちになる。
「あと、ついでに敬語も禁止ね」
「それは……しかし」
さすがに抵抗はあった。
「いいわ、だんだん直してね」
楽しくてたまらない、という顔をする。
「じゃあね、また」
身を翻す慧子。何歩も歩かないうちに何かにつまずいたらしく転びそうになる。きゃ、と小さな声をあげてよろける。
慌てて駆け寄って支える護。想像以上に軽い。羽毛くらいの重さしかないような気がした。
「大丈夫ですか？」
「あ、平気、ごめん。私ってば、そそっかしくて」
頭を掻きながら立ち上がる慧子。夜目にも白い綺麗な首筋からは、いい香がする。
「ありがとう。明日はちょっと忙しそうだから、明後日かな」
微笑むと身軽に女子寮の入り口に消えていく。
一緒に散歩して話ができるだけでいい、と思っていたのに、それとは何か違う、熱に浮かされたような気持ちが湧き上がってくるのを護は感じていた。

赤衛隊もソ連が健在だった頃は、ロシア語一辺倒だったが、敵を知るために英語の学習を推奨するようになった。そのため、護たちの世代は基本的な会話を身につけ、英語の軍事雑誌を読むことができるようになっていた。
講義は年少の隊員だけでなく、英語学習を希望する隊員もいた。護は今日の英訳の宿題をざっと確認する。講師は政治文化指導員の慧子だった。

護は、仲間たちから離れた机につくと頬杖をついた。

慧子との人目を忍んだ夜の散歩は、まだ続いていた。二人の関係は特に近づくでも離れるでもない、なだらかな曲線を描いていた。ただ会話を交わして、時折腕を組んだり手を握ったりする。たったそれだけのことなのに、一日の終わりのその時間帯が待ち遠しくて胸が躍った。しかし、今は単純に一日のうちの最良の時間とは言えなかった。

先輩の鋭から聞いた慧子にまつわる連隊長との噂だった。慧子は連隊長の愛人だというのだ。おそらく、本当だろうと思う。

だから、外出の時の騒ぎでも俺や鋼を助けることができたのだろうか。

慧子と過ごす時間が甘やかに感じられるほど、その痛みと焦り、不快感は増していった。噂話を聞いてから、ますます焦りのような奇妙な気持ちに駆られる。それでも慧子に直に尋ねるだけの勇気は到底ない。

それでも、慧子と一緒にいたい、慧子を自分だけのものにしたい、という思いは消えなかった。

もし、口にしたら慧子に受け入れられず、二度と親しく口を利いてもらえなくなるばかりか、パイロットとしてもここにはいられなくなる可能性が高い。単に男女関係を禁止する規則に違反するというよりも、社会安全省の政治指導員と親密になることを、防空赤衛隊の仲間たちが許すはずがない。群からはぐれてまともに飛べるわけがない。

ならば、今の中途半端なままで、夜の散歩だけで満足しておく方がよかった。慧子にとってもこれ以上は迷惑なはずだった。

適当なところで諦めて切り替えを早くする。この国で暮す以上、必要なことだったし、パイロットにも必須の素質だった。一つのことしか集中できない者は、あらゆることに気を配らなければならないパイロットには向いていない。

窓の外は、からりと晴れた眩しい夏空が広がっている。

「おい、基地の外を見たか？」
「いいえ、なんかあったんですか？」
隣席の鋭の問いかけに、護は答える。
「知らんのか。お前は」
呆れたような声だった。
「昨日の夕方から、警備機動隊の連中が基地をぐるりと取り囲んじまったんだよ」
「気づかなかったです」
「反政府組織の攻撃から基地を守るためだとさ。ご親切なこった」
反政府活動はあるにはあったが、放火やビラ撒きがせいぜいの組織で深刻な脅威とは言えなかった。　社会安全省が反政府組織対策の予算を獲得するために、あえて野放しにしているという噂さえあった。そんな組織が赤衛隊基地を攻撃できるわけがない。明らかに社会安全省が赤衛隊に圧力をかけるための示威行為だった。
「どうせクーデターの疑いありとか、その線だろ。最近は部隊の中にも諜者が潜り込んでいるらしいしな」

スパイは孤児院や訓練校にさえいた。誰もが密告され、密告する存在になりうる。疑うのは、生活の一部のようになってしまっている。周囲が信じられないからこそ、余計にパイロット仲間たちの絆は重要だった。空を飛ぶには絶対に信じられるものが一つ必要だった。

基地のあらゆる部門に入り込んでいる社会安全省のスパイ。スパイの集めた情報は必ず政治指導員に行く。いくら慧子が親しげで理解があるように見えても政治指導員であることには変わりない。
連隊長の愛人だというのも情報を得るためなのか。俺をあんな夜の散歩に誘うのも同じ理由だろうか。でも、一パイロットに過ぎない俺との会話の中では、政治指導員が興味を持ちそうな、誰が党に批判的なことを言っただとか、西側を礼賛しただとか、そんなこと

はまったく聞かない。
飛ぶことや、空の美しさのこと、邀撃機の話だけで、たまに慧子自身が西側の色々なものについて話す。急に轟音が響いた。中部支援飛行中隊の機体が訓練に出る。
地上のことに気をとられていたら、飛べなくなる。
護は沸いてきた考えを振り払った。
「起立！」
慧子が部屋に入り、号令がかかった。

古くなった電灯が時々瞬き、その回りを蛾が壊れた玩具のように一定のパターンで羽ばたいていた。

「今月の党費の納入をお願いします」

上級中尉相当の政治組織指導員がテーブルを回っている。慧子のようなくだけた感じでもなければ、連隊書記のようなガチガチの党員でもない。出世の機会を逃してしまった失望と倦怠感のみを漂わせている中年男だった。

日本民主人民共和国の国民は、一八歳から日本民主人民党に入党できる。職場の組合や学校の青年組織による推薦と党の審査を経て入党するのだが、党員でないと一人前とはみなされず、就職や結婚でも不利な上、公然、非公然の差別に晒される。

パイロットをはじめ、赤衛隊員は政治指導員の推薦を受けて党に加入する。護も鋼も例に漏れず入党していた。週一度の基地党員集会や月一度の三沢市党員集会に出席し、面白くも無い話を聞かなければならないが、護は皆が入っているという理由で特に考えもせず入党した。人と違うことをして睨まれるなんて馬鹿らしかった。だが、怜人が頑なに入党を拒否していることを聞いて驚いた。怜人が政治指導員を嫌っていることは知っていたが、何もそこまですることはない、と密かに護は思っていた。

「差し引けばいいのに」

大人しく聞き役に回っていた鋼が呟く。

赤衛隊員の給与は、生活費や被服費を差し引かれ、ほとんどは強制的に貯金されてしまう。僅かに残った現金の小遣いすら、外食券や施設利用券に引き換えさせられる。

「先月から規則が変わったんだよ」

党員は自ら党費を納める精神を持つべし、という規約ができ、わ

ざわざ他人の目線のあるところで現金の給与を箱に入れさせられた。
「こんな時のために現金支給とは恐れ入る」
鋭が茶化した。

そろそろお開きか、と思われた時に誰かが背後に立った。
「同志安倉三佐、連隊書記がお呼びですが、御足労願えませんでしょうか」
中隊書記が顔を出した。第三飛行中隊では、副長と同等で怜人の次席になる。その中隊書記が、基地における政治指導員の長である連隊書記に命ぜられて呼びに来るというのも妙だった。しかも口調が丁寧すぎた。
「ああ、わかった。今行くよ」
怜人は、いつも通りの調子で大きく伸びをしてから席を立った。
護は、何気なく廊下に目をやって、ようやく異常に気付いた。男たちが立っている。いつもと様子が違うことに気がついた他のパイロットたちが、話を止めて振り返った。不穏な空気が広がる。
食堂に入った男たちが怜人を半円型に包むように、さり気なく取り囲む。警務隊の服装をしているが、雰囲気が違う。殺気だった感じがした。
「おい、お前ら、何の用で怜人さんを連れて行く」
鋼が立ち上がった。
それが皮切りだった。
「どこに連れて行くか言えよ。社会安全省の同志諸君」
「まずは、飛行中隊に一言、説明があってしかるべきなんじゃないのか！」
「異議なし！」
突然、煮立った湯が吹き零れたような騒ぎになった。
護たちが、警務隊員たちに詰め寄る。中隊書記がたじろいだ。
「お前ら、そんなに騒ぐな」
怜人が制する。

「しかし……」
護が前に出る。
「何の説明もなしに納得できません」
鋼が続けた。
「そういうところだろう、ここは」
怜人は溜息をついた。
「あきれ果てたな。社会安全省は相変わらずだ」
怜人の目は、中隊書記や警務隊員を見ていない。ただ、空中の一点を凝視していた。瞳の奥には暗い炎が瞬いている。
「さて、行くか、同志」
怜人は、ぞっとするような笑みを浮かべた。

青蒼気圏　web. ver　〈15〉

護は、ひどく不確かな足取りで、慧子との待ち合わせの場所へと向かっていた。昨日はいけなかった。今日も慧子はいないかもしれないと思ったが、吸い寄せられるように足を運ぶ。

怜人が拘束された後、他の飛行中隊でも似たような事態がおこっていた。拘束はパイロットをはじめ、整備員やレーダー要員のみならず、基地の幹部数名にも及んだという。パイロットだけでも異例なのに、幹部まで拘束されるというのは、もはや異常事態としか言いようがなかった。

議論が行われ、隊員たちが行き来していた。こういう時のための政治指導員はまったく姿を現さなかった。代わりに連隊長の意志を受けた警務隊が秩序回復と明日からの任務再開を訴えて巡回していた。

護は、灯りのつかない照明の下に慧子がいるのを見つけた。か細い影のようだった。

「よかった……」

慧子が弱々しく微笑む。心なしか顔色が悪いように見える。

「もう来てくれないかと思っちゃった」

「そんなこと……ないです」

鋭や鋼に同調して、全員一致でパイロットによるストライキに賛成したものの、慧子のことが頭から離れなかった。慧子も政治指導員だった。

「無事でよかった」

横柄な態度で、整備員たちを解散させようとした政治指導員が殴られたという話を聞いて、気が気ではなかった。

「え……あ、私は大丈夫だったわ」

慧子はそう言うと目を瞑った。

「ごめんね、なんて言えないわよね。私たちが……」
「いいんです。慧子のせいじゃないから」
「ありがとう。優しいのね」
くすりと笑う。
「前から思っていたけど、あなたは優しい人ね」
パイロットに向いていない、と言われているタイプの性格の一つに、優柔不断や一つのことに固執し過ぎるなどの他に、優しい性格があった。慧子にそう言われると、面と向かって自分が向いていないと言われているようで嫌だった。気が弱くて女々しいところがあると自覚していたから、余計に人から、慧子から言われるのは辛かった。
「そんなことありませんよ。戦いになれば敵を撃墜するんですから。脱出できなきゃ、敵のピロートは死にます」
慧子の言葉に少し反感を持つ。
「人を殺す人は優しくない人かしら？　そんなことないと思うわ。人を殺しても優しい人は優しい人」
慧子は微笑んだ。
「何か変わったことはあったんですか？」
少しでも情報が欲しかった。
「私たち政治指導員からも拘束された人が出たの」
政治指導員の中にも拘束された者がいたらしい、という噂は本当だったようだ。社会安全省が反共産主義的という理由をつけて、一般市民を逮捕拘禁することさえ珍しくはなかったが、同じ社会安全省関係者を逮捕することは有り得ない。身内に思想が揺らぐ者がいることを証明するようなものだったから、大抵は秘密裏に処理された。とんでもない山奥に左遷されるか、文字通り抹殺されてしまうかのどちらかだったが。
「いったい、どうなっているんですか？　怜人さんは、本当に帰ってくるんですか？」
「わからないわ」

慧子が首をふった。
「私たちにもわからないの。連隊書記も面食らっていたし。あったのは命令だけ」
「でも、なんで……」
不意に手をとられる。しっとりとした柔らかな手。
「ごめん、私、もう昨日の話はしたくないから」
ゆっくりと腕を回してくる。
「だから、お願い。いいでしょう」
護は頷くかわりに、そっと手を握り返した。
「今日は、ちょっと別のところまで散歩しましょう」

そのまま、護の手をとって歩き始めた。女子寮の裏手に向かう。資材置き場を通り過ぎ、さらにその先へ。どこに行くのか聞く気もなかったし、特に話す必要もないように護には思えた。倉庫の立ち並ぶ区画を歩く。飛行機の残骸が積み重ねられている。深く暗い森に誘われていくようだった。
「ほら、お月様。欠けた銀の指輪みたい」
無邪気に、倉庫の連なる屋根の隙間から見える三日月を指差す慧子。
「綺麗ね」
「ええ」
護は頷いた。
しばらくすると、小さな倉庫が見えた。
管理に使われている小屋のようだった。
慧子は中に入って手早くアルコールランプをつけた。

倉庫の中は想像していた小さな事務所や工具置場とはまったく異なっていた。くすんだ蔓草の壁紙が張られている。ベッドには真っ白なシーツが敷かれていて、掛け布団がかけられていた。小さなテーブルの上には、本が積み重ねられている。立派な本棚に並ぶ本も、

どれも英語だった。花瓶に刺した眩いほど青い造花の薔薇に、護は目を引かれた。
「私の部屋よ。いいでしょう」
「寮の部屋じゃないんですね」
見当外れのことを言っているのが自分でもおかしかった。
「ええ、ダーチャ（別荘）。秘密の花園」
慧子が眼鏡を外す。眼鏡をとったところは初めて見た。ほっそりとした横顔がゆらめくランプの炎に照らされる。おっとりした世間知らずの政治指導員らしくない慧子とは、まったく違っていた。優しげな目はランプの光を受けて、豹の目のように金色に輝いている。
軽い力で壁に押し付けられる。
下から昇るように慧子は護に唇を合わせた。押し入られるように舌が入ってくるのを護は感じた。自分の領域に自分とは違う生き物が侵入する。絡められる舌になすがままにされる。息が苦しい。脳髄が熱く痺れるような感覚に襲われた。
「あ……」
ようやく唇を離す。慧子の唇が艶やかに光る。
「驚いているの？」
「なんで、こんなことを？」
心臓が大きく脈打つ。息がふいごのように荒い。
「そういう質問は禁止」
慧子は不思議な笑みを浮かべた。ベッドに腰掛けて、子供にするように隣に座れという感じで、ベッドをポンポンと叩いた。制服のジャケットとネクタイを意外なほど乱暴に脱ぎ捨てる。白いブラウスがランプの火に浮かぶ。護は膝をがくつかせながら、慧子の隣に腰掛けた。すぐに慧子が肩にもたれかかってくる。ふざけているようだった。
「怖いの？」
熱っぽい上目遣いで慧子は護を見上げる。
「たぶん……」

「たぶん、怖いんだ」
慧子は楽しそうな顔をする。
「いいのよ。何でも素直なのが一番。それでいいんだわ」
砂を集めるように両手をぎゅっと握られ、指の一本一本をなぞられる。
「色んな偉い人がごちゃごちゃ言う事に惑わされたら駄目。みんなもっと素直になれば、上手くいくのに」
「上手くいく？」
「欲しければ手を伸ばして獲ればいいの。そうすれば手に入るの。手はきっと届くから。私は言い訳して遠慮なんてしない。欲しければ他の人の林檎だって獲っちゃう」
上機嫌で笑う慧子。
「獲ればいいの。護も」
慧子の一言、一言、微笑がゆっくりと毒のように護に染み渡っていく。
「でも、まだできない。護は怖がりさん」
「よく、言われます。自分でも臆病だと思う。いつも」
泡沫のように鋼の横顔が浮かんで消えた。鋼はその名のように強いのに。
「大丈夫。怖がらないで。空を飛ぶよりずっと簡単」
慧子の腕が背中に回される。押し付けられる体温が服の上からも、はっきりとした形をもって伝わってくる。護は強く、縋りつくように慧子を抱きしめた。ぎこちなく、今度は自分から唇を合わせる。引きずりこまれるように慧子の口の中に誘導される。幻か蜜のような甘い味がする。
「開いて……」
唇を離した慧子が耳元で呪文のように囁き、護の首を掻き抱く。何も考えらない。航空生理訓練の時に経験した低酸素状態の時のように、視界が狭くなっていくようだった。全ての力を失いベッドに倒れこむ。

「慧、子……」
「ねえ、髪、解いて」
遠くから微かに漂うジャスミンの香が、慧子の髪の香だということに気がつくのに数秒もかかる。空戦ならば数秒は永遠に等しい。数秒気付かないだけで死に繋がる。
震える手で結われていた慧子の髪を解く。美しい髪が白いシーツに広がった。鳥が翼を広げたようだった。

青蒼気圏　web. ver　〈16〉

遠くのサイレンの音で護は目を覚ます。最近、無いくらいに深い眠りだった。温い灰色の雲の中をずっと飛び続けているような夢を見たことは覚えている。傍らにいるはずの慧子はいなかった。シーツには微かに慧子の香りがしみついていた。

全身が少し気だるい。昨晩、触れ合った慧子の滑らかな肌や髪の手触り、柔らかさ、とろけるような熱が、残り香に呼び覚まされる。まだ夢の中にいるような気がした。ぼんやりと天井を見つめる。

充足感よりも空虚さが押し寄せる。ひどく喉が渇いていた。護はゆっくりと起き上がった。

『よく眠っているようなので、お先に失礼します。またね』

再利用のためにメモ用紙にしている細かく刻まれた藁半紙がテーブルの上に置いてあった。小さくハートマークが描かれていた。

今、何時だ。

護は慌てて服を着て、慧子のダーチャを飛び出した。

飛行機の墓場を通り、倉庫地帯を抜けて雑木林まで駆け、やっと男子寮まで辿りついた。男子寮は人がいない。皆、通常勤務についているのだ。護は真っ青になった。基礎訓練中の初年隊員でもやらないような遅刻だ。時計を見ると八時だった。朝の基礎体力作りのトレーニングの時間も朝食の時間も終わっていた。全速力で第三飛行中隊のフライトルームへ向かう。

あまりに焦っていたため、基地がざわついていることも、いつも行われている整備点検のためのエンジン音が全くしていないことにも気付かなかった。フライトルームに飛び込む。一〇分くらいは走っただろう。

これだけ全力疾走したのは久しぶりだった。

フライトルームにも人影は少ない。
「護」
鋼から声をかけられ、護は振り向いた。
「す、すまない」
「寝坊だな。いくら騒ぎがあったからといって」
護はいつもに比べて人が少ないことにようやく気がついた。
「空中戦闘訓練は中止。こんな状況では無理ないかも」
一度は連隊書記の言に同意したものの、あれから解散せず、あちこちの部署で拘禁されたパイロットや整備員の返還を求めて集まっていたのだという。早朝まで交渉したが失敗に終わった。
「なんで来なかったんだ。護が一番騒ぐかと思ったんだぞ」
慧子と一夜を共にしたとは、口が裂けても言えない。
「すまん、なんか、その……色々考えてたら……」
「変な奴だな」
鋼は溜息をついた。
「中隊書記から話があるそうだ」
どうやら政治指導員による訓戒で、この騒ぎにケリをつけるつもりらしい。昨晩のことを思い返すと何をやっていたのかと恥ずかしくなる。
「朝の練成は私しかいなかった。みんな寝不足」
一人、鋼だけは律儀にトレーニングに励んでいたらしい。
「もう、朝飯も無いぞ。あ、でも漬物ならあったかな。茄子の。この間、みんなで栽培したヤツ。けっこう旨い」
鋼は呟いた。

入れ替わりに発進する別の四機の飛行小隊が、空へと飛び立っていく。滑走路の上に陽炎がゆらめき立つ。
タラップを伝って、鋼は身軽に搭乗機を降りる。
ヘルメットを脱いで汗を拭い、整備員と点検を行って礼を言う。

今日の空中戦闘訓練では、鋼と鋭のペアが敗けた。新しく中隊長となった勝彦と護のペアには勝てなかった。ちょうど、いつかの訓練の逆になった。だが、勝彦はともかく決して護が上手な飛行をしたとは鋼には思えなかった。悔し紛れではなくて実感があった。
自分に背後を取らせることこそなかったが、いつも通りの安定した飛行は欠いているような気がした。最初、わざと油断を誘っているのかと思ったが、鋭に割り込まれた時の悪足掻きのような無様な飛び方を見てわかった。
護が何も言わずに待機所へと歩き去っていく。

「鋭さん」
鋼は組んでいた鋭に声をかける。
「おう、どうした」
「護の奴、なんかおかしくないですか？」
「まあ、あんなことがあった後だからなあ」
逮捕された怜人たちの行方は全く知れなかった。問題は逮捕された者は、パイロットや管制官、整備員問わず、技量の高い者が多いことだった。階級は低くても部隊の要と言える隊員がいなくなったので、影響は深刻だった。各隊は建て直しに奔走した。第三中隊は勝彦を中心に再建を図っていた。
「腕利きばかり逮捕しやがって、迷惑この上ないぜ。奴らは人の足

を引っ張ることしかしやがらない」
政治指導員たちとの関係は、当然、最悪になった。
「ほら、なんだ、あいつは怜人さんに心酔していたところがあるから……でも、別に今日の訓練でもおかしなところはなかったぞ」
「そうですか」
「地上で多少ぼうっとしていても、空できちんと頭がはたらけば構わないだろ。それよりも、お前、あの時、なんであんなことをしたんだ。あれを綺麗にできるのは怜人さんくらいなものだ」
敵機の下に潜り込む際に使う、一八〇度ロールした背面飛行から下方に一八〇度ループするスプリットSは、高Gを発生させるのでブラックアウトの危険があった。
「少し試してみたかったんです」
「馬鹿、もっと高度をとれよ。地面に突っ込むぞ」
鋼が、待機所の廊下を見ると護がロッカーの前で佇んでいる。護の目線の先には、数人の仲間と明るく談笑している慧子の姿があった。

そろそろ一日も終わろうかという頃、突然、ベルが鳴り響いた。古いスピーカーががなりたてる。全ピロートは、直ちに集会所に集合せよ、という指示がくだった。集会所は連隊書記のあまり意味のあるとは思えない演説を聞かされる場所だった。
板張りの集会所に駆け込んだパイロットたちは、すぐに整列する。三沢基地、全飛行連隊のパイロットが揃う。

第三飛行連隊長が正面に貼られた巨大な国旗を背に立った。赤地に白の放射状の光線が八本ついた太陽を象り、中央に赤い星が描かれている。
「諸君。たった今、赤衛隊は特別警戒態勢に入った。起こり得る不測の事態に備えて当分の間は待機とする。燃料節約のため、訓練は中止だ。また外出も禁止とする」

「質問があります」
鋼が大声をあげた。
「質問は認められない。同志風野三尉」
連隊書記が、工場で大量生産されて撒かれたような酷薄な表情を露にした。
「戦争になるのですか」
鋼は、連隊書記を完璧に無視し、鋭い視線で連隊長を射る。誰もが望み、同時に恐れていた問いが真っすぐにぶつけられた。
「わからん。特別警戒態勢は万が一の事態に備えてだ。気を引き締めておけ。今はそれだけしか言えん」
始まるべきものが、始まろうとしている。
護は心臓を手で鷲掴みにされたような気がした。
臨戦態勢に入った三沢基地には、重苦しく張り詰めた空気が漂いはじめる。警務隊の巡回は頻度をまし、ますます防備が固められている。基地周囲の警備機動隊もある朝撤収してしまっていた。整備員たちは何が起きても対応できるように、保有する全ての機体をチェックしていた。パイロットは警戒待機任務のみとなった。

青蒼気圏　web. ver　〈18〉

「もっとゆっくりしたいのにね」
慧子の囁きが耳にこそばゆい。
「最近、なかなか会えないから」
護は消灯時間前に慧子のダーチャに数日通ったが、特別警戒態勢に入ってしまってからは時間もとれない。最初は、なんとなく罪悪感のようなものがあったが、真夏の雪のように溶け去ってしまっていた。護は他の男性パイロットたちが、基地の外に恋人を持っていること、特別保養所で服務員という名の公娼がいる特別保養所に通う者がいることは知っていたが、あまり女性に興味を持っていなかった。パイロットとして研鑽を重ねる方が第一だった。だが、今は呑めば呑むほど渇く水のように、自分でもわかるほど慧子に溺れていた。
「私たちは、今はやることなんかないのに。うまくいかないわね」

慧子たち、政治指導員は逆に時間を持て余しているようだった。戦争となれば社会安全省は引っ込んでいる他ない。この前の検挙でどこか荒み、緩んでしまった空気は引き締まり、基地は本来の姿に立ち戻っていた。装備や組織の不備はともかく、高度なレベルで全ての作業が行われていたし、アメリカ軍を迎え撃つという明確な目標のため、士気も驚くほど高かった。仲間たちがピリピリした空気にいる中、自分だけが慧子と逢引を重ねているというのは、ひどく不面目だったが、その意識も引き止める力にはならなかった。

「わかってる。たいへんだものね」
「ごめん」
傍らの温もりを護は無言で引き寄せる。会わなければ会わないほ

ど、離れてしまいそうで怖かった。いつの間にか、慧子は護にとって大きな位置を占める存在になっていた。
「ごめん、なし崩しみたいで」
「嫌だ、気にしているの？」
慧子は苦笑した。
「悪いとは思っている」
「えー、さんざん、こんなことしておいて、今さらね～」
ふざけたような口調。
「だから……」
護は慧子を抱きしめた。いつも自分を酔わせる慧子の髪と肌の香りがする。「好きだ。慧子、俺の……恋人に……なって欲しい。今まで中途半端で悪かった」
「え、あ、あの？」
戸惑ったような声をあげる。
「私でいいの？　本当に？」
「政治指導員だからって、気にしない」
「でも……ほら、あなたから見れば、もうけっこう年だし……どうかなって思うの。ほら、あと噂も聞いているでしょ、色々と」
「連隊長のことだろ。もう知っている」
「え、ああ、あの、えーっとね」
「本気で好きなのか。あんな奴」
気づかないうちに、護は詰問口調になっていた。
「あの……なんて言ったらいいかしら。困ったわね」
隊員たちに見せる頼りない、おろおろとした表情の慧子になる。
「ちょ、ちょっと待ってね。整理するから」
いったん、護から身を離す。
「えーと、連隊長とはね。うん、正直に言うけど、確かに愛人だったの。でも、任務なの。話してはいけないけれど」
やはり噂が事実だった、と聞いて護の頭に血が昇った。連隊長のいかにも女好きな顔が目の前にちらつく。自分だけしか慧子を知ら

ないと思いたかった。
「でも、なんていうのかな。連隊長は自分には何の弱みもないことを承知で、わざと私を側に置いてたの。見透かされてるのに馬鹿みたいなんだけれども。護も知っていると思うけど、連隊長は部隊を私物化して商売をしているでしょ。そんなのもう当たり前の状況だから、検挙する理由にもならないし。私も愛人はお払い箱なの。連隊長は他にもたくさん女の人を囲ってるし。とにかく、普通の男の子なら嫌でしょ。汚らわしいでしょ」
慧子は気弱な、しょげたような顔をした。
「そんなこと、気にしない」
「この部屋だって連隊長に貰ったんだし……連隊長は、ここには来なくて呼ばれたけど」
護は強引に慧子を抱き寄せた。慧子は早口でしゃべり続ける。
「私ってば迂闊だから、ついついってことが多いみたい。連隊長も任務だからだけど……私なんか、所詮、その程度の女で」
もうどうでもいい。ただ、慧子が欲しかった。引きとめておきたかった。
「好きだよ……」
強く抱き締める。慧子にキスする。慧子から教わったやり方で。
抗わず、素直に護を受け入れる。護以上に熱っぽく求め返す慧子。窒息するような気がした。どちらからともなく、唇を離す。
「私も護のこと、好きだから」
「慧子……」
「ね、まだ、時間あるよね？」
慧子は潤んだ目で唇を舐めた。
早く帰らなければ、という心の隅に引っかかっていた思いは、すぐに吹き飛ばされてしまった。
画面の中で、そそり立つ柱のような黒煙があがっていた。西日本の横田基地をはじめとして厚木基地など在日アメリカ軍基地が日本

民主人民共和国の特殊部隊、工作員によって襲撃されたというニュースだった。最も大きな被害は横田基地で、基地航空祭に乗じて忍び込み、時限式の強力な爆弾を仕掛けたと西側では報道されているという。捏造謀略放送に断固抗議すると絶叫する旭陽人民放送局のアナウンサー。続いて情報相の発表が流れる。

警戒待機任務で待機所に詰めている者以外は、フライトルームに集合していた。皆、ＴＶ放送を注視していた。今日は、特別に昼間からのＴＶ放送が行われていた。

「なんで俺たちが米帝にちょっかいを出すんだ。しかも核持った後に。米帝にとって都合が良すぎるだろうが。こればっかりは党の言うことが正しい。絶対に自作自演だ」

先ほどまで、最近、米の量が少ないとぼやいていた鋭が机を叩いた。

護もその通りだとは思ったが、何かが引っかかった。

アメリカはテロ攻撃の真相究明、核開発の完全停止、弾道弾の破棄から現指導部の退陣、アメリカ軍の駐留を要求しているという。今までのアメリカのテロには即時反撃という態度とは、やや異なる。巻きこまれたくない西日本がある程度の歯止めをかけていた。

時間が無かった。

慧子のダーチャに行くどころではない。周囲には基地警備隊員や整備員が行き来していた。雑木林で会う。こんな時なのに、なぜか、整備部隊やレーダー警戒部隊の配置替えが行われ、海外派遣で平壌や北京に向かう者が多かった。また、社会安全省の手入れかとも思ったが、今度は本当に異動や派遣が行われているようだった。

「本当に戦争になる」

「まだ、わからないんでしょう？」

「確実だと思う」

「北海道の山の中にトンネル基地があって、そこに避難するとか」
「その可能性もあるけれど……たぶん、戦うことになると思う」
「そう……」
慧子は目を閉じた。護の胸の中に倒れるように飛び込んでくる。背中に腕が回された。慧子の体温を感じる。もし、戦って死ねば、二度と慧子と一緒にいることはできない。今まで、あまり意識したことのない死が急に頭をもたげてくる。
「なんで戦争なんてしたがるのかしらね。こうしていれば、何も怖いこともないし満足できるのに」
いつもより長いキスを交わす。
「そうだね」
「怖い？」
「慧子と逢えなくなるのが怖い」
「そう」
「でも、慧子のために戦うよ。慧子を守る」
昨日から考えてきた言葉が、すらりと口に出る。
「党と主義と祖国ではなくて？」
くすくすと笑う。
「ああ」
祖国と共産主義のために、など前からお題目で、どうでもよかった。国を守るためではなく、慧子を守るために飛ぶ。
戦争になって敗ければ、人民党が潰れて息苦しい党の支配から抜けられるし、アメリカと西日本から援助を受けて豊かになる、あとは西側の空軍にでも鞍替えすればいい、ということを陰で言う者がいた。そんなにうまく行くものかと護は思っていたが、今は冗談では済まなかった。
党幹部の娘で、政治指導員の慧子はただでは済まないだろう。ソ連、東欧圏が崩壊した際のビデオを見せられたことがあった。西側のテロ組織に扇動された民衆が暴動を起こし、今まで指導者と仰いでいた党の人々を追放し、西側のスパイ連中が政権についてしまう。

国は誇りを失い、市民は拝金主義者になり、軍人は蔑まれ、党関係者は犯罪者とされる。
「慧子を守る」
「ありがとう」
子供に言うような表情だった。
「大丈夫よ。あなたは死んだりしないから。私のために生きて帰ってきて」

召集は夜にかかった。集結したパイロットに向けて連隊長が演説した。連隊長は咳払いした。

「我が第三飛行連隊第三飛行中隊は、これより同盟国、沿海州自治共和国の基地に進出する」

沿海州自治共和国は、ソ連崩壊の際にどさくさに紛れて独立した小国だった。元ソ連の軍人や情報機関関係者で構成された政府が支配しており、ソ連の残党の吹き溜まりとも言えるような国だった。沿海州自治共和国とは相互防衛協力協定を結んでいて、有事の際は赤衛隊が基地を使用することも認可されている。

「詳細な作戦計画は、沿海州自治共和国基地で説明する」

勝彦が宣言する。その表情には迷いのようなものがあった。

「では、作戦幹部が飛行計画を告げる。全員傾注！」

作戦幹部が、淡々とフライトプランを説明した。

フライトプランを確認しつつメモを取り、口の中で復唱しながら護は思った。

ついに、他をはるかに引き離す世界最強の空軍と戦わなければならない。本当にアメリカ空軍から航空優勢をとれるのだろうか。アメリカが本気になったら、日本を潰すことなど赤子の手を捻るより簡単だろう。本当に勝てるのだろうか？

それでも、慧子のため、この国がアメリカに滅ぼされることを防がなければならなかった。

俺は慧子を守らなければならない。

数時間後の深夜。三沢基地から、護の所属する第三飛行中隊のＳｕ２７ＳＪ翔鶴一二機が出撃していった。全ての機体がミサイルと

増槽を搭載していた。ＭｉＧ２５ＰＤＪ雷電を装備する第八飛行中隊は、三沢基地防衛のために周囲の滑走路代用高速道路に展開している。邀撃に参加しない機体は厳重に隠匿された。

三沢飛行基地の第三飛行中隊のＳｕ２７ＳＪ翔鶴一二機は、沿海州とロシア国境に近い沿海州自治共和国の基地に到着した。

基地には同じく翔鶴装備の松島基地の第六飛行中隊、稚内基地の第二一飛行中隊も集結していた。

「ようこそ、同志諸君！　我々は米帝の侵略に立ち向かう同志日本人民赤衛隊諸君を心からの敬意をこめて歓迎する！」

まだソ連軍のつもりでいる基地司令官の内容の無い美辞麗句を聞かされた後、ようやく食堂に通された。慣れない夜間悪天候の離着陸と飛行のため、全員が疲労していた。

「やっぱり、これはイランツアーじゃないな。ラキエータを積みはじめた時からおかしいと思ったが」

鋭が言った。

「たぶん、邀撃に出るんだろう。だから足の長い翔鶴ばかり集めたんだ」

「沿海州の奴ら、よく基地を貸してくれたもんだ。米帝の次の目標にされかねないのに」

「これも商売だからでしょう」

「毎度のことながら、ここは滑走路の状態がひどいな。やたら短いし」

鋭は顔をしかめた。着陸にはパラシュートを展張して制動をかけ、短距離で着陸することが可能なドラッグシュートを使わざるを得なかった。

「野戦飛行場だと思えば」

ボソボソと食事をつつく者が多い中、山盛りの白米を既に二杯おかわりし、一人健啖ぶりを発揮している鋼が口を挟む。沿海州に輸出された日本米だった。今回の基地の使用も米で買ったのかもしれ

なかった。
「やっぱり、三沢から邀撃したかったな。できるもんならよ」
鋭が鼻を鳴らした。

護は硬いベッドの上に寝転がる。
目を閉じれば慧子の顔が自然に浮かんできた。こんな時に何を考えているのか、と自分でも思う。生きて戻りたかった。飛行訓練学校でも、基地でも、事故を起こして帰らなかった者の葬儀に立ち会ったことがあった。
墜ちた奴のしくじりを学んで生かせ。それが俺たちの務めだ。あとは整備の連中と自分の運を信じろ。いちいちぶるっているような奴は、ピロートなんぞ辞めちまえ。
目の前で無惨に落ちて炎上する仲間の機体を見て、そのことに耐えられずに辞めていった者もいた。それでも自分だけは墜ちないという確信があった。今はどうしても、その確信がするりと腕の中から抜けて行ってしまう。明日の本物の空中戦闘で自分が命を落としてしまうのではないか、という影のような思いが離れない。口では慧子を守ると言ったものの、爪を研ぎ澄ませている死を見つめてしまう。
こんなことでは慧子を守れない。

軽いノックの音がした。返事をしてドアを開ける。
鋼が立っていた。
「入って、いいか」
「ああ」
どういうわけか、鋼は困惑したような顔をしている。
「どうした？　飯の食い過ぎで腹でも痛いのか？　一人でおかわりしていたから」
「いや、そうじゃない。あのな……」
珍しく歯切れの悪い口調だった。

「護、最近変だぞ。体調不良なのか」
「いや、別になにもない」
慧子とのことを見透かされていたかのような気になって焦る。他のパイロットには、特に鋼には絶対に知られたくなかった。
「気になっていることがあるんじゃないか」
「ないよ。何を言っているんだ」
鋼は、静かに護を見つめていた。
「そうか、わかった。調子が悪くないならいい。もう聞かない」
ため息をつく鋼。
「かわりに、一つ、頼んでいいか」
何かを考えているような表情だった。
「ああ」
「何をしても怒るな」
「なんだよ、それ。お前こそ変なんじゃないか」
わざと茶化すような感じで言う。
「真面目な話をしているんだ」
「わかったよ」
「じゃあ、目を瞑れ」
「え？」
「いいから目を瞑れ」
声が震えている。
「それから歯を食いしばれ」
「おい、何を……」
「黙れ」
鋼が息を呑む音が聞こえた。
護を衝撃が襲った。頬に鈍い痛みが走る。固いベッドに倒れこんだ。目を開けると拳を固めた鋼が睨みつけている。誰もが怯むような鋭い眼光。
「何するんだ！」
「これでも手加減したんだからな。本気ならば、こんなものでは済

まないぞ！」
鋼が激して感情を露にするところなど、長い付き合いの中でも見たことがなかった。
「最近、弛んでるぞ！」
慧子のことを言い当てられたような気がした。
「しっかりしろよ。死にたいのか！」
「な……」
「明日はちゃんと飛べよ」
すぐに背を向けて部屋から出て行く。
護は頬を押さえて、鋼を見送った。

青蒼気圏　web. ver　〈20〉

基地は喧騒の只中にあった。全ての機体の整備が終わり、全機の完全な状態での出撃準備が整えられつつあった。先日の深夜から、北海道、東北の軍事施設に大規模な爆撃が加えられている。赤衛隊の予想通りの航空攻撃を主軸とした懲罰作戦で、在日アメリカ陸軍の動きはなく、本格的な侵攻ではなかった。

日は既に中天を過ぎようとしている。ブリーフィングの後、第三飛行中隊は、他のパイロットたちと共に割り当てられたフライトルームに揃う。いつでも飛び出せるフライトスーツ姿だった。ひどく静かだった。無理もない。ほとんどの者が初の実戦を迎える。護も緊張感が無いわけではないが、一人で宿舎にいるよりも案外と平静な自分に驚いていた。

「だいぶしんどいが、大丈夫か？」

鋭が心配そうな顔をした。

「はい」

「すまねえな」

「いいですよ。そのかわり、敵を撃墜してください」

「ああ」

容赦の無い編組だった。またミサゴの符丁が割り当てられた飛行小隊だったが、小隊長機の一番機は鋭、二番機が中堅の哲也、三番機が護、四番機が鋼だった。二機編隊は鋭と哲也、護と鋼が組む。

通常、最小単位である飛行二機編隊は飛行時間の多いベテランとまだ少ない者を組ませる。だが、今回はベテラン同士を組ませ、少しでも足を引っ張る者を少なくするという方法をとっていた。異常とも言える組み合わせだったが、そうでもしなければ、アメリカ空

軍に相対することは不可能だという判断だろう。
取るべきものは取り、捨てるべきものは捨てる。
目が醒める思いだった。

おそらく、現中隊長の勝彦が考えたのではない。怜人が少しでも勝ち目のある手段として編み出したのだろう。面倒見のよい、飛行中隊長としては申し分の無い怜人だったが、空中戦闘に関する人並み外れた研究熱心さゆえに非情さも持ち合わせていた。
開け放たれた窓から滑走路が見える。何機ものエンジンが空気を振るわせ、耳を潰すかのような轟音をあげている。航空燃料の臭いがきつい。

「しかし、まあ、思い切った作戦だよな」
「ええ」
沿海州の基地から発進した翔鶴装備の三個飛行中隊編成の連合飛行連隊が、指揮統制能力に打撃を与えるため、展開している空中警戒管制機を撃墜する。しかるのち、護衛の戦闘機をかい潜り、札幌を攻撃する敵の戦闘爆撃機をできる限り撃破するという作戦だった。敵の空襲がある度に迎撃するという通常の迎撃とはまったく異なる。
「いくら、ロシアから直輸入の新兵器だからって言っても、一度も扱ったことのない代物を持たされてもなあ。勝彦の奴、大丈夫かよ」
「操縦系は翔鶴と同じみたいですよ。しかし、邀撃機で管制をするなんて、聞いたことが無い」
「他の飛行中隊との協同演習も満足にやってないってのに」

今回の作戦では、レーダー・サイトの誘導が受けられない。色々と改革をしたものの、レーダー・サイトによる管制を基本とする防空赤衛隊にしては珍しかった。そのかわり、Ｓｕ２７の発展型で、限定的なデータリンク能力、空中管制能力を持つ複座型のＳｕ３０ＭＫに各飛行中隊長が搭乗して管制を行う手筈となっていた。

翔鶴には空中警戒管制機を狙うための大型ミサイル、製品ＫＳ１７２が搭載される。ＫＳ１７２は、未だ試作段階で今回はテストを兼ねて試作品を入手した。
冷戦中は高く見積もられすぎ、ソ連崩壊後は低く見積もられすぎるロシア製兵器だが、時にはアメリカや西側を驚嘆させる独自の発想から生まれた大当たりがないわけでもない。

護は隣の鋼に目を転じた。
「鋼」
「ん」
「昨日はありがとうな」
「後遺症は残っていないか」
「効いた。でも、それはない」
「そうか、よかった。腑抜けた奴とは組みたくない」
護は鋼と飛行分隊を組むことになっていた。飛行分隊長は護だった。二機飛行分隊長の資格は二年の経験を積んだ上、二尉に昇進しないと得られない。列機を預かって指示する立場になるのだから責任は重かった。通常は、まだ一年半で三尉の護が飛行分隊長など有り得ない。他の中隊もそういった編隊があるようだった。
鋼も、さすがにいつもより緊張している。
どこかに巣食っている恐れが、また頭をもたげてくる。
「護、怖いのか？」
鋼が不意に護を見つめた。
「馬鹿、そんなわけあるか」
「私は少しだけ怖い」
口とは裏腹に、なぜか余裕のある表情だった。
「でも、何だろうな。少しだけ嬉しい」
「嬉しい？」
「よくわからないけれど、やっと自分のやるべきことをできる機会が回ってきたような気がする」

「なんとなくわかるな」
こういう時、特に話さなくても通じ合うものがあると思えるのは、ひどく力づけられる。
「そうか」
鋼は笑みを浮かべた。
「頼むぞ、飛行分隊長」
「ああ。任せろ」
自信は欠片もないが敢えて断言する。
今日は、自分が鋼に責任を負う立場だった。
壁にかかった古びた時計の秒針が、妙に大きな音を立てている。搭乗時間が迫っていることを知らせていた。

曇天の下、Ｓｕ２７ＳＪ翔鶴が、下方の基地に轟音を叩きつけながら、離陸していく。高積雲の隙間から薄く光芒が射している。果ての無い広がりを見せる空は、遠近感さえ狂わせる。青一色の平面のような世界にさえ見えるが、雲があると立体的な世界だという実感が沸く。空に浮かぶ質量の無い島々のような雲から、地上に射す光は、それ自体が固体のようだった。

日本では、太平洋戦争以来ありえなかった大編隊と言える三個飛行中隊による連合飛行連隊、総勢三二機。第三、第二一が先行し第六飛行中隊が続く。第六飛行中隊の一〇機は、一発ずつ、必殺のＫＳ１７２を抱えている。護たちの第三飛行中隊と第二一飛行中隊は第六飛行中隊を護衛する形になる。
目標は日本海を北上中の二つの大編隊とそれを指揮する空中警戒管制機Ｅ３Ｃ。

既に方位、針路は北中国の定期便に見せかけた数機のＩＬ６２Ｍ改造の電子情報収集機が、Ｅ３Ｃの強力なレーダーを探知して、お

およその位置を割り出していた。もともと国際便の往来の多い空域なので、さほど怪しまれることはないという判断は正解だった。アメリカ軍の要望に反し、南北中国ロシアが国際線運行停止を拒否したのが幸いしていた。このＩＬ６２Ｍ改造の電子情報収集機は防空赤衛隊独自の機体だった。

離陸は、別の基地から発進したエスコート・ジャマー機、ロシアではＴｕ１６ヨルカの名を持つ三機の星雲から撒かれたチャフによって欺瞞されている。やや老朽化しているものの、星雲は防空赤衛隊が保有する唯一の電子妨害機で、爆弾倉の代わりにレーダーを妨害する、レーダー周波数に合わせて裁断したアルミ箔状のチャフ投射装置が七基、組み込まれている。今、敵がレーダースコープを覗けばチャフによる雲がいくつも見えるはずだった。

連合飛行連隊は落ち目の国とは思えないほど、鮮やかで緊密な編隊を組んでいる。

エスコート・ジャマー機の星雲が離脱していく。

「クマタカより各中隊へ。方位〇九〇へ針路変更。右旋回」

各中隊の指揮官はＳｕ３０ＭＫの後部座席に搭乗した連合飛行連隊長の指示通りに編隊を目標へと向ける。

高度一二〇〇〇メートルまで上昇する。以後は無線封止。

天から降る光の列柱の合間を縫って、大編隊は、雲海を突き抜け、高度を上げて青い空間を飛ぶ。この世で最も清浄な戦場へと。

機体の上に回転する円盤、レーダードームを乗せた空飛ぶレーダー・サイト、E3C空中警戒管制機は、アメリカの空軍力を支える力だった。強力なレーダー波は八〇〇キロまで届き、半径四〇〇キロ以内の飛行物体六〇〇個をレーダースコープに表示、うち二〇〇個の識別、追尾が可能だった。そのE3Cが一〇時間交代で上空に張り付いて敵の状態を監視している。航空攻撃、空中戦を完全に統制できる空中警戒管制機、AWACSを、まともに運用できる国は少ない。

作戦発動から一日。アメリカ軍はF117ステルス攻撃機やトマホーク巡航ミサイルなどで、レーダー・サイトはじめ、懸案となっていた核施設や指揮系統の中枢を叩き潰した。抵抗はほとんどなかった。要注意とされた大量の防空兵器も、指揮管制を失い無力化されていた。大規模な航空基地に攻撃をかけて、滑走路や格納庫も破壊した。立ち向かってくるはずの邀撃機は影も形も無かった。あまりの抵抗の少なさに空軍は計画を前倒しして、赤衛隊、社会安全省、人民党の施設への大規模攻撃を決定した。

ストライク・パッケージと言われる一〇〇機近くにものぼる防空網制圧機、攻撃機、電子戦機、護衛戦闘機からなる攻撃大編隊が目標に向かおうとしている。防空要塞都市とまで言われる札幌を目指すストライク・パッケージQと重要な軍事施設が密集する旭川を目指すストライク・パッケージNが空中を侵攻していた。

護衛戦闘機のF15Cイーグルが一六機、攻撃機のF16EストライクファルコンがF16EのSEAD（防空網制圧任

務）装備の一二機、電子戦機として用いられるＦ１６Ｃファルコンが四機。後方には一五機の空飛ぶガソリンスタンドのＫＣ１３５が、高度一五〇メートル、間隔一六〇〇メートルを空けて腹を減らした仲間たちのために旋回しつつ待機している。戦略爆撃を行うストライク・パッケージＮは、幅二〇キロ、長さ八〇キロにわたって展開する高度一〇〇〇〇メートルをゆく大空中艦隊だった。

ほぼ同じ規模のストライク・パッケージＱも少し遅れて飛行している。

さらに、空のレーダー・サイト兼司令部でもある空中警戒管制機のＥ３Ｃ、無線妨害用のＥＣ１３０Ｈ及び、敵のレーダーと無線に聞き耳を立てている電子偵察機ＲＣ１３５などが周回飛行している。ちょっとした小国の全空軍に匹敵する程の数の航空機に編隊を組ませ、空中集合させることを可能とするのは、アメリカ空軍のみだった。

空中警戒管制機Ｅ３Ｃのレーダー波に、Ｓｕ２７ＳＪ翔鶴の編隊が捕捉されたことをレーダー警戒装置が知らせる。連合飛行連隊はアフターバーナーを使い高速で三五〇キロまで接近し、ＫＳ１７２を放つ。即座に反転退避。

二発が動作不良で落下。八発は空中警戒管制機のレーダー波を辿り、護衛戦闘機を無視、音速の三倍以上の速さで殺到していく。

三発が目標を見失い墜落したが、残る五発はＫＳ１７２の速度からすれば、静止目標に近い速度のＥ３Ｃに突き進む。超長距離から高速対レーダーミサイルで狙われていることに気付かなかったＥ３Ｃは、回避運動はとったものの、レーダーの発振を中止しなかった。近接信管が炸裂する。破片が散弾のように周回中のＥ３Ｃに降り注ぎ、機体を引き裂いて地上へと叩き落す。

「命中！　命中！」
今まで自分たちを捕捉していたレーダー波が消えたことを、全ての翔鶴のパイロットたちは確認した。
「やったぞ！」
「米帝をやっつけた！」
興奮した若いパイロットの声が編隊に広がった。無線封止が破られてしまう。望外の大戦果と言うべきだった。
「タンチョウ一番機より全機、これより米帝の爆撃編隊を攻撃する。増槽を切り離せ」
連合飛行連隊長からの通信が入る。
アメリカ空軍が、指揮管制能力を一時的に喪失した今こそ、戦果を拡大する千載一遇のチャンスだった。
一斉に変針した大編隊は、アフターバーナーを焚かし、まっしぐらに手近なストライク・パッケージQに向かった。

視界を最も広くとれる横隊となり、四機で全周囲を警戒する。編隊長機が先行して僚機が斜め後ろにつく。午後の光が滲む雲海の上をＳｕ２７ＳＪ翔鶴の編隊が駆けていく。やや西に傾いた太陽の光は、連なる雲海に翔鶴の影を写しこんでいた。護はＨＤＤを睨む。とにかく、早く見つけて奇襲に成功すれば勝てる。レーダーは二四目標を発見できる目視外距離索敵モードになっている。

「カササギ一番機より全機へ、ナホートカ。二時方向、距離一〇〇、機数は二十機以上、針路三五二度に向けて、高度一〇〇〇〇を速度一三〇〇で飛行中」
土耳古石データリンク・システムが、第二一飛行中隊の中隊長機Ｓｕ３０ＭＫが捉えた敵らしき目標と計算された会敵予想地点を伝える。今、混成編隊は、ストライク・パッケージQの右背後に五〇キロまで近づいていた。

「タンチョウ一番機より、全機へ。ラダールを待機にして赤外線に切り替えろ」
今なら奇襲が可能だった。敵のレーダー警戒装置にひっかかることを恐れ、レーダーから赤外線捜索追尾装置に切り替えるよう、連合飛行連隊長の命令が届く。
「ミサゴ一番機より全機へ、一一時方向！」
鋭の声が響く。ほぼ、同時に何機から同様の通信が入る。
赤外線捜索追尾装置にも多数の反応があることを示している。距離は四〇キロ。この距離で反応があるのならば、おそらく、背面をさらしている戦闘機クラスの目標のはずだった。運良く、敵機の後方に接近しつつある。

「クマタカ一番機より全機へ、射撃用意」
さらに接近。
レーダー誘導ミサイルと赤外線誘導ミサイルの二種類の射撃準備をする。
二種類のミサイルを撃てば、レーダーを誤魔化すチャフ、赤外線を誤魔化す白熱したマグネシウムのフレアといった妨害手段をとられても、二発のうち、どちらか一発が命中する。伝統的なソ連式のミサイル射撃法で、教科書通りの手だった。
レーダー・ロックオンすると攻撃することを敵に知らせてしまう。怜人さんなら、もっと近づいて赤外線誘導タイプのみで、攻撃するだろう。

護はＲ２７ミサイルを選択した。
中距離用のＲ２７は自機のレーダーで誘導するセミ・アクティブ・レーダー誘導タイプと赤外線誘導タイプの二種類があった。今回、翔鶴の兵装は、セミ・アクティブ・レーダー誘導型のＲ２７Ｒが三発、赤外線誘導型のＲ２７Ｔが三発だった。他に短射程のＲ７３Ｍ１赤外線誘導ミサイルが四発。

「ストレリャート（発射）！」
命令が届く。
「ストレリャート！」
実戦で予想した達成感も高揚も、護には訪れなかった。
これから人を殺すという罪悪感はおろか実感もない。
何条ものミサイルの航跡が、なぜか、ただ、ひどく綺麗に思えた。
セミ・アクティブ・レーダー誘導型Ｒ２７Ｒの誘導をはじめる。
純粋すぎて意識できないほどの殺意が空を駆けていく。数十秒後に到達する。

ストライク・パッケージQは、レーダー警戒装置で探知したレーダー波に反応して散開したが、既に遅かった。動作不良や誘導ミスで落ちたミサイルもあったが、瞬時にして一二機が撃墜される。パニックが広がっていく。完全な奇襲だった。ストライク・パッケージQの攻撃機や地上制圧機は爆弾を投棄して急旋回、アフターバーナーを使い逃走していった。

主導権は防空赤衛隊に移りつつあった。

ストライク・パッケージQを追い散らした連合飛行連隊は、次の矛先を北上中のストライク・パッケージNに向けた。そもそも、敵を全機撃墜することなど、勝利条件には入らない。攻撃を諦めさせるだけでも充分な勝利だった。空中警戒管制機が撃墜され、混乱はまだ続いている。RC135やEC130、そして日本領空内のKC135などの高価値目標機は、すぐに安全な味方防空圏内に引き返していく。

すでに異常を察知したストライク・パッケージNは爆弾を捨て、迎え撃つ準備をしていた。護衛戦闘機隊が壁を形成すべく前に出る。頼り切っていたE3Cからの支援が無くなり、自機のレーダーを振り回している。

早くも連合飛行連隊のレーダーをレーダー警戒装置で検知したらしく、盛んにレーダーに妨害をかけてくる。HDDが白く濁り、また戻る。

「何も見えないぞ」

護は思わず毒づいた。周波数を変えても、それに追随して再び妨害してくる。敵編隊は、強力な電子妨害装置を装備しているようだ

った。レーダーで捕捉されはじめている。ロックオンされた、という叫び声。電子戦ではアメリカ空軍に一日どころか一年の長がある。
第二一飛行中隊のＳｕ３０ＭＫと数機の翔鶴が、敵の妨害電波源と赤外線捜索追尾装置によって捕捉した熱源などの方位データをデータリンクで共用し、三角法によって、目標のおおよその位置を確認した。データリンク機能の強みだった。
ついに敵を捕捉した。データが全編隊に分配される。
「クマタカ一番機より全機へ。各編隊で攻撃せよ。アターカ（突撃）！」
勝彦からの通信が入る。
「了解、ミサゴ一番機より全機へ。隊形を楔形に開け」
僚機がリーダー機の斜め上約四五度の位置につき、一五〇〇メートル程度の間隔を取って、援護しあう形をとる。連合飛行連隊は、距離を詰めて頭上を抑えるように突入していく。

出撃前のブリーフィング通りにやるつもりだった。
一方が目標を追い詰めて攻撃し、もう一方が敵機を監視しつつ攻撃する機を誘導し、安全を確保するというペア戦闘の基本通り、編隊長機の護が誘導し、鋼が攻撃する。
先手をとったのはストライク・パッケージＮだった。
「注意、ラキエータ！」
敵は目視外でアムラームを発射してきた。垂直上昇、銀の花吹雪のようなチャフが放出される。何機かが撃墜された。Ｒ２７Ｒの発射準備にはいる。
青空に無数の航跡が刻まれている。引っかき傷をつけたような空。航跡は、漂う羽毛を散らしたような巻雲に紛れてゆく。護は乾いた唇を舐めた。
「ミサゴ三番機より四番機、二時、こっちに回り込もうとする機をやる」
「ミサゴ四番機、了解」

目視外距離で各編隊が射撃の機会をうかがいつつ、ミサイルを撃ち合うという戦闘は、編隊の距離が近接するに従って数キロ圏内に縺れ込んで行く。ストライク・パッケージNは、奇襲のショックからは立ち直ったものの、E3Cが撃墜されたために戦場の把握が難しくなり、かなり混乱していた。

一方、防空赤衛隊にも誤算があった。E3Cを撃墜した後、ストライク・パッケージQは撤退させることに成功したが、Nは統制されていないものの、決然と反撃してきた。基本的には一撃離脱を旨とした作戦であり、長距離を移動し、燃料に不安のある連合飛行連隊にとって近接戦闘は予想外だった。Su30MKによる管制にも限界があり、離脱の機会を逸した連合飛行連隊は、反撃を受けて立つより他なくなってしまった。　双方の錯誤が混乱に拍車をかけていた。

レーダーを近距離用の垂直走査モードにする。ここまで近接した状態となるとアメリカ軍機の電子妨害を翔鶴のレーダーが突破し、再び敵を捜索することが可能となっていた。

身体中の神経が、翔鶴の表面に張り付いているかのような感覚を鋼は味わっていた。

レーダー警戒装置が、ひっきりなしに警告音を発して点灯する。

レーダー自体の敵味方は識別不能で、どこから照射されているか、まるでわからない。

翔鶴と似た二枚の垂直尾翼、双発の機影。

間違いなく敵だった。長い間主敵として想定してきたアメリカ空軍の制空戦闘機、F15Cイーグル。

護が敵の僚機を牽制する間、鋼はF15Cに向けてR27Rを一発のみ発射する。

当てる気はない。単なる時間稼ぎだった。Ｆ１５Ｃが回避をしている最中に、地面に向かって螺旋を描きながら急降下する。本来なら不利になる低空への降下だったが、鋼は何ら躊躇しなかった。空中警戒管制機のＥ３Ｃが撃墜された今、アメリカ軍の誇る鉄壁の情報支援も崩壊している。

目標の位置は護の翔鶴がしっかりと捉えており、データリンクでＨＤＤに送られてくる。

身体をシートに押し付けるＧの感触が重い。

雲を突き破り、高度三〇〇メートルまで降下、Ｆ１５Ｃの前を横切るように飛行する。

Ｆ１５ＣのＡＮ／ＡＰＧ１６３レーダーのパルス・ドップラー・レーダーは　地表と同化した翔鶴を敵機とは認識できない。機首を上向きに調整。レーダーを待機モードに、赤外線捜索追尾装置の垂直走査モードに。これで目標からは見えないはずだった。冷え切った静寂の空に嫌でも目立つ輝点が浮かび上がる。近距離。ただ、赤外線捜索追尾装置では目標の識別まではできないし、スピードや方向もわからない。鋼は、その目で自機を探しているＦ１５Ｃの挙動をすぐに見つけた。僚機と協力するらしい。

Ｒ７３Ｍ１短距離赤外線ミサイルを選択。ＨＵＤではなく、シーカーと連動するヘルメット装着式照準器Ｓｃｈｅｌ３ＵＭを選び、機動する敵機を狙う。ヘルメット装着式照準器は、パイロットが目線を動かすとそれに従い、ミサイルのシーカーが敵をロックオンする。Ｒ７３Ｍ１は自機の真横の敵にさえロックオン可能な、いわゆるオフ・ボアサイト能力を有している。シーカーが動き回る敵機をとらえた。

鋼は一気に加速した。低空を低速でうろうろしようものなら、次

の餌食は自分だ。攻撃と同時に速度と高度を得るつもりだった。白煙をひきずって、Ｒ７３Ｍ１がＦ１５Ｃを追いかける。回避運動をとる。

チャフ、フレア。今までのロシア製ミサイルに比べて欺瞞には強いＲ７３Ｍ１はＦ１５Ｃの至近で爆発した。回避できなかったＦ１５Ｃは尾翼を剥ぎ取られて、石礫のように落ちていく。

「命中」

まだ原始的な哺乳類が爪や牙を振るっていた頃、獲物に飛び掛って押さえつけ、その喉笛を食いちぎるような感覚が鋼の中に蘇る。神経は熱くなっているのに脳は冷たく冴え渡っていた。

高空に躍り出る翔鶴。

警戒音が鳴り響く。

「ミサゴ三番機より四番機へ、六時、真後ろだ。今、追い払う！」

護からの通信。

レーダーでロックオンされている。レーダー警戒装置の中央に赤い警告ライトが点く。後方から敵機が喰らいついている。

まだやれる。

ロールをうって離脱。鋼はＨＵＤを睨みつけた。

鋼の背後にＦ１５Ｃが迫っていた。

護は、鋼の真後ろに位置した敵機を振り払うために、敵機の後背に位置しようと必死で垂直ループをする。

Ｒ２７を定石通りに二発、発射する。鋼を狙うＦ１５Ｃは回避運動をとった。レーダー誘導のＲ２７Ｒは反れたが、赤外線誘導されるＲ２７Ｅは、フレアに突っ込み爆発した。破片と衝撃波がＦ１５Ｃを襲い、機位が下がる。

とどめを刺せる！

そう思った瞬間、通信が入る。

「ミサゴ三番機！　ラキエータ！」
Ｓｕ３０ＭＫに搭乗している中隊長の勝彦が警告する。
三機のＳｕ３０ＭＫは戦闘には極力加わらず、空中警戒管制機の役割を果たしていた。
一呼吸遅れてミサイル警戒装置が喚き声をあげる。

護は翔鶴を反射的に上昇させる。機体を捻るようにしてローリング・シザーズ機動に入った。ミサイルを振り払おうとする。ありたっけのチャフとフレアを盛大にばら撒く。アムラームはチャフの雲に突入して自爆した。
「ミサゴ三番機、無事か？」
「ああ。四番機、次、二時からくる」
一時離脱したが、一息入れる暇も無かった。
三次元の戦闘なのに、見えないラインに集中するように敵味方の機体が引き寄せられ、距離が詰まっていく。ファー・ボール、毛玉と言われる完全な乱戦状態となっていた。

青蒼気圏　web. ver　〈23〉

青空を航跡や爆発で汚しながら続いていた戦闘が唐突に止んだ。時間にして二分も無い。ストライク・パッケージNは急反転、アフターバーナーを焚いて離脱していく。一瞬で巻雲の向こうに消えていく機影。絶妙のタイミングだった。整然とした離脱の手際のよさはアメリカ軍の技量の高さを示していた。

空中警戒管制機が無くとも、アメリカ空軍の戦闘能力は恐るべきものだった。空中戦闘は双方互角といってよかったのに、消耗が激しすぎ、もはや、これ以上の戦闘は無意味と考えたのだろう。連合飛行連隊も、これ以上の戦闘は不可能だった。長い航続距離を持ち、増槽で下駄まで履いた翔鶴だが、重武装で戦闘機動を行ったため、燃料消費が激しかった。敵の判断に救われたと言えた。

まだ敵を探す護に、戦闘を停止して編隊を組みなおせという通信が届く。

「タンチョウ一番機より全機、聞いたとおりだ。深追いはやめろ。帰投するぞ」

防空赤衛隊連合飛行連隊は三二機のうち、一一機を失っていた。空軍力を何倍にもする貴重な空中警戒管制機E３Cを撃墜した上、ストライク・パッケージQとN、二一〇機のうちの二一機を撃墜していたから、大損害に見合わないというわけではない。むしろ大勝利というべきだった。撃墜数のうちのいくらかは、アメリカ軍による同士討ちだったが、今まで対戦闘機戦闘において、ほとんど損害を出さずに一方的に敵航空戦力を叩き潰してきたアメリカ空軍にとっては大打撃だった。ベトナム戦争の悪夢の再来だった。

護は鋼を呼んだ。
「ミサゴ三番機より四番機へ。編隊を組む。大丈夫か？」
返事はない。通信機が故障したのか。
「ミサゴ三番機より四番機へ、応答せよ」
雑音が聞こえるだけだった。
「鋼！　どうしたんだ！」
護が叫んだ。
撃墜されてしまったのか。戦闘機動で墜落したのか。注意していたのに。
戦闘が終了して神経が緩んだために身体中から噴き出した汗とは、別種の冷たい汗が流れる。
「ミサゴ一番機より全機へ。応答せよ」
「ミサゴ二番機、異常なし」
「ミサゴ三番機、四番機が、鋼が見えない」
護は焦って呼びかける。
「誰か見なかったか。いるはずなんだ」
「ミサゴ一番機より三番機へ。編隊を組み直して、警戒に当たれ」
「鋼が……」
「護、聞こえないのか。俺の命令に従え！」
鋭の声が飛んだ。

第三飛行中隊は七機まで撃ち減らされてしまったが、それに見合う損害をアメリカ軍に与えた。空戦と味方の喪失、勝利の実感が、ない混ぜになった状態だった。連合飛行連隊は、分散して基地へと帰投しようとしていた。
護は鋼のことを考えた。既に機器の不調で地上に降りているかもしれない、という希望的観測もないわけではないが、当てにならない。雲の下に出る。地表にへばりつくような三沢基地が霞んで見えた。

一両日離れていただけなのに、ひどく懐かしい。地上邀撃管制官の声は無い。既にレーダー・サイトが潰されてしまっていた。管制塔も破壊され、移動式ターミナル・レーダーの管制官が、雑音交じりで飛行場管制圏内に入りつつあることを告げている。滑走路も破壊されて機能していなかったが、移動式の倉庫や家屋で擬装された高速道路転用滑走路は無事だった。

「針路二四〇度、高度二〇〇〇を維持せよ」

鋼のことを頭の中から追い出して、操縦に集中する。何度か訓練で着陸した高速道路転用滑走路が見えてきた。ホッとした時、背後で太鼓を叩くような音がした。計器を確かめると左片方のエンジンの出力が、みるみるうちに下がっている。翔鶴のリューリカＡＬ３１Ｆエンジンは交換計画が遅れていた。いくら整備員が精魂を込めた整備をしても、エンジンの金属疲労そのものは、どうにもならない。

「ミサゴ三番機、左ドヴィーガチリ、煙吹いているぞ！」

鋭からの通信が入ってくる。

「了解、立て直します」

護は左エンジンを停止させた。幸い、火は消えたようだった。燃料に引火したら一巻の終わりだった。ターミナル・レーダー管制官に非常時の着陸であることを伝える。残っていれば破壊機救難消防車がすぐに出動するはずだった。

「護、無理せんで脱出しろ」

「ミサゴ三番機よりミサゴ一番機。たぶん、このまま持って帰れます」

高度は少しずつ下がり、八〇〇を維持している。いけそうだった。

「おいおい、本当に大丈夫か？」

「任せてください。先に降りて待っていてください」

ターミナル・レーダー管制官は、ミサゴ飛行小隊が最後に着陸するよう誘導していた。

「仕方ねえな」
一度、滑走路を通りすぎて旋回。スロットルを絞りながら、緩く高度を落としていく。グライダーのようだった。片方のエンジンが止まっているとは思えないほど、安定している。

よし、このまま降ろせばいい。

そう思った瞬間、護を先導していた鋭の翔鶴は突然、失速した。エンジンが火炎に包まれ、のけぞるような動作と共に機首を上にあげる。

かなりの近接戦闘だったため、撃破した機体の破片がエアインテークに入り、老朽化したタービンブレードを破壊した。タービンブレードは予備部品の不足から見えない亀裂が入ったままになっており、さらに空戦での無茶な機動が相当な負荷をかけていた。

エンジンから炎を吐き出しながら、なおも飛ぼうとするように鋭の翔鶴は、さらに機首を上にあげる。斜め横倒しになった翔鶴が、駒のように回転しながら滑走路の端を通りすぎて爆発した。

護が声を発する時間もなかった。

青蒼気圏　web. ver　〈24〉

煙がゆっくりと空へと交じり合って溶けて消えていく。黒い煙は空に何の影響も及ぼさない。ただよく晴れた青い空が広がっている。子供が無邪気にキャンパスを青で塗りつぶしたような鮮やかな青空だった。

三日間、昼夜を問わず暴風のように荒れ狂ったアメリカ軍の攻撃は中止されていた。

ラジオからは、クラシックが流れて時々ニュースが挟まる。

「現在、赤衛隊と警備機動隊は臨時人民評議会の命を受けて治安維持にあたっています……」

空中警戒管制機を撃墜され、ストライク・パッケージに打撃を受けたアメリカ空軍は軍事施設への攻撃を放棄し、迎撃機狩りと基地潰しに全戦力を振りむけた。数百倍にわたる報復を受けた結果、防空赤衛隊邀撃機部隊と対空機材網は壊滅した。「空の鵯越」は高いつけを払わされた。核関連施設や軍事施設の破壊に成功したアメリカは、テロ事件容疑者の引渡し、大量破壊兵器関連施設への国際査察と完全放棄、指導部の入れ替えを引き換えに、暫定的な停戦に応じた。人民党の指導部は退陣、首脳部は軟禁。官僚、赤衛隊、社会安全省からなる臨時人民評議会が国の運営に当たっていた。

「全ての愛国的人民の皆さんは、秩序を守り、臨時人民評議会の指示に従ってください……」

護には雑音交じりのラジオが耳障りだった。空に昇っていく煙も見たくはなかった。

三沢基地は機能を喪失し、全滅といってよい有様だった。第三飛

行中隊も戦力を失っていた。
多くの仲間が還らなかった。基地を目前にして鋭も戦死した。僚機である鋼も撃墜されたところを見たという者がいた。脱出は確認していない。護が生き残れたのは全くの偶然だった。撃破されただけでなく、護の機のように地上に降りてから大破した機も少なくなかった。

他の第八飛行中隊や支援飛行中隊も空中戦闘こそ行わなかったが、地上で大損害を蒙り、邀撃機の大半は稼働不能に陥っていた。短射程対空ミサイルと対空機関砲を装備した基地の防空を担う第三基地対空機材大隊や、青森に本部のある東北一帯の対空機材部隊の主軸である第六高射連隊も、アメリカ軍の防空網制圧機によって壊滅した。
人的損耗も激しかった。パイロットだけではなく、基地の要員も数多く犠牲になっている。三沢の惨状は赤衛隊の縮図だった。

戦死者たちの遺品が集められて、基地近くの空地で焼かれていた。親兄弟のいない隊員たちの少ない私物を引き取りにくる者など誰もいない。故人と親しかった者が、形見を受け取って、残りを焼いて空に帰す。私的な葬式だった。
第三飛行中隊長の勝彦はじめ、生き残ったパイロットたちは沈痛な面持ちを隠せなかった。

「大損害ですね」
慧子は断定するような口調で言い放った。
「あなたの能力にも疑問符がついてしまいますよ」
三沢基地の司令である飛行連隊長は答えず、穴だらけの滑走路を見つめる。
「輸送飛行中隊は健在だ。商売には差し障りはない。滑走路の修理だって今に終わる。そっちの望みの邀撃機だって何機かは擬装して

生き残っている。近いうちにラダールも手配して、すぐに基地の機能を復旧させる」
「皆、あなたに従うとは限りませんけど」
あくまで慧子は冷淡だった。
「そんなことはない」
連隊長は鼻に浮いた脂を拭きながら、自信に満ちた態度で言い切った。
「この基地の隊員を誰が食わせてやってきたと思っている。食わせてきたのも、戦闘力を維持してきたのも、全てはこの俺の采配の賜物だろうが」
確かに頷けないことはない。自活方針が打ち出されて以来、予算を食い潰し、機材を横流しして、部隊を疲弊させる指揮官が多い中、密輸入で基地を維持している連隊長は評価されるべきだった。
「同志須田によろしく言っておいてくれ」
「ええ」
あなたなんかと、先生が対等だとでも思っているのかしら。お笑いだわ。

護は鋼が制服につけていたパイロットの証、赤星銀翼徽章を掌に乗せて見つめていた。それは空を飛んでよいという奇蹟の印に他ならなかった。
僚機を、鋼を守れなかった。連れて帰ってやれなかった。二機編隊長失格だった。仲間は何も言わなかったが、どう言い訳しても、自分の責任だと護は感じていた。
俺はなんなのだろう。何も守れない癖に「護」なんてひどい名前だ。
自分でも何の思い入れもない、他人につけられた識別番号よりはちょっとはマシといった程度に過ぎない名前。孤児院を出る時に、赤衛隊飛行訓練学校に進む、という理由だけで付けられた名前だった。

鋼の遺品が火中に投ぜられる。
遺品は、とりわけ少なかった。いつでも、どこへでも飛んで行けるように、物を持たないようにしているかのようだった。予備のパイロットスーツ、制服に作業服など官給品の衣服、ノート、筆記用具、必要最低限の生活必需品、両親の写真。
護は焦点の合わない目で煙を見つめていた。鋼のファンの女子隊員たちが泣いている。中でも一人の少年のような隊員は号泣という以外、表現しようのない泣き声をあげていて護は胸がつぶれそうな想いをした。
鋼個人には、もう何も残っていない。　眩しすぎる太陽を仰いで目を逸らした。太陽の熱が重い。疲労感だけが、ただ身体に押し寄せる。足もとが定かでないような気がした。朦朧とする頭を抱えて座り込む。
「おい、大丈夫か」
勝彦が声をかけた。
「はい……」
「気分が悪かったら休めよ。まだ気にしているのか。邀撃機乗りは死んだら終わりだ。鋼も鋭も戻ってはこない。切り替えろ」
厳しい調子の勝彦の言葉は、いつかの怜人と同じものだった。今回の犠牲で最もショックを受けているのは勝彦のはずだった。楽な戦いではないと覚悟はしていたとはいえ、自分の率いた中隊から、戦果と引き換えに相当の犠牲を出してしまったのだから。
「それと、まだ終わったわけじゃないかもしれないからな。気を抜くな」
美しい青空は無慈悲で峻烈だった。何も無い。可視光線のうちの青だけを見る者の眼の中に押し込んでいた。
護は一人、フライトルームに残って、ぼんやりとしていた。
「護……」

いつの間にか、背後に立っていた慧子が声をかけた。慧子が無事だということは人づてに聞いていたが、顔を合わせるのは迎撃作戦以来、今日がはじめてだった。
「よかった。無事で……」
抱きついてくる。数日、忘れていた香りに包まれる。
「同志風野があんなことになって……なんて言ったらいいか……」
「鋼も鋭さんも帰らなかったよ。俺は何もできなかった。鋼と組んでいたのに。守ってやれなかった。編隊長だったのに」
涙が滲む。
「そんなこと言わないで。約束どおり私を守ってくれたじゃない」
「……」
自分の力ではない。アメリカに完全に叩き潰されずにすんだのは、上の方で色々と取引したからだ。迎撃を成功させてアメリカの戦意を挫いたわけではない。成功しようが失敗しようが、そもそも関係が無い。慧子の顔を見て安心したのか、どっと疲れが出てくる。
「慧子に何もなくてよかった。基地は爆撃されるはずだと思っていたし」
護は、慧子を強い力で抱きしめる。
「政治指導員は邪魔だからって、街の外の防空壕に集められたの」
今、両腕の中にある慧子の身体の温もりだけが確かなものに思えた。
「帰ってきてくれてよかった……」
切れそうな儚い電灯が明滅する。天井をヤモリが這っていた。
「ちょっと座って」
頭一つ分高い護を椅子に座らせて、顔を覗き込む。なんとなく検診を受けている時のようだった。
「凄く疲れた顔してる」
「そうだろうね」
笑おうとすると、顔が強張り、頬が引きつる。
慧子は護の頭を撫でる。こそばゆい。子供扱いされているようだ

が、嫌ではなかった。
「これ、あげる。食べてないでしょう」
ポケットから西側のチョコレートを出した。
「ありがとう」
護は礼を言ってポケットにおさめた。鋼にも分けてやろうか、と思い、もういないことに気づく。
「ねえ、今日、私の部屋にくる？　あそこも無事だったのよ」
小首をかしげる。眼鏡のフレームが光る。
「ごめん、今日は一人にしておいて欲しいんだ」
慧子の優しい声が、たまらなく厭わしく感じる。そう感じる自分自身にも嫌悪感を催す。
「あ、そうよね。私こそ……何言ってんだろ。ほんと、私って馬鹿なんだから」
そっと身を離す慧子。
「ごめん」
「いいの、いいの。無神経よね。ゆっくり休んで」
扉に向かう慧子を護は見送った。言ったこととは反対に、まだ慧子にいて欲しかった。
「一人で平気？」
もう一度、振り返る慧子。心の中を読まれたようだった。
「たぶん」
「そう。じゃ、明日ね」
俺だけ、鋼にも鋭さんにも無い明日がある。
ひどく不自然に感じた。

青蒼気圏　web. ver　〈25〉

旧ソ連極東防空軍が駐屯していた択捉島天寧空軍基地。目の前に戦闘機が翼を休めていた。怜人は我が目を疑った。

複座式のコックピット、鏃のような機首、マントをひょいと肩にかけているかのような折りたたまれた主翼、翔鶴に酷似した大型の垂直尾翼。

Ｆ１４トムキャット艦上戦闘機。間違いない。怜人が映画の中でしか見たことのないアメリカ製戦闘機。未だに少年のような憧れを捨てきれないでいる、叶えられるならば搭乗してみたいと願う戦闘機だった。

「どうかね？」

須田は上機嫌に怜人に語りかけた。買ったばかりの自慢の玩具を見せびらかす子供のようだった。

「どうやって、これを？」

「イランから譲ってもらった。代わりに弾道弾をロシア経由で売り払った」

革命前の帝政イランはＦ１４をはじめとするアメリカ製航空機を装備していたが、革命後はアメリカと決定的なまでに対立したために予備部品が手に入らず、共食い整備により数を減らしていった。残った機体も老朽化を免れなかった。日本民主人民共和国と革命後のイラン・イスラム共和国とは友好関係にあるので、取引は楽にすんだ。

「中身の方も闇市場から部品を仕入れて、かなりいじってある。アメリカ軍の最新型Ｆ１４Ｄにも劣らない。こいつを一個飛行中隊、そっくり君に進呈しよう。搭乗員も選りすぐりを揃えた。整備員や後席員には、こいつを長く扱ってきたイラン人や軍縮で失業したア

メリカ人もいる」
「なんだと？」
Ｆ１４一個飛行中隊を率いる。想像すらしたことがない。しかもアメリカ人？
「まさか、そのために俺を逮捕したのか」
「その通りだ。ここには、あらゆる熟練労働者、そして才能ある人材が集められている。社会安全省が役に立ってくれた。反体制的というレッテルを貼って収容所送りにすれば、すぐに欲しい人材が手に入る。おまけに赤衛隊も弱体化できる」
怜人は、今まで自分が受けてきた不可解な待遇に合点がいった。
逮捕された当初、体制に対する不満や批判を漏らしていたために密告されたのだろうと、怜人は苦々しく思っていた。

第二次世界大戦でソ連が占領した千島列島のうちの歯舞、色丹、国後、択捉は日本に返還されたが、実質はソ連軍が駐留している基地であり、重要拠点だった。ソ連が崩壊し軍が撤退すると、赤衛隊の基地施設引継ぎ要求は撥ねつけられ、社会安全省が管理運営する完全な収容所群島となってしまっていた。

取り調べも一切無く、網走収容所より過酷な流刑地といって差し支えない千島に送られるとは思ってもいなかった怜人は、さすがにうろたえた。クーデターの疑いでもかけられたのかと不審に思った。
しかし、択捉島の蘂取空港に降り立った時、怜人は驚愕した。中心地紗那のカジノもある高級ホテルに宿泊させられ、豪華な料理によるもてなしを受けた。狐につままれたような怜人だったが、島を巡るツアーに連れていかれて仰天した。
択捉島をはじめとする千島四島は、最早収容所ではなかった。社会安全省と官僚、闇市の帝王や南北中国、ロシアのマフィアたちが、収容所の労働力を完璧に活用している一つの巨大複合企業に変化を遂げていた。服や靴、海産物、小火器は無論、ミサイル、果ては麻

薬や人間そのものまでが、中国やロシアは言うに及ばず、あらゆる場所に輸出されて地下金融業さえ行われていた。
収容所の労働作業を効率化するために、南中国の外資を導入した結果だという。反共産主義分子を摘発するはずの社会安全省、共産主義的経済体制を構築していたはずの官僚が最も資本主義的な経営で択捉を一大産業交易都市にしていた。

「Ｆ１４で米帝と戦え、というのか？　だとするならば……」
「敵はアメリカ空軍ではない。ロシアの将軍に賄賂を送り、この基地は未だにロシアが租借しているということにしてあるからな。それに周囲は哀れな政治犯の収容所だ。アメリカは、ここを攻撃できない」
　須田は断言した。
「じゃあ、なんだ。まさかロシアか。それとも北中共か南中の軍閥か」
「いや、違う。赤衛隊の攻撃から千島を防衛してもらう。アメリカ軍の攻撃は不十分で完全には赤衛隊を無力化できていない。今、君のいた三沢基地はじめ、いくつかの基地を我々の側に引き込むか、無力化しようと思っているが、やはり自前の航空戦力が欲しい」
「クーデターでもはじめるのか」
「いや、国を乗っ取るのではない。潰す」
「国を潰す？」
「その通り。潰して売却する。役に立たなくなったら、そうするのが妥当だ。我々はもう飽き飽きしたんだ」
　須田は薄い笑みを浮かべた。
「我々の敵、いや、敵というのもおこがましい、今やただの獲物だが……獲物は日本民主人民共和国。この国そのものだ」
　こいつは、頭がおかしいのか？
「夏の初めに核実験があっただろう。核実験はアメリカを介入させるために我々が起こした。在西側日本米軍基地の襲撃も我々が行っ

た。不安定な状態を作り出すのに、アメリカの攻撃はもってこいだからな。そろそろ決定的な行動を起こす時だ」
あまりにも桁外れの話だった。たった一人で国を壊す。狂気の沙汰だが、この男は自分で組織を作り、収容所を資本主義の企業にしてしまった。
こいつの名前もスターリンをもじったひどい名前だ。俺もレーニンなどという、よくよく下らない名前をつけられた。人に下らない名前をつけるような国を処分するというのならば面白い。この男がこの国を潰すというのなら見てみたいものだ。何よりＦ１４に乗れるではないか。
怜人の中に、おき火のように燻っていたものが燃え上がった。
「いいだろう。獲物を仕留めよう」
「よし、商談成立だ。皆に紹介しよう。日本一の、いや世界一の戦闘機部隊にしてくれ」
須田は嬉しそうに、力を込めて怜人の手を握り締めた。

青蒼気圏　web. ver　〈26〉（前書き）

青蒼気圏　web. ver　〈26〉

「おはよう」
護は眠っている慧子に声をかけた。
「んー」
慧子が、気だるそうにベッドの上で寝返りをうった。
「ほら、朝だよ」
カーテンを開ける。光が滝のように窓から溢れ出す。
「うー、うーん」
髪は乱れ放題で、シーツの裾から白い太股がのぞいている。ひどい寝姿だったが、護には、それすら愛らしく思えた。
「ほぅあ……」
小さく欠伸をして身体を起こす。
寝乱れた髪の毛を掻き揚げる。肩から背中にかけての曲線に、澄み切った朝の光が滑って踊った。翔鶴の機体のラインと似て、慧子の身体のラインは美しかった。
「はい」
護は、マグカップに入れたコーヒーを慧子に差し出した。コーヒーは野戦コンロで沸かした湯で入れた。基地の朝食は紅茶が支給されるが、どうやって手に入れたのか、慧子は西側のインスタントコーヒーを好んで飲んでいた。貴重品のミルクと砂糖をたっぷりと入れて。
「あ、ありがとう」　微笑むとマグカップを抱えるようにして大事そうに持ち、一口啜る。
「あなたより早く起きられないわ。コーフェ（コーヒー）、入れてあげたことってあんまり無いし」
「いいよ。別に」

アメリカ空軍との戦闘から二週間くらいたっていた。飛行可能なＳｕ２７ＳＪ翔鶴はＳｕ３０ＭＫや複座練習機を含めて五機しか残っていなかった。
党の権威が失墜したため、政治指導員も危険を感じ三沢基地から逃亡した。政治指導員の長である連隊書記が行方不明になったのが決定的だった。まさに組織の末期的な姿だった。

そんな中、なぜか慧子は残っていた。今では定時に戻らなくても何も言われないため、護は寮ではなく、慧子のダーチャでともに暮らしていた。
護は自分のマグカップにコーヒーを注いだ。コーヒーを飲みながら、慧子が服を着る様を眺める。着たり脱いだりする時のちょっとした仕草が好きだった。
「こらぁー、そうやって見ないの」
「どうして」
「恥ずかしいから」

くすくすと笑う慧子。つられて思わず笑ってしまう。
あの戦闘があったのが、もう何年も前のことのような気がする。全てが終わったという何かが抜け落ちたかのような感覚。慧子との暮らしは、護の隙間にするりと自然に入り込んでしまっていた。警戒待機任務や訓練や政治集会の無い生活。朝起きて、昼は作業に出て、夜は慧子と過ごす。毎日が同じように繰りかえされる。あの張り詰めた空気はどこにもない。
不意に悪戯心が沸く。パイロットになってからは、とっくに捨てた子供の部分まで慧子にはさらけ出せた。
そっとマグカップを置いて、着替え中の慧子に後ろから抱きつく。きゃあ、という笑い声。そのまま、ふざけてベッドの上に倒れこむ。顔を見合わせて笑った。なぜだか、とても可笑しかった。甘えるようにキスをせがむ慧子に応えてキスする。起きあがって、また笑う。

ここにいると、本当に世界で慧子と二人きりのような気がしていた。
静かだった。エンジンの爆音もしない。ここしばらくは聞いてもいない。
あんな風に戦うのは、もう考えられなかった。
慧子が、鋼や鋭といった仲間を失い、打ちのめされていた自分を救い出してくれたと護は信じていた。慧子と一緒にいると、今まで生きてきて一度も感じたことの無い安らぎを覚えることができた。基地は破壊され、邀撃機もなく、多くの仲間が戦死し、国も崩壊しかけている今、護にとって、唯一、確かに存在しているものは、慧子だけだった。
「また、今日もカーシャだけど」
最近は配給も滞りがちで、夕方のみに食事が支給される。闇市で買ったり、仲間内で融通し合うしかなかった。食料は独自のルートを持っているらしい慧子が調達してきてくれた。
「いつもありがとう。晩飯にはジャガイモを持ってくるよ」
「気にしないで」
二人でベッドに腰掛けて朝食をとるなんて考えたこともない。粗末な蕎麦の実のカーシャ（粥）の朝食がひどく美味く思える。
「そういえば、慧子、眼鏡はしないんだね。ここだと」
一緒に暮らすようになってから、気がついたのだが、慧子はここでは眼鏡をかけない。縫い物をしたり、本を読んだりする時も。
「眼鏡、好きなの？」
「いや、違うけどさ……」
「はい」
慧子は眼鏡を護にかけさせた。視界は少しも歪まない。度のついていない眼鏡だった。
「実は伊達眼鏡。私、視力は両方ともいいの」
「じゃあ、なんでかけているんだ？」

「なんていうかな。お洒落のつもりともう一つ、かけると政治指導員っぽくなるから」
気持ちはわからないでもなかった。操縦でも型から入るということはあったし、真似をしているうちに本当に身に付くということもある。
「護も眼鏡、似合うかも」
「いいよ、眼鏡はいらない」
「ピロートさんだものね」

駄目だ。
こんなことで紛らわせていても何もならない。
わかっていたのに。
慧子は寝返りをうった。隣には眠りこけている護の寝顔。額にかかった髪を払いのけてみる。仔犬が眠っているようだった。逞しい胸板にそっと耳を寄せると、規則正しい強い心音が聞こえる。護の胸板に指で落書きしてみる。へのへのもへじ。
今までの男たちとは違う。もっと動物めいた感じだ。豚とか牛とか家畜の類ではない。群の規律に服する狼とかジャッカルとか野生の肉食獣系だ。でも、とても大人しい。
任務ならば息を吸うより自然なこと。でも、遊びでこういうことをするのは初めて。きっとこの子がそれなりに気に入ったのだろう。でも、気に入るのと好きなのは違う。似ているけど全然違う。叫び出したいくらい違う。
ひとつ、溜息をつく。
鳥の鳴き声がしはじめていた。
駄目なものは駄目。誰も、かわりなんてつとまらない。
「ナホートカ」
思わず、びくっとする。
護の寝言だった。
夢の中でも操縦桿を握って飛んでいるつもりなんだろう。

もう一眠りしよう。
慧子は身体を護に寄せて、シーツを肩までかける。
目が覚めてもいつも同じ。私の悪い夢はいつ終わるのだろう。

木造のバラックにしか見えない建物の中に、Ｓｕ２７ＳＪ翔鶴がゆっくりと納められていく。
厳重に保護シートをかけられた姿は蛹のように見える。周囲は雑木林に囲まれていて滑走路からも遠く、とても邀撃機を収めているようには見えない。屋根の隙間から光が漏れてきて眩しい。こうやって駐機場からも切り離されてしまうと、もう二度と飛ぶことがないような気がした。
「皆さん、お疲れ様―！」
慧子が、紅茶と黄色い箱に入った西側の携帯食料を配って歩く。おおっというどよめきが起きた。みな、一食でも手に入れば嬉しいのだ。慧子は護が回される作業には、必ず昼休みに現れて気前よく食糧を配って歩いていた。皆も喜んでいるようだった。自分自身に向けられる視線が、微妙に変わっていることに護は気づかなかった。

基地の整備、農作業など、地上でのイメージトレーニングの他は、空とは関係の無い生活を送る。護は慧子と一緒にいられれば、それで満足だった。社会安全省と赤衛隊の臨時人民評議会が、ぎくしゃくしていることも噂では知っていた。それでも、この日々が続くという根拠の無い楽観があった。そう思いたいだけだという自覚は護にもあったが、そこから離れられなかった。

粗末な夕食後、護はぼんやりとベッドに寝転がる。
「もう夏も終わりね」
涼やかな虫の音に、椅子に座って繕いものをしていた慧子が手を止めた。護の作業服を縫ってくれている。慧子は意外に縫い物が得意だった。

「そうだね」
打ち捨てられた航空機の尾翼や主翼、エンジンなどの合間の叢にも虫たちが息づいて、これから迎える短い秋を謳っていた。
「なんだか、眠くなるな。急に涼しくなったから」
「私も」
慧子が笑った。
「ね、なんだかこうしていると、おままごとでもしているみたい」
孤児院では、女の子たちがよくままごと遊びをしていた。おとなしかった護はよく座っているだけのお父さん役をさせられた。
「恋人だけど夫婦じゃないでしょ。西側だと同棲っていうみたいだけど」
「ドウセイ？」
「知らないの？　未婚の男女が一緒に暮らすことよ」
慧子は楽しそうな顔をした。護は、自分は本当に邀撃機を飛ばすこと以外に関しては全くの無知だと感じたが、決して不快ではなかった。慧子は本当に様々なことを知っている。暮らしのことから昔のこと、西側のことや世界で起こっていることまで。
「慧子も小さい頃は、ままごとをして遊んだの？」
「うん。よくしたわ。でも女の子ばかりだから、お父さんをしてくれる人はいなかった」
慧子は、家のことや子供の頃のことはあまり話したがらない。護も根掘り葉掘り聞きたくは無かった。そういえば、もう慧子が党幹部の娘だとか、そんなことさえも気にしなくなっていた。
「今度、銀ヤンマを借りて飛ぼうよ。慧子を乗せるから」
「本当？」
「うん、できれば、だけど……」
航空燃料は無いから、都合がついたらになる。適当に訓練という名目で持ち出す。いや、輸送飛行中隊の業務を手伝うことを申し出れば、貸してもらえるかもしれない。慧子と一緒に飛べたら、どんなに素晴らしいだろう。

「いいのよ、無理しなくて」
繕いものの手を止めて不意に護を見つめる。
「私……」
「何？」
「私ね、ずっと幸せになりたいって思ってたの」
「幸せ……」
「護は？」
空を飛びたい、パイロットになりたいといつも願っていた。パイロットになれば、さらに技量を向上させることを望んだ。幸せになりたい、などとは一度も思ったことがないし、考えたことさえなかった。
「ま、男の子は考えないか。私、今、幸せなんだって思ってる」
そう言うと、また繕いものにとりかかる。
「慧子」
「何？」
「俺も、よくわからないけれど、たぶん、幸せなんだと思う」
「なら、よかった」

後先のことは考えたくなかった。
社会安全省が有利になれば、今までと変わらない。赤衛隊が強化されたら、社会安全省の影響力は無くなるだろう。慧子はどうなるだろう。逮捕されたりしないだろうか？　いや……そうだ。
護の頭の中に今まで考えたこともない不遜な考えが閃いた。
銀ヤンマか秋桜を乗っ取って、西側に亡命したらどうなるだろう。赤衛隊が勝ったら慧子がどうなるかわからないが、西側なら帳消しにしてくれるかもしれない。色々言われているけれど、西側はここよりましだ。経歴を消して西側で暮せる。二人だけで。赤衛隊パイロットと政治指導員ではなく、ただの北上護と紫藤慧子になれる。民間でも軍でも西側に雇ってもらえればいい。慧子を守って生きていきたい。

慧子と一緒ならば、なんだってできそうな気がした。

青蒼気圏　web. ver　〈27〉

作業中に、社会安全省の警備機動隊と赤衛隊との衝突があったという話を聞く度に、護は慧子のことが心配になった。いったい、どうすれば慧子を守れるのだろうか。

昨日、妄想した亡命はどう考えてもできそうになかったし、基地を逃げ出すのには抵抗があった。脱走隊員は日々増えているので危険はないはずだったが、パイロットを辞めてしまうまでの決意はできなかった。

そろそろ昼食だった。

最近はトウモロコシが多い。

半分は慧子に持って帰ろうと思う。

その時、どこかの部屋で乱暴にドアが開け放たれる音が響いた。足音や怒鳴り合ったり、物を叩きつけたりする音、さらに銃声。

サイレンが鳴り響いた。非常呼集だった。

集会所は騒然としていた。何人かは青ざめた顔をしていた。連隊長が現れる。護たちの予想に反して満面の笑みを浮かべていた。

「すまなかったな、同志諸君」

「何があったのですか？」

第三飛行中隊長の勝彦が全員を代表して連隊長に問いかけた。詰問に近かった。

「我が基地に残存していた社会安全省の政治指導員同志諸君、及び隊内に紛れ込んでいた同志諸君を拘束したのだ。これより、赤衛隊は独自の行動をとる！」

周囲がざわついた。

背筋が凍る。

こんなところにいる場合ではない。慧子を助けなければ。でも、

どうやって？
「なぜ、今なのですか？」
「もっと早く、行動に出るべきだったかもしれんが、全員の洗い出しに時間がかかりすぎた。党の崩壊でこちら側についた同志政治指導員もいる。諸君も御存知の政治生活組織指導員、政治文化指導員などだ」
慧子は味方だった！　慧子は、こちらに情報を流していたのだ。連隊長の愛人だったというのも任務のためだった。慧子が助かったというだけで充分だった。
「連隊長、警備機動隊と戦うんですか？」
別のパイロットが大声を出した。
「いや、今現在、赤衛隊の一部が西側に対しての戦争を計画している。我々はそれを止めなければならない！」
ざわめきがさらに広がる。
なぜ、西側と？　西側に仕掛ければ、今度こそ、アメリカ軍も本格的な攻撃を手控えないだろう。いくら赤衛隊の強硬派でも、そんなことはしないはずだった。
「驚くのも無理はない。だが、事実だ。我々は西側軍と合同で……」
扉が蹴破られた。

赤衛隊の憲兵である警務隊がなだれ込んできた。
「その男を拘束しろ」
護は目を見開いた。顔見知りの労農作業大隊の大隊長、鳥井だった。なぜ、こんなところで警務隊を指揮しているのか。止めようとしたパイロットたちともみ合いになる。
「連隊長、こいつらは！」
「社会安全省の残党だ、もうすぐ……」
「出鱈目を言うな。裏切り者め！」
鳥井が一喝した。連隊長が取り押さえられる。
「失礼、同志ピロート諸君。我々は赤衛隊情報偵察局だ。三沢警務

中隊長もこの作戦を承認しており、隊員を貸してくれた。基地警備隊も我々に協力している。連隊長の命令で拘束された者たちは、社会安全省の同志諸君ではない。我々の手のものだ」
赤衛隊情報偵察局は対外工作を主としていたが、社会安全省や人民党なども密かに内偵していた。相互監視は、この国の機関では当然のように行われていた。
「本当だという証拠は？」
勝彦がたずねた。
「中部飛行師団長の命令書がある」
書類が示される。本物だという証拠はないが、絶対服従を旨とする赤衛隊では珍しかった。
「贋物だ。こいつらは社会安全省だ！」
喚く連隊長に頓着せずに鳥井は話を続ける。
「いずれ正式な命令が下るだろう。同志連隊長は、君らを欺いていたのだ」
「連隊長……」
「信じるな。嘘に決まっている！」
連隊長が吠えた。
「君の雇い主を我々はよく知っている」
パイロットたちの視線が注がれる中、連隊長の顔は見る見る青ざめていく。有無を言わさず連行されていく連隊長。
「同志ピロート諸君は、正式命令がくるまで待機してくれたまえ。さて、と……」
鳥井は、パイロットたちをぐるりと見まわした。
その視線が護で止まった。
「同志北上護三等空尉。貴官を拘束する」

ブラインドの向こうから赤い光が滲むように漏れてくる。隙間から見える滑走路が、赤い光の底に黒く沈んでいた。
護が一室に押し込められて数時間がたっていた。
連隊長は、社会安全省の政治指導員を拘束したと発表したが、それはまったくの嘘で、実際は赤衛隊情報偵察局員を捕え、社会安全省と結んで赤衛隊を攻撃しようとした。今度は逆に情報偵察局が反撃して、突然連隊長と俺を拘禁した。何が起こっているんだか、さっぱりわからない。誰が味方で誰が敵なんだろうか。
机に突っ伏す。

それよりも慧子だ。慧子は連隊長の仲間で、俺たちを社会安全省側に引き込もうとしたのだろうか。ということは、俺も連隊長側、社会安全省のスパイになったのだと疑われているのだろう。でも、俺がスパイではない、ということは勝彦さんや他のパイロットが証明してくれる。
もし、逮捕されたら、誤解を解くどころではない。ただではすまないだろう。きっと連隊長に利用されているだけだ。もし、本当に社会安全省の意向を受けているとしても、大それたことができるわけがない。自分でも慧子は新人の下っ端だ、と言っていたから、きっと、ただの連絡役だ。だいたい赤衛隊と社会安全省の争いなど、俺たちには関係もない。なんとか逃げて欲しい。

「すみません、お待たせして。赤衛隊情報偵察局の二葉一曹です」
扉が開いて、一人の少女と言ってもよいくらいの若い隊員が敬礼する。茶碗に入った白湯を置く。紅茶さえも底をついていた。
「あなたが裏切っているなんて。同志風野も悲しむでしょう」

「裏切ってなんかいない。だいたい、なんで鋼が……」
「覚えておられませんか？」
二葉の瞳が護を見据えた。
鋼の葬式の時に泣いていたファンの少女だった。
「がっかりです」
大げさに肩をすくめる。
「同志鋼は、あなたのことを大変に評価しておりました。それが、あんな女に誑かされて、あいつらの手先に成り下がるなんて」
「何を言っているんだ！」
「まあ、正直に協力することですね」
二葉は吐き捨てるように言い放った。

「いやあ、すまないね。面倒をかけて」
労農作業大隊長改め、赤衛隊情報偵察局の鳥井が親しげな笑みを浮かべて護の目の前に座る。二葉が鞄を抱えて仏頂面をして立っている。
「基地の掃除は終わったよ。おっと、彼女も赤衛隊情報偵察局の局員だ。自分の監視対象に逃げられたので、少々かっとしているが」
本当の階級は二佐なんだよ、と言って笑う。
「君とは、労農作業大隊で会ったなあ。同志風野も一緒だった。彼女は残念だった……」
「同志班長……」
二葉が持っていた鞄からファイルを取り出す。
「ああ、そうだ。そろそろはじめよう。まあ、形式だけの調査だから」
護はホッとした。偶然、労農作業大隊に配属されたのは幸運だった。

この人なら大丈夫だ。
かいつまんで慧子との馴れ初めや、アメリカ軍との戦闘後に一緒

に暮らしたことを話した。ちらちらと嫌悪感を剥き出しにした視線を送ってくる二葉が、鬱陶しかった。
「なるほど……で、彼女に協力したと」
「協力などしておりません」
「君はそう思っているかもしれんがね。外から見るとそうは見えないよ。彼女は君のいるところに必ず現れている」
鳥井は、顔に笑みを張り付かせたままだった。
「君の経歴を読ませてもらった。素晴らしい経歴だね。赤衛隊の邀撃機ピロートと言えば、大変な努力をせねばならない。いや立派なものだ」
まったく変わらない表情で、不気味なほど澱みなく話す。
「でも軽率だったねえ。まさか、連中の手先に引っかかってしまうなんて。いや、責任を問おうなんて思っていない。君は被害者なんだ。利用されただけだ。私たちも、よーく考慮するよ」
脚に震えが走る。弁護されている気がしなかった。
「ああ、そうだ。今、何が起こっているか他の赤衛隊の諸君にも知らせるべきだと私は思っていて、説明している最中なんだ。君にだけ教えないのは、公正じゃないからね」
「赤衛隊と社会安全省の争いでしょう」
結局、俺たちは巻き込まれただけだ。たまたま、こんな国に生まれたから、俺も慧子もこんな目に合う。
「赤衛隊と社会安全省？　どちらが、人民党が権威を失ったこの国で次の支配者になるか？　ああ、そう見えるね。だが、違う」
鳥井の顔から笑みが消えた。
「今、この国は潰れかかっている。まず経済がどうしようもないくらい傾いているからだ。共産主義は機能していない。そもそも偉大なるマルクスが提示した共産主義というのは、一九世紀の資本主義の駄目な部分を指摘した程度のものなんだ。著作にも来るべき共産主義社会については、驚くほど少ない記述しかない。で、結局、何も思いつかないものだから、色々なやり方を知っている資本家を排

除して、官僚が経済を統制する計画経済を推し進めた。まあ、これも地方勢力が割拠したり、産業基盤が脆弱な国が中央集権化して基礎固めをする過渡期な方法としては、そう間違ったやり方ではないのだが、いかんせん我が国はその期間が長すぎた」

鳥井は滔々と話を続ける。

「党も官僚も既得権益を手放したくなくて、人民の手に経済を返さなかった。経済は人民のものなのに。人民の頭の中まで口を出して管理統制を続けた。文句を言われないで自分たちがいつまでも権力を握っていたいからな。支配者たちは、分け前しか考えていない癖に、さも全てをわかっている選ばれた賢者のような顔をして、頭の中だけでしかうまくいかない計画を構想して首を捻っていた。そんなことをしているうちに本当に首を折ってしまって、我が国は駄目になってしまった。だから、そろそろ変えようというわけさ。長い間、失敗を認めたがらなかったけれどね。たいへん結構な話だよ。本来の姿に戻るのだから。多少は混乱するだろうが。我々赤衛隊は、本来の任務を果たすため、変えるための組織に協力しているんだ。まあ自分の国はどれだけ傾いていても守らないといかんしね。宮仕えは苦労が多いのさ」

慧子から同じような話を聞いたことがあった。

「ところが、混乱に乗じて火事場泥棒のように、他人の命とか、祖国の公共のものとか、そういうものを勝手に私物化して、全部外国に叩き売ってしまうのはどうかと思うね。軍や警察、政府まで外国資本に売りたがる。何より、なんでもかんでも売ろうとしている奴らは、ついこの間まで人民の導き手と称する連中だったんだから余計に始末が悪い。我々の敵は、要するにそういう連中なんだ。そういう連中を何と言うか知っているかね」

鳥井はとっておきの冗談を言うような顔をした。

「売国奴というんだ。私だってね、愛国者を気取るつもりはないが、なんというか、さすがになあ、仕事上、こういう連中を見逃すわけにはいかないんでね。同志連隊長や君の素敵な恋人は、彼らのため

に働いていたんだよ」
「そんな……」
「官僚の一部と闇市のマフィア、社会安全省の半分と警備機動隊、裏切った赤衛隊少々が、彼らの正体だ。西側日本の経済マフィア、南北中国の様々な党派の一部と結びついて、この計画を実行しているようだ。まあ、国際共産主義ならぬ、国際経済マフィア連合というかそんなものだろうね。最終目標はよくわからないが」
目を細める鳥井。
「同志紫藤指導員の居場所を聞きたい。拘束していない怪しげな政治指導員は彼女だけだからね。どんな意図で君に近づいたか知らないが、まあ、君が匿っているんじゃないかって話になっているし」
「知らないんです」
護は声を絞り出した。
「本当かな？　今はね、大事な時期なんだ。札幌周辺も敵側の警備機動隊と戦闘になるようだ。散らばった航空部隊を三沢に集めたいから、ここの安全を確保しておきたいんだ。というわけで、少しばかり急いでいる」
鳥井は、護が一度も口をつけなかった湯呑を勝手にとって一口飲んだ。
「というわけで困っているんだ。助けてはくれないかな」
「しかし……その、俺は……」
慧子のことは話したくなかった。

「話し辛いか。困ったな。でも、話して貰わないとな……うーん、そうだ、指が無いと操縦桿は握れないよねえ」
鳥井の言っている意味がわからなかった。
「こういう社会安全省の変質者のような真似はしたくないんだが」
鳥井は顎をしゃくった。
二葉がニヤリと唇を歪める。陰惨な笑みだった。今までの少女らしい表情は全て演技だったとでもいうような笑顔。ゆっくりと大型

のナイフを引き出す。夕陽の赤い光に刃が煌く。
「心当たりだけでもいいよ」
親切そうに鳥井は言った。
「そうそう、君が怪しいということを最初に教えてくれたのは、君の仲間たちだ。第三飛行中隊の面々さ。李下に冠を正さず、と言うだろう」
鞄から書類の束を放ってよこす。取調べを速記したそのままの記録。何の粉飾もされていないから、ひどく生々しい。
護は裏切り者になっていた。知らないうちに。

涼しい夜だった。北方四島の夏は海霧やオホーツク海からの冷気のために過ごしやすい。意外なことに、暖流のため冬でも北海道より暖かいくらいだった。

格納庫では数機のＦ１４が整備を受けていた。

Ｆ１４は息をしていた。三沢のＳｕ２７ＳＪ翔鶴のように、呼吸をなんとか整えて飛び立っていく、というような危なっかしさではなく、じっと力を溜めて獲物を狙い空を睨み付けているようだった。

機体の点検を終えた怜人は、整備員が群がるＦ１４を眺めた。

「しかし、驚きだ。ここまでＦ１４がうまく仕上がるとは。本国で欲しがっているアメリカ製の部品があるだけではない。整備員が素晴らしい」

「同感だ」

怜人とナーセリーは、満足気に忙しく立ち働く整備員を眺めた。

パイロットや整備員は、三沢の他、千歳などから集められていた。いずれもベテランの上、この国を憎んでいる者たちだったが、ナーセリーのような外国人も多かった。

須田が怜人に声をかけた。

「仕上がりはどうか」

「訓練は完全だ。あとは語学くらいか。通信や管制まで全部、英語でやっているからな」

外国人パイロット、地上邀撃管制官も含めて、腕のいいスタッフを集めたのだから、それほど調整に時間はかからなかった。

「君にとってはあまりよくない知らせだが、三沢基地を抱きこむのには失敗した。赤衛隊の情報偵察局が紛れこんでいたらしい。君の

ところの連隊長も気付かなかったようだ」
「まあ、あの連隊長ならば仕方ないだろう」
怜人は鼻白んだ。政治指導員とつるんだ横流しや商売は上手くても、脇が甘かったようだった。
「赤衛隊で誘いに応じた部隊は少ない。もともと、あまり期待はしていなかった。軍という組織は、いつでも保守的で鈍重だ。おっと、赤衛隊は軍にして軍ではなかったな」
須田が苦笑した。
「三沢を潰すのか。俺の育てた奴らもいるが未練はない。仕事とあらば爆撃する」
口では言い切ったが、さすがに勝彦や鋭、護や鋼は惜しかった。できれば、もう一度、部下にしたかった。
「いや、私の雇った警備機動隊の部隊がある。そいつらにやらせよう。防空の方が重要だ」
おそらく俺が三沢を潰すのを躊躇うと思っているのだろう。まあ、それくらい用心深いのならば、かえって安心だ。

須田は怜人とナーセリーに紙コップをわたして、自らコーヒーを注いだ。
「いよいよ、閉店セールにかかる」
「閉店セール？」
「店終いをする時に、何もかも叩き売ってしまうことだ。この国はもう駄目だ。西側はうまくいっているのに東側が、なぜ駄目か考えてみたことはあるか？」
「時代遅れの共産主義だからじゃないのか」
「そうだ。だが、共産主義による官僚支配を誰が許した？　ソ連か？　戦争に負けたからか？　仕方なかった？」
須田は畳み掛けるように続ける。ハンサムと言っていい顔が、狼のような面構えに変わっていた。
「改革派の連中は、したり顔で言っていた。国を傾かせるのは、権

力亡者で無能な党幹部や官僚だ、と。それは誤りだ。怠惰で無能な人民が全ての要因だ。愚かな人民が真に優れた者を引きずり降ろすことを容認し、奨励することで、党や官僚は権益にしがみつくことが初めて可能になる。適当に民衆を喜ばせながら君臨しはじめる。体制による弾圧？　権力者の横暴？　そんなものは存在しない。皆、人民が望むからだ。衣食住さえ保証してくれれば自由はいらない、どうか有能な人々を追放し、強制収容所に入れて殺してくれ。私たちは家畜になりたいんだ、と。東欧やソ連の崩壊さえ、日本には波及しなかったではないか。社会安全省の資料を見たが、誰も、誰一人として、まともに人民党に刃向かった者はいない。ブツクサ呟くのがせいぜいで、命をかけて戦った者は、戦後の混乱期の一握り程度だ。程度の低い人民が国を駄目にしたんだ」

叫ぶように話す須田。

「社会安全省から資料を見せられたが、笑ってしまったよ。驚くほど多い密告者のほとんどは、脅迫されたわけでも家族を人質にとられたわけでもない。自発的な密告なんだ。愛国心？　違うな。特典や賞金目当て？　それもあるだろうが決定的じゃない。一番大きな原因は他人を貶めたいという心理だ。自分より優れた者を決して認めず、足を引っ張るのが好きで、下を覗き込んでは自分より下だ、無能だ、貧しい、愚鈍だと思える人間を見て一安心する。大衆の捻じ曲がった精神のなせる業だ。今は無き同盟国、東ドイツでも同じだそうだ。弾圧されている善良な市民が抑圧している体制を支えてきた。牢獄の国は民衆が囚人であり同時に看守でもある」

いや、戦った者を俺は一人知っている。名前すら与えられなかったけれども。少なくとも勇敢だった彼女の瞳をよく覚えている。

須田の独演を聞きながら、怜人は孤児院の頃のことを思い出した。時折、反芻するように思い返している記憶。

上級学年の彼女は、怜人にとって地上に降りてきた輝かしい女神も同然だった。理不尽なことには、　孤児院の独裁者である教官に

も黙っておらず、割り当てられた作業は工夫して最も早く正確に効率よく終わらせて、賞まで獲得した。いじめられる新入りの孤児を必ず庇った。怜人も助けられた一人だった。美しく、聡明で、毅然とした彼女を皆が慕っていた。幼い怜人は彼女に声をかけて欲しいと素直に思って仕事を手伝った。

御褒美は、心の篭ったありがとうという言葉と彼女の傍らで過ごすこと。水色の空が柔らかい黄色を帯び、赤く燃える夕焼けに変るまで、ボロボロの本を読んだり、編物をしている彼女の周りで遊んだ。彼女は時々怜人に微笑みかけて、空を見上げて他愛の無い話をした。雲の形が動物に似ているよ、とか、空が飛べたらいいのにね、だとか。幼かった怜人は労働作業がきつくて食事が粗末でも、幸せだった。毎日、少なくとも彼女が孤児院を出るまで、変わらない日々が続くと信じていた。

だが、彼女は密告され、怜人の幸せは消し飛んだ。反共産主義的傾向が見受けられる、と。子供であろうが容赦はされなかった。彼女は拷問そのものの取り調べを受け、矯正施設へと送られた。たとえ名前が無くても人間として最後の誇りを守るため、彼女は自ら命を絶った。跪いて生き長らえるより自ら死を選んだ。

その後、今まで口を極めて彼女を賞賛していた連中が、掌を返したように、彼女を貶め、あげつらった。

言いすぎるから、ああなるのよ。

やれやれ、仕切屋がいなくなってよかった。

誰も、誰一人として彼女を擁護するどころか、悲しみさえもしなかった　怜人がこの国の全てを憎むようになったのは、この時からだった。

「もう、こんな国はうんざりだ。真に能力あるものこそ、全てを得るに値する。特別な一握りの人間だけが中枢を占め、残りは交換のきく部品や資材として扱うべきだ。共産主義も資本主義もそれは変わりない」

あとのことなど、知ったことではない。須田の好きに支配でもなんでもすればいい。この国を潰すことが彼女の復讐になるかはわからない。だが、それこそが俺の心底からの願いであることは間違いない。

護は一室に監禁されたままだった。
結局、思い当たる場所を全て話してしまった。慧子がマフィアのような連中の手先だったということを簡単に信じたわけではない。拷問に脅えたわけでもない。パイロット仲間が自分を赤衛隊偵察局に密告していたという事実が、全ての気力を奪ってしまっていた。
疑われるようなことをしていたのは確かだった。だが、誤解をとく機会さえもない。納得などできない。
なぜ、俺が裏切り者扱いなんだ。本当に何もしていないのに。みんなが俺を見捨てた。一緒に戦った仲間なのに。普段はみんな政治指導員の悪口を言っている癖に、密告は汚いとか言う癖に赤衛隊の情報偵察局になら取調べで喋るのか？　それとも脅されたのだろうか。慧子と付き合っただけで、仲間を売ったわけじゃない。
これからどうなるのかという不安と自分が裏切り者になってしまったという後ろめたさが、無意識のうちに仲間への失望へとすり替わっていく。
爪を噛む。とっくにやめたはずの癖だった。
畜生。もし、怜人さんがいたら、絶対に誤解だって言ってくれるはずなのに。よく知りもしないで勝手なことを。俺は悪くない。慧子だって本当にマフィアの手先なのか？　本当に怪しいのは鳥井二佐じゃないのか。誰が内紛で勝とうが、俺には、俺たちには関係ないのに。俺は裏切り者じゃない。なぜ、俺が、俺だけが、こんな目に。
壁を通して振動が伝わってきた。疲れ果てていた護だったが、すぐに反応して跳ね起きる。いつも聞くジェット機の引き裂くようなエンジン音ではない。規則的な震動。

ヴィルタリオートか？
微かにヘリコプターのローター音が聞こえる。空中を叩くローター音は、あっという間に近づいてくる。耳を潰すような音。
護はブラインドを上げ、窓を開け放った。
何かが鋭く空を切る音と同時に爆発音と衝撃波が広がった。正面ゲート前の監視哨が爆発で吹き飛ばされる。護の視界が白くなった。反射的に床に伏せる。一瞬後、窓ガラスが飛び散った。こわごわと窓の外をのぞく。

Ｍｉ２４Ｖ雀蜂が、炎の照り返しを受けて特徴的なシルエットを浮かび上がらせていた。西側ではハインドの名でよく知られる雀蜂は、地を這うもの全てに大きな恐怖を与えた。日本名の通り昆虫のような禍々しい巨体を傾け、地上施設にロケット弾と一二・七ｍｍガトリング砲の雨を降らせていく。あちこちで爆発が起こった。
警備機動隊は雀蜂を空中隊員輸送回転翼機という名で保有していた。列記とした攻撃ヘリである雀蜂を、兵員用キャビンを備えているから輸送ヘリである、という屁理屈を振り回して装備を認めさせたのだった。
対空機関砲が射撃をはじめた。オレンジの火線が夜空を彩る。再びロケット弾が発射される。一瞬で掻き消されてしまう抵抗。自動小銃など手持ちの火器で反撃する者もいたが、空の重戦車の前には無力だった。全て雀蜂の叩きつける火力の前に沈黙を強いられる。対空ミサイルを全て叩き潰され、消耗した三沢基地には抗う術すらなかった。耳を聾する音をあげて飛び回る雀蜂は、炎の舌で地上を舐めつくしていく。

ここも巻き込まれるかもしれない。とにかく外に出なければならない。護は、衝撃でガラスが割れた窓を開けた。下を覗く。大した高さではなかった。狭い窓だったが、無理矢理身体を押し込んで足を外に出す。意を決して飛び降りた。着地と共に足に鈍い痛みがは

しるが、大したことはない。飛び降りた場所が叢だったのが幸いした。
すぐに伏せる。そして匍匐前進。
匍匐前進など、新入隊員の訓練以来だった。
一方的な低空攻撃を終えた雀蜂のうち、数機は滑走路上に着陸しはじめた。雀蜂の横腹が開いて、兵員用キャビンから人影が飛び降りはじめる。基地警備隊との銃撃戦がはじまった。断続的な機関銃音と光点が飛び交う。

どこに行けばいい？
まず、機体のところだ。
護は恐怖と焦る気持ちを捻じ伏せた。
まだ使える滑走路と隠した機体がある。そこで命令を待つしかない。自分が裏切り者にされてしまったという意識より、命令を受け取りに行くべきだという長年身体に染み付いた思考が優先する。自分で判断してよいことなど、空中戦闘の時しかない。命令を待ち従うことこそ、常に理に適っている。護は無意識のうちにそう思うように訓練されてきた。
慧子と散歩した雑木林の奥、村落に偽装した場所に機体がある。まだ生き残った防空機材やレーダーもあるはずだった。

早い早い。先生が回してくれたに違いない。
慧子は、懐中電灯を振った。特殊警備機動隊に合図して、向こうから確認が帰ってくるまで待つ。誤射されてはかなわない。
基地を制圧した赤衛隊情報偵察局、警務隊は基地の外にまで捜索を広げていたが、慧子は敢えて基地の中に留まっていた。大胆にも警務隊の詰めている棟のすぐ隣、図書館の書庫にある地下室に隠れていた。もともと基地内には赤衛隊の叛乱に備えて、いくつかの連絡拠点があった。中でも、この地下室は社会安全省によって基地の見取り図から消されており、慧子以外知っている者はいない。

Ｍｉ２４Ｖ雀蜂のローターが巻き起こす風に吹き飛ばされそうになる。髪を押さえる。
「お早いお着きね」
黒服の特殊警備機動隊員が無言で敬礼する。慧子は、雀蜂が基地を蹂躙している様を眺めた。紅、朱、橙の炎はガラスが練られているように色を変えながら、燃え盛っている。
弾薬に引火、誘爆して爆発音が轟く。熱と衝撃波が慧子たちの立っているところまで押し寄せて、破片が地面に落ちる。とっさに身をかがめる隊員。慧子はそのまま、炎に魅入られて陶然と立ち尽くしていた。眼鏡のレンズに炎が映る。慧子は、見る者に寒気を催させるような邪な表情を浮かべていた。

「紫藤二尉、三沢基地、第三飛行連隊長を捕らえました」
「おお、いや、助かったぞ」
連隊長が例の脂っぽいニヤニヤとした笑みを浮かべたまま、特殊警備機動隊員に連行されてきた。
少し殴られたくらいで特に怪我も無い。赤衛隊の情報偵察局は随分と甘いようだと慧子は思った。社会安全省はこんなものではすまさない。どんなに軽くても爪の二、三枚は剥がす。連隊長は、おそらく何もかも話してしまったのだろう。そもそもこの男には、それほど重要な情報を与えていない。
「早速、俺の三沢を返して貰わないとな。すぐに協力するよう呼びかけよう」
「あまり、手間をかけさせないでくださいね」
慧子は特殊警備機動隊員に目で合図した。連行してきた二人が意を察し、連隊長を地面に引きずり倒す。
「おっ、おい……何をする」
特殊警備機動隊員は国産のＡＫ７４、七四式突撃銃を構える。軽い単射音。銃弾を撃ちこまれた連隊長は痙攣し、そのまま動きを止めて死体になった。

「不愉快」
慧子は連隊長の死体を一瞥して呟いた。死んだ後の顔も見たくなかった。
未だに自分の権力を保証されると思っていたのかしら。赤衛隊の情報偵察局が紛れこんでいたのは誤算だったけど。

「同志紫藤二尉、妙な連中を捕えました。赤衛隊情報偵察局と名乗っていますが……」
緊張した面持ちの若い警備機動隊員数名が、手錠を嵌めて連行してきた鳥井をはじめとする三人の男を慧子の前に立たせる。
「労農作業大隊長、あなただったのね。もう降参かしら？」
慧子は鳥井の姿を見て、笑みを浮かべた。
「まあ、そういうことになるでしょうな」
芝居がかった仕草で肩を竦める鳥井。
「降伏します」
「結構です。潔くてよろしい。それで？」
「同志須田にお目通り願いたい」
「ええ、構いませんわ。こちらこそ是非。そこに転がっている人に代わって同志鳥井を択捉にお連れしましょう」
朗らかな調子で慧子は頷いた。

匍匐前進を続けた。詰所の周囲に基地警備隊員の死体が転がっているのが護の目に入った。
敵は、もうこの周辺まで浸透してきたようだった。きっとよい訓練を受けた特殊警備機動隊員なのだろう。
護は目をせわしなく走らせ、ひったくるように死体から正式軍用拳銃のマカロフをもぎ取る。手にズシリと重い。こんなものを使う日がくるとは思ってもいなかった。射撃の練習など、匍匐前進同様、新入隊員時の訓練でしかしたことがない。
いざとなっても撃てる自信など全く無い。パイロットは邀撃機が無ければ何の役にも立たない。それでも拳銃を握り締めているしかなかった。

頭の中を叩きまわっているようなローター音が近づいてきて、風が周囲の塵を巻き上げる。風塵に咽る。護は慌てて動きを止めた。地上制圧を終えた雀蜂は、低空で何かを探すように機首を傾けている。もう反撃を恐れていないのか、サーチライトを点けていた。
Ｍｉ２４Ｖ雀蜂は、頭を抱えて転がる護の上を通過していく。
サーチライトが闇を切り取り、地上を白く浮かび上がらせる。偽装した機体が隠してある場所に近い。ロケット弾が撃ちこまれた。爆発の閃光が一瞬周囲を浮かび上がらせる。一角が松明のように赤々と燃え上がっていた。何かが焼ける臭い、悲鳴らしきものが聞こえる。
別の方角で爆発がおこる。半壊した格納庫が紙細工のように吹き飛ばされ、炎が内側から膨れ上がるように格納庫の外壁を飲み込んで火柱となった。近い。熱を感じられる程だった。光の針のような弾道。ガトリング砲が地上を掃射する。雀蜂は、その上を悠々と勝

ち誇るように飛ぶ。あそこには修理中のＳｕ２７ＳＪ翔鶴とミサイルが隠されていたはずだった。
火の粉が目の前をかすめた。
「畜生！」
起きあがった護は、思いきり拳を地面のコンクリートに撃ちつけた。

「あら、久しぶり」
軽やかな声に護は振り向く。慧子が炎を背に立っていた。周囲には特殊警備機動隊の黒服を着た男たちが展開している。見たくない、信じたくない光景だった。鳥井が言っていたように、やはり、慧子が手引きしていたのか。
「かくれんぼはね、私の勝ち。連隊長は片付けちゃった」
いつも通りの口調の慧子。今朝までの慧子だった。
「何で連隊長まで……」
「邪魔だから」
連隊長に従っていたわけではなかった。社会安全省の命令で仕方なくやったわけでもない。慧子のひどく楽しそうな表情がそれを証明していた。
「裏切ったのか」
護は声を絞り出す。
「裏切ったって言われても、私、困っちゃうな」
本当に困ったような顔をしていた。いつも見せる表情と変わらなかった。
「これが、任務なんだし」
「任務って……」
「三沢基地をこっちに付かせようっている任務は、うまく行きかけていたんだけれど、情報偵察局が紛れていて御破算になっちゃった。で、仕方ないから、ちょっと頼んでこうしてもらっただけ」
「そんな……」

慧子が、ちょっと頼んでこうしてもらった程度のことで、翔鶴は破壊され、多くの仲間が、パイロットや整備員が目の前で死んでいる。今も死に続けている。
残った機体やミサイル、レーダーを隠蔽した場所を探していたのか？　いや、そんなこと俺がいようがいまいが関係ないはずだ。だったらなぜ？
「俺を、利用したのか？」
「嫌だぁ、利用した？　そんなことしてないわ。利用する価値なんか、あなたには無いんだから」
慧子は無邪気に笑った。
「何で俺と……」
「口直しっていうか摘み食いかな。たまには若い子もいいかなって思ったの。私、とってもだらしないから」
「じゃあ、何で一緒に……」
「護のこと、好きだから。気に入ってたの」
「だったら」
「だから、好きなだけよ」
軽く言い放つ。
「好きなだけって」
何を言っているのか皆目見当もつかない。護には理解できなかった。
「よかったじゃない。お互い好きで。楽しい時間を過ごせたでしょ」
お気に入りの西側の靴や服、化粧品の話をしているかのようだった。
「御馳走様。じゃあね」
そのまま、特殊警備機動隊員を引連れて護の横を通りすぎていく。
「待ってくれ！」
護は立ちあがった。反射的に拳銃を慧子の背に向ける。いかないでくれ、と心の中で叫ぶ。
「その拳銃で私を撃つの？」

振り返った慧子が不思議そうな表情をしていた。童女が小首をかしげるような仕草。
特殊警備機動隊員は、すぐに反応して突撃銃を構える。護をバラバラに引き千切ってしまうだけの銃口が睨んでいる。
慧子が制止した。
「撃てないでしょ。あなたになんか何もできやしないわ」
ため息をついて、くるりと背を向ける。
「バイバイ、ピロートさん」
護は、着陸した雀蜂に向かって歩いていく慧子を見送ることしかできなかった。

青蒼気圏　web. ver　〈32〉

夜空を背景にＦ１４トムキャットの一個飛行小隊、四機がコンパスで円を描くように旋回している。三交代制で空中哨戒任務に出ていた。

怜人の指揮下にある一個飛行中隊は、アメリカ軍の空襲で機能を失った札幌市から小樽に移転した人民防衛省を爆撃した後、千島列島の防空に振り向けられていた。

赤衛隊も反撃をはじめていた。社会安全省、警備機動隊との地上戦闘も都市や駐屯地周辺で既に始まっている。

それでも須田が切り札を使っていないのは、猶予期間を与えて旧体制の切り崩しを図っていたためだった。国を潰すといっても、そっくり西側に進呈するつもりは毛頭無く、西側が東側を統治する際、須田の組織を頼りにせざるを得なくするのが狙いだった。行政機関は、これから進駐する西側に簡単に組み込まれてはまずいので、掌握する必要があったし、有能な官僚や売りに出す社会資本を確保する必要があった。また、一枚岩とは言えない赤衛隊の中にも須田に寝返る部隊も出てきており、いくらかは手元に集めておきたかった。既に交渉も始まっている。

全て掌握した後、切り札を使用すれば、それがそのまま西側介入の呼び水になる。そして須田の配下に入らなかった組織は、西側の下、旧体制派として処断するつもりだった。

叩くなら切り札でも何でも使って、さっさと叩けばいい。

怜人には、拙速を旨とする作戦の常道から外れ、巧遅を目指している須田の計画がまどろっこしく思えたが、口を挟むのは自分の仕事ではないということも自覚していた。

キャノピーを通して半球状の星空を見上げる。光でコーティングしてばら撒かれた砂粒のような星々が、いつもより輝きに満ちているようにさえ思える。

たった一二機、一個飛行中隊の空軍だが、択捉を中心とした千島の航空優勢を獲得している。択捉を巨大な空母と考えるのなら、F14は時と場所を変え、かつてアメリカ海軍が想定していた通りの役割を果たしていた。

怜人たちは、星の光が瞬く青々とした夜空の支配者だった。

夜空の星座ですら、その並びは永遠に同じではない。間もなく、強い翼がどこまでも、星に手が届くほどの高みさえ羽ばたける空に変わるだろう。

護は壁を背にして、ただうずくまった。
慧子は自分を、三沢基地を裏切ったのか。
いや、裏切ったのではない。もとから、そのつもりで親切で物分りがよく、世慣れない政治指導員を装っていた。ただの暇潰し、息抜きとお遊びで自分の恋人のように振舞っていた。最初から最後まで存在自体が偽りだった。
「何をしているんですか」
赤衛隊情報偵察局の二葉が冷たい目で護を見下ろしていた。
「早くきてください」
「俺をどうするんだ」
「命令を受け取ってください。いつまでグズグズしているんですか。ピロートでしょう。同志風野と同じ」
「関係ないだろう」
「あります。私は同志風野のことを尊敬していました。任務とは関係無く。同志風野が見たら失望します。やられっ放しで情けないと思わないんですか！」
苛立たしげに二葉は叫んだ。
沿海州の基地で自分を殴りつけた鋼と重なる。
「正直、あなたには期待していませんよ。でも、今、人手が足りないんです」
護は、のろのろと立ちあがった。何の意志もない操り人形のように。
護は、二葉に導かれ、ロケット弾によって破壊された宿舎の影にひっそりと立っている給水施設を模した建物に入った。ここから地下施設へと入れるらしい。

二葉が先頭にたって護が続く。マンホールの蓋を開けて、取っ手を伝って下に降りる。細く長い通路を進む。湿った重い空気と黴の臭いがまとわりつく。通路は敵の侵入に備え、曲がりくねって作られていた。
「ガスでも流し込まれたら終わりです。走ってください」
しばらく走ると少し広い通路に出た。二葉は素早い無駄の無い身のこなしで、通路の奥へと消えていく。地下施設を熟知しているようだった。護は必死に後に続いた。何かを考える時間もなかった。

階段を上ると、突然、懐中電灯で顔を照らされた。外気が流れ込んでくる。建物の脇に出た。
「誰だ」
「赤衛隊情報偵察局、二葉一曹です。逮捕したピロートを移送中」
「よし、行け」
護は周囲を見渡した。薄青い闇が周囲を覆っていた。西に傾いた半月が、ぼんやりとした光を放っている。
「地下に格納庫があります」

護と二葉は地下格納庫に入った。地下格納庫は、生き残った基地警備隊や武装した警務隊によって確保されていた。
周囲は喧騒に満ちていたが、白熱灯に照らされたＳｕ２７ＳＪ翔鶴が水底で眠る魚のように静かに佇んでいる。
いつのまに持ちこんだのだろうか。
「いつ、こんなところに」
「正式な保有には数えられない、部品取り用の予備機だそうです。よく知りませんが」
ものを放り投げるような口調だった。
整備員たちが、無言で整備にとりかかっている。
「同志飛行中隊長、同志北上三尉をお連れしました」
「勝彦……さん？」

勝彦は頭に包帯を巻いていた。そればかりではなく、ヘルメットに防弾チョッキまで着こんでいる。　地上戦闘に参加したことは一目瞭然だった。
「全滅だよ。第三飛行中隊は。みんな殺られた。副連隊長も行方不明だ」
生き残ったＭｉＧ２５ＰＤＪ雷電のパイロットたちが、無言で護を睨んでいた。
「せっかく、持ってきたラダールも破壊された。同志北上三尉、怜人さんも売ったのか。あの女や連隊長の下働きをして」
普段の温厚な勝彦とは全く違っていた。本気で護を裏切り者だと思っているようだった。どこかでまだ、仲間が赤衛隊情報偵察局に脅されて証言したのだ、という期待もあったが、きれいに打ち砕かれてしまった。
「違います。そんなことは……」
怒りの激しさに護はようやく思い当たった。赤衛隊情報偵察局は、怜人を社会安全省に密告した、という疑いをかけた上で証言をとったのだろう。慧子と一緒にいる、一緒にいたいと願うことが、仲間たちにとっては、極めつけの裏切り行為に見えてしまっていた。ここ数ヶ月、特に慧子と過ごした数週間は慧子が護のほとんどを占め、もはや、仲間から白い目で見られていることさえ気づかなかった。
「この期に及んでまだ、言い逃れか」
護は否定しようとして、すぐに、そんなことは無駄だと気がついた。裏切り者かどうかは他人だけが決められることだった。たとえ事実がどうあったとしても、護には関係がない。
「同志飛行中隊長。赤衛隊情報偵察局の調査では、同志北上三尉が敵と通謀していたとは考えておりません。敵に利用された形跡はありましたが……」
「お前らはあてにならん。この様だろう」
勝彦の怒声に二葉は押し黙った。
「もういい、貴様の顔など見たくも無い」

苦しそうに咳をする。
「だが、翔鶴を飛ばせるのは、お前しかいない。私はもう駄目だ。ピロートが地上で死ぬなんて情けない話だよ」
目に涙が滲んでいる。
「翔鶴のピロートは、お前だけだ。他の飛行中隊の奴じゃ無理だ。翔鶴を扱ったことがない。赤衛隊情報偵察局の命令を遂行できるのはお前だけなんだ。まったく、馬鹿馬鹿しい話だな。翔鶴を与えたら逃げ出すような奴しか残っていないなんて」
慧子は去った。第三飛行中隊も全滅し、三沢では裏切り者だった。

二葉は、メモを取り出した。
「命令を説明いたします。三沢基地を中心に敵根拠地の択捉島を攻撃する予定でしたが、不可能になりました。各基地、生き残った部隊ごとに攻撃することになります。敵の大規模な妨害を受けていますが、現在、緊急に全赤衛隊の兵力を呼び寄せています。海防と防空が主ですね。最大の目標は弾道弾です。いつ、どこに発射されるかは、今のところわかりません。同志北上三尉には、弾道弾を破壊する地上赤衛隊支援航空隊を護衛してもらいます。他にも千歳の部隊が加わる予定です。管制施設が壊滅したので、Ａ５０Ｍ大鵬が目標地点まで誘導します」
「Ａ５０Ｍ大鵬？」
「ええ、空中警戒管制機、だそうです」
「敵の兵力は不明です。投入したほとんどの航空部隊は撃墜された模様。恐らく有力な邀撃機と地対空陣地で防御されていると思われます」
邀撃機と対空ミサイルで形成された網に飛び込んでいく。ただ、殺されるためだけに飛ぶようなものだった。
「どうします？」
最後までメモを読んだ二葉が、少しだけ表情を変える。
「危険な任務なので志願制です。確認をしたいんですが……」

この状況で志願しない、などと言えるわけがなかった。まさに茶番劇だった。
自然に視線が整備中のＳｕ２７ＳＪ翔鶴に吸い寄せられる。
真新しいその機体は、薄暗い地下格納庫の中で飛ぶことだけを待ち望んでいるように見える。
もう一度、飛びたかった。たとえ命を落とすことになっても。
「志願する」

駐機場では整備員たちが最終チェック中だった。地下滑走路の幅は狭いので、滑走路で編隊を組んだまま飛び立つわけにはいかず、一機ずつ発進しなければならなかった。どのみち使える機体も一機しかない。
周囲の人間の冷たい視線を浴びながら、パイロットスーツを着込む。第八飛行中隊所属、同期の恭輔もいたが護から目を反らした。
ふと、帰投の説明をまったく受けていないことを思い出す。帰りの燃料もないかもしれない。そもそも帰投自体、期待されていない。
「こいつには、推力偏向付きドヴィーガチリが積まれている。新型のＳｕ３７のドヴィーガチリを譲ってもらったんだ」
護は推力偏向ノズル付きエンジンのことは知っていたが、扱うのは初めてだった。マニュアルをこれ以上無いほど集中して読み通す。
「あれを使えるようにしておいた。二発ある。誰も実戦でやったことがないから、どうなるかわからんが。万が一の時に使え」
ロシア人整備中隊長のデミドフが護に告げた。武装はＲ２７Ｒセミ・アクティブ・レーダー誘導ミサイル四発、同Ｒ２７Ｔ中距離赤外線誘導ミサイル四発、Ｒ７３Ｍ１短距離赤外線誘導ミサイル四発。フル装備だった。
「搭乗準備！」
デミドフが号令をかける。

タラップを上り、コックピットに収まる。いつも通りの手順を踏んで手早く翔鶴の一部になる。補助駆動用装置が正常に作動。左右のＡＬ３７ＦＵメインエンジンをデミドフとチェック。エンジンに炎が宿り、甲高い叫び声をあげはじめた。補助動力用装置を切る。確認のため、推力偏向ノズルを可動させる。まるで生き物のようにノズルが動く。エンジンの鼓動が高まる。機体各部の点検を行う。全て異常なし。キャノピーを閉じる。

手で準備完了を合図。デミドフが合図を返す。

発進。背中がシートに押し付けられる。時速三〇〇キロの速度で滑走。地下滑走路の壁面に設置された誘導灯の光が、点々と後方に去っていく。

滑走路へ黄金の光が差し込んできた。まるで、一本の長い針のように。眩しかった。

護の翔鶴は、朝日を浴びながら地上滑走路に飛び出して走り続ける。吹きつける夜明けの風に逆らい、翔鶴が空に舞い上がった。目の前には凶悪なほど赤い朝焼けが広がっている。世界が燃え落ちていくようだった。暁の中、ジェットエンジン音を響かせて鶴が羽ばたいた。

洋上に出た護のＳｕ２７ＳＪ翔鶴は燃料を節約するため、ゆっくりと高度を上げた。高度一二〇〇〇。茜色に染まった高積雲が織り成している雲海を見下ろして飛ぶ。Ａ５０Ｍ大鵬の管制内に入ることの可能な空域を目指す。レーダー・サイトの誘導はない。航法装置のみが頼りだった。

水色の薄明穹から、透きとおった紅と橙の混じった曙光がキャノピーに差し込んでくる。
思わずサングラスのバイザーをあげてしまう。
頭上には、不純物を一切排除した青。宇宙にまで繋がる半透明の空。
青は、大気が化学変化を起しているかのように刻一刻と明度を増していく。星々が擦れて消えていき、夜の残滓が一掃される。
地球が動く。時間と空間の狭間で青だけが変わりながら、ただ静かに満ちようとしている。
護は、青に魅入られた。
ただ眼が青と認識しているだけでなく、気体や流体、固体として青色であるかのようだった。
全てを忘れる。
慧子のことも、鋼や鋭をはじめとした散った仲間たちも、裏切り者になってしまった自分のことさえも。
護自身が消滅し、周囲から凄まじい勢いで青が押し寄せて残った空洞を埋めていく。

「こちらホウオウ……官……の……貴官の所属……を名乗れ」
切れ切れの無線が届き、ようやく我に返る。
高度一〇〇〇〇メートル、自機から一五〇キロ離れた空域を空中警戒管制機Ａ５０Ｍ大鵬が周回飛行中だった。レーダー・サイトや管制施設のほとんどを失った防空赤衛隊にとって、大鵬は最後の希望と言ってよかった。今や唯一の統合された防空指揮所である大鵬には、交代で護衛のＭｉＧ２３ＭＬＪ紫電が二機ついている。
「こちらは三沢基地、第三飛行連隊第三飛行中隊、北上護三尉……指示を乞う」
「了解、そちらを確認した。回線を開いてくれ」
大鵬とデータリンクする。巡航モードのＨＤＤ（ヘッドタウンディスプレイ）にデータが転送されて、飛行経路が示された。大鵬のレーダーが導いてくれるなら、

捜索レーダーは自機の居場所を明らかにするだけに過ぎない。護はレーダーを待機モードへと変更する。
「後続はないのか？」
「いない。三沢で残っているのは俺の一機だけだ」
共にアメリカ空軍に立ち向かった他の第六や第二一の翔鶴はどうなったのだろうか。

「了解。これより貴機をマナヅル一番機と呼称する。マナヅル一番機、君から見て一時方向に千歳からあがった飛燕の編隊がいる。確認せよ」
大鵬から転送されるデータにより、一目瞭然だった。味方機の位置方角、距離、機数、針路、高度、速度にあわせて旋回。ＨＤＤの縮尺を拡大。会合予想点に巡航速度で向かう。輝点が見える。おそらく味方機だ。
護は最良のセンサーである自分の目を使って、注意深く見回す。
空には影一つ無い。
目を凝らす。
いや、いた。
三つの点が見えたと思った途端、通信が入った。
「こちらはオジロワシ一番機、第二飛行連隊、千歳第三〇二飛行中隊。連絡があったのは貴機か？」
「こちらはマナヅル一番機。三沢基地、第三飛行連隊第三飛行中隊」

千歳基地のＭｉＧ２９ＳＪ飛燕だった。ＭｉＧ２９は、Ｓｕ２７と同時期に開発された、機動性に優れた前線航空軍用戦闘機だった。
「第三〇二飛行中隊で飛んでいるのは四機だけだが、そっちは一機らしいな。編隊を組むぞ」
翔鶴も飛燕も大鵬とデータリンクしているが、翔鶴と飛燕はデータリンクされていない。無線でやりとりしなければならなかった。
「了解」

「よし、ついてこい」
やや増速して横に並ぶ。一瞬、追い越してしまいそうになる。
いかに似た邀撃機であるとはいえ、機体特有の微妙な癖もあって編隊を組むだけでも一苦労だった。無論、護にも異機種で編隊を組んだ経験はない。さらに五機編隊での戦闘など訓練すらしておらず、五機編隊というより、四機＋一機編隊だった。
「なかなか上手いぞ、マナヅル一番機。千歳も奴らに襲撃された。仲間の敵討ちをしてやる。やつらをふっ飛ばそうぜ」
飛燕の飛行小隊長が、緊張をほぐす為に軽口を叩いているのがわかった。
「了解」

何も考えず、任務を遂行する。護は無意識のうちに、任務にしがみつこうとしていた。
「ホウオウよりオジロワシ一番機、地上赤衛隊の一個飛行中隊が接近中だ。そちらから見て、八時、距離一二〇、方位一六度へ、高度一一〇〇〇を速度八〇〇で飛行中、符丁はノスリ、機種は疾風」
七七式疾風地上支援機は、Ｓｕ１７Ｍ戦闘攻撃機をベースに、地上及び海防赤衛隊の要請で開発された国産の戦闘攻撃機だった。
地上、海防赤衛隊は、択捉へ数度に渡って攻撃隊を繰り出していたが、ことごとく撃退され、最早、旧式機を装備した部隊しか残っていなかった。翔鶴や飛燕と異なり、大鵬とデータリンクもされていない。無線で連携するしかない。
「ノスリ一番機よりオジロワシ一番機、よろしく頼む」
「了解、同志諸君の護衛は任せてくれ」

青蒼気圏　web. ver　〈35〉

慧子は静かな湾を望んだ。冬でも凍結せず、流氷も少ない単冠湾は港とするにはもってこいだった。そのため、大規模な港湾化が図られたが予算不足で断念されていた。この単冠湾から遥々ハワイの真珠湾を奇襲する大日本帝国海軍の機動部隊が発進した。ここから東西日本の歴史がはじまったと言っても過言ではなかった。そして、まさにここで終わろうとしている。湾に抱かれた海が鏡のように靄を通した光を跳ね返している。薄い靄がゆっくりと消えていく。

単冠湾の最奥部は海跡湖の年萌湖があり、ちょうど湾の南北両端に防空を担う天寧基地と一回り小さい年萌基地が存在した。

干潟から、島のように突き出している潅木に覆われた小高い丘の上に須田が立っていた。海を眺めている。

「戻ったのか」

「はい。失敗しちゃいました」

神妙な面持ちで告げる慧子。

「別に構わない。赤衛隊に期待していたわけではない。三沢を無力化できただけで充分だ。御苦労だった」

「ありがとうございます」

嬉しかった。

「赤衛隊情報偵察局の人が来てますが、どうしましょう」

実際にすぐ側にまできていた。

「どう見る？」

「見切りをつけたのでしょう。手土産持参だそうです」

手土産は確かに持ってきていた。

「待たせておけばよい」

慧子には頓着せず、ゆっくりと斜面を降りていく。慧子は須田と

二人で散歩するような、浮わついた気持ちになった。黄色いエゾスカシユリが一面に咲き誇っている。
「君に仕事はない。休むといい」
「せっかくだから見にきました」
慧子は微笑を浮かべる。少し仮眠をとった後、温泉に入ったから休養は充分だった。火山島である択捉には温泉がわいていた。
「朝御飯の用意でもしましょうか？」
紗那で作っているパンは、なかなかに美味しい。
「いや、けっこう。見たまえ」

丘を降りた窪地には、何両もの大型車両が停車している。雑木林の中にもその姿が確認できた。巨大な棺桶のようだった。偽装網が手際よく剥ぎ取られる。中から現れたのは中距離弾道ミサイル搭載の移動式発射台〈明星〉だった。

「残っていたんですね。西側の報道ではアメリカ軍が、全て撃破したと伝えていましたが」
「ＣＮＮだからといって真実を流すわけではない。湾岸戦争でも移動式戦術弾道弾をあらかた撃破したと発表したが、ほとんどが生き残っていた。西海岸にも届く九四式〈蠍〉やアラスカやグアムに届く九六式〈水瓶〉は大部分が破壊されたが、この〈明星〉をはじめとした野戦戦術弾道弾は、かなり生き残っている。何より、これをここに持ちこんだのは一年前だ。誰も、まさか収容所にあるとは思ってもいないだろう」
慧子と須田は、指揮車両に向けて歩き出す。
「弾頭には何が入っていると思う？」
「核ではないですよね。もう隠してしまったのでしょう？　最初から使う気もないとおっしゃっていましたし」
「核は使ってしまっては意味の無い兵器だ。廃棄を前提とした交渉の道具にするなり、抑止力として使うなり、使わないことで価値を

生み出す」
「化学兵器、いえ、生物兵器かしら」
あてずっぽうに答える。
「正解だ。ウィルスは生物か無生物かという議論になるとまた違うが」
生徒が期待通りの解答をした教師の顔で、須田は頷いた。
「ひょっとして天然痘ですか。ソ連と我が国が共同研究していたという」
天然痘は一九八〇年に撲滅宣言が出されており、先進国におけるワクチンの備蓄が少ないため、生物兵器として最も有望とされていた。生物兵器は切り札として人民党の政治戦略機材運用隊で研究されていた。
「いや、そんな危険なものではない。熱や肺炎を引き起こすただのウィルスだ。流感といって差し支えない。比較的熱に強いことと爆発的な感染力を誇ることを除けば。健康的な成人ならば、一週間で治癒してしまう。壮年層が多く罹患したスペイン風邪とは異なって、劣悪な環境下における体調の優れない者や、老人や子供にとっては致命的になる」
須田が開発させたのは、いわゆるインフルエンザの類だった。
「そんなものを西側に？」
「馬鹿な」
須田は、初めて笑い声を立てた。
「西側に散布してどうする。目標は、我が国の人口密集地域、農村から流入した人口で膨れ上がったスラムのある都市部周辺だ。そこを中心に散布する。あとは感染が次第に広がるのを待つ。労働力にならない人間は自然に削除される。その後、西側の軍が防疫目的で進駐を開始する手筈になっている」
「アメリカの空襲前に米を買い占めたのも、その準備だったんですか。栄養不良にするために。あと、ここの皆にワクチンを投与したのも」

「その通りだ」
須田は咳払いをした。
「人口＝労働力というくだらないことを信じるから、増やした人間の処理に困るようになる。共産主義国家で人口が増えるということは、その分、費用がかかるということだ。社会整備や社会保障費がどれだけかかるか。砂地に水を注ぎ込むようなものだ」
「では、西側と統一するための作戦だったのですか。そのために、余剰人口を無くす、と」
「その通り。例えば東西統一を実現したドイツだが、毎年いくら東側に注ぎこんでいるか知っているかね。一〇六四億ドルだぞ。実際、もっと多い。国民が、統一で損をしたと感じないよう控えめな数字を発表している」
「西側も統一には賛成なんですね」
旅行にいける。とっても素敵だ、と慧子は思った。東京は小さい頃から憧れの的だったし、カンボジアやタイのような寺院のある古い京都も面白そうだ。アメリカ領の琉球でバカンスもいい。無論、須田と一緒だ。
「統一はするが、通貨を統合した一国二制度を採用する。千島列島を中心に北海道、東北は完全な自由経済地区となる。いかなる規制もない、完全な自由を約束した場所だ。単にロシアや中国との貿易の拠点というだけではない。択捉の地下には莫大な資源が眠っている。そこに西側の企業が入る。ようやく目の覚めた大陸の軍閥や中共も。アメリカやヨーロッパの企業さえも参入するだろう。東側の産業は彼らが再生し、我々は安価で質の高い労働力を提供できる。同じ日本語を話し、高い技能を持ち、低賃金で長時間働く。西側が一つだけ、我が国から受け継ぐべき美点がある。法だの人権だのといった西欧諸国が有難がるくだらない妄想とは、無縁だということだ。自ら生き残る強さの無いものは淘汰されるべきなのだから」
須田が呟く。
「でも、なぜ弾道弾で？　そのまま都市に散布すればいいのでは？

感染者を送り込んだり、それから航空機を使うとか。せっかく、映画に出てくる戦闘機を買ったと言っておられたのだし」
「都市に直接散布を考えていたが、人民党の政治戦略機材運用隊が赤衛隊に急襲された。航空機を使いたいが、今は防空に手一杯だ。感染者を送り込んでもいいが、少数の感染者なら、効果が出るには時間がかかってしまう。何より、弾道弾を使ったという事実が重要だ。西側の早期介入の理由になる。東側は混乱して何を仕出かすかわからない、という印象を与えるからな」
色々と理屈をつけているが、単に弾道弾を使いたいだけではないか、と慧子は思い、少し微笑ましくなる。こういうところは可愛らしい。必要なのは天からの鉄槌がこの国の愚かな人民に下されることだった。
「終わったらどうするんですか？」
期待を込めて震える声でたずねる慧子。そう、「おしごと」が終われば、いつだってお楽しみがある。
「これから新しい時代になる。今よりもっと忙しくなる。君も次は西側に行って貰おうと思っている。西側の政治家相手の仕事になるだろう。少し観光してくるのもいいだろう」
僅かに高揚した声だった。

「そうですか」
慧子は、つまらなさそうに呟く。
一人で観光旅行に行け、だなんて。ひょっとしたら、という期待が慧子にはあった。期待は期待で終わった。何かが音を立てて崩れていく。
先生は、こんなことにばかり夢中だ。どうして私のことだけを見てくれないのだろう。
先生にもお仕事があるから我侭は言わない。でも、せめて一緒に西側に行こうとか、これからは側で補佐してくれとか、どうして言ってくれないのだろう。私が薄汚い馬鹿な子だからだろうか。

今、私が一声あげれば、先生の計画は完成するのに。土壇場で先生を格好よく助けても、先生の気は変わらない。それは、私がよく知っている。もう駄目だ。先生には、ずっと私と一緒にいてもらうより他ない。

怜人の率いるＦ１４トムキャットの六機編隊は、つい数分前に空中哨戒に飛び立ったばかりだった。眩しい朝日がＦ１４を紅く照らし出す。炎を纏った不死鳥のようだった。

怜人のＦ１４飛行中隊は、攻撃や浸透を図る赤衛隊の航空機やヘリコプターのほとんどを撃退していた。アメリカ軍や警備機動隊の攻撃を受けたにもかかわらず、押し寄せる赤衛隊は数だけは多く、旧式まで攻撃に加わっていることに、怜人は驚いていた。地上も不利とまでは言えないが、須田の予想よりもはるかに早く赤衛隊の反撃が始まっているらしい。疲弊した赤衛隊の、どこにこんな力が残されていたのかと思えるほどだった。それでも、元来の組織的な欠陥と混乱のため、択捉への赤衛隊航空部隊の投入は五月雨式のものにすぎず、脅威ではなかった。

たった一個飛行小隊と半の現有戦力だが、後二時間足らず。しかも対空ミサイルの支援も存在する。対空ミサイルが飛ぶ回廊は怜人たちを誤射しないよう、わざと開けてあり、怜人たちを迂回した部隊は吸い込まれるように一網打尽にされた。敵による損害は零、撃墜数は十数機と一方的に勝利をおさめ続けたＦ１４飛行中隊だが、ほぼ丸二日間の連続稼働がたたって故障が続発、Ｆ１４の稼働数は半数の六機にまで落ち込んでいた。

怜人は、皮肉めいた愉快さを感じていた。

これこそ、まさしく防空赤衛隊が想定していた防空そのものではないか。アメリカ空軍に易々と打ち破られた防空赤衛隊だが、その反逆者の俺がアメリカ製戦闘機を駆って、赤衛隊の攻撃部隊を退けている。この国を滅ぼすために。

「プレアデスよりザウエル〇一へ。敵編隊を確認。敵は一〇時方向、距離一四〇（マイル＝二四〇・七六キロ）に五機、すぐ背後に一二機、重なるように飛行している。バラバラのところを見ると、防空赤衛隊と地上、海防の混成部隊だろう。方位三一五度に高度三〇〇〇〇（フィート＝九一四四メートル）を五〇〇（ノット＝時速九二六キロ）で飛行中」

現在の武装は残り少ない高価な超長距離射程を誇るＡＩＭ５４Ａフェニックスが二発、他はセミ・アクティブ・レーダー誘導のＡＩＭ７Ｆスパローが二発、赤外線誘導のＡＩＭ９Ｌサイドワインダーが二発。

おそらく、最後のまとまった敵だ。大盤振る舞いしてやるか。

怜人は笑みを浮かべ、地上邀撃管制官と話をつける。

「ザウエル〇一より各機へ。フェニックスを使う。各個に射撃せよ」

温存しすぎて使いどころがなくなるよりよい。

「了解」

応答が返ってくる。

「確認」

ナーセリーがフェニックスを使用可能にする。

「ホウキボシ〇一からザウエル〇一へ。敵編隊を認む」

先行している二機編隊から通信が入る。

「ザウエル〇一、確認した。ナーセリー、至近目標を追尾してロック、フェニックス」

「距離六〇マイル。ロック完了」

「発射」

「フォックス・スリー」

よく訓練された中世の弓兵のように、フェニックスの斉射が行われた。

発射された一二発のうち、四発は動作不良を起こし墜落する。残りは目標へと殺到した。

「注意！　ラキエータだ！　前方一時！」
大鵬からの通信に護は反応した。一秒遅れてレーダー警戒装置がけたたましい声をあげる。
白い航跡を引きずりながら迫るミサイル。
全機が一斉に回避運動をとる。護の翔鶴は、上昇、機体を捻るようにして回転しながらジグザグに機動するローリング・シザーズに入った。ナイフのように機首がきらめく。
垂直機動による回避が早かったために逃れることができた。
「ホウオウより、ノスリへ。散開しろ！　回避！」
主目標として喰らい付いたのは、地上攻撃隊の一個中隊一二機の七七式疾風だった。密集隊形を組んでいたのが仇になった。一発はチャフで回避したが、五機の疾風が撃墜された。

「須田先生。私は幸せになりたかったんです」
「幸せか。幸せとは充足感のことだろうな。自分が見つけた自分の成すべき事を成し遂げる。これに勝る喜びはない。人間はそうやって進歩してきた。君も幸せになれる。優れた者から奪われていた当然の権利を、愚か者から取り返すのだ」
「でも、私、今が幸せです」

孤児だった慧子は、生活の不自由をしたことがなかった。もとはひどい孤児院にいたらしいが、ほとんど記憶に残っていない。四、五歳で預けられたのは、少女しか住んでいない広大な屋敷のような孤児院だった。西側の綺麗な服や美味しい食べ物が惜しみなく支給され、優しくて若い女性の教官たちが身の回りの世話をして、教育をしてくれた。慧子をはじめとした孤児院に集められた少女に共通するのは、皆、飛びぬけて見目麗しいという点だった。森で仕切られた別棟には、決して口を利いてはいけない妖精のように美しい少年たちが暮らしていた。

慧子をはじめとした少年少女たちは、党幹部や官僚の決して口外できない趣味のために集められたのだった。党の幹部たちは特別に優れた人民の導き手で、彼らに奉仕することこそ、素晴らしい仕事であると話す女性の教官たちに奉仕の方法を教え込まれた。七、八歳頃から慧子がはじめた「おしごと」は初めのうちこそ痛くて辛かったが、次第に慣れていった。笑顔と上目遣いを忘れず、して欲しがっていることを察してしてあげること。大概の男たちは満足し、特別に菓子や人形や服をもらえた。少女たちを縛って乱暴に扱うのを好む者もいたし、逆に自分が少女に鞭打たれることを喜ぶ者もいた。衣装を着せて写真を撮るのが好きな者もいた。

慧子や仲間の少女たちは、自分たちのしていることを疑問にも思わなかった。「おしごと」は楽かきついかだけのどちらかだった。
「覚えていますか。私とはじめて会った時のこと。私は今でも覚えています」
「忘れた。でも、君が優秀な生徒だったということはよく覚えているよ」

須田だけは違った。慧子に触れようとさえしなかった。無言の須田が恐ろしく見え、気に入られなかったのかな、あとで怒られるのかな、と思ったことは今も鮮明に記憶に残っている。
慧子にノートを持ってこいと命じ、孤児院とはまったく違う授業をしてくれた。丸暗記やスローガンを連呼する勉強ではなく、考えて答えを出さなければならない勉強だった。授業は、世界史や経済、幾何学など多岐にわたった。知らない世界が次々と目の前に現れ、慧子は心を震わせた。慧子の他にも孤児院の優秀な子供には、まるで、党幹部の子供の家庭教師のように須田が教えた。孤児院で「須田先生の授業」を受けられるのは、ごく一握りの優秀な子供だけだった。慧子にとって須田の授業は、物をもらえることよりも、ずっと嬉しくて誇らしかった。服や化粧の話ばかりする周囲の少女たちが、馬鹿に見えてきてあまり話さなくなり、色々な本ばかり教官や慧子を贔屓にしていた党幹部から買ってもらった。

須田は、優秀な子供が学ぶのを見るのが好きだ、いい息抜きだ、と言っていた。
「先生の授業は、本当に楽しかったです」
「あの頃の私は、この国の体制がうまく行くという前提に立って仕事をしていた。小手先の経済改革をすれば、すぐにでも立ち直ると思い込んでいた」

孤児院を出る年になって、子供を生めない身体にされていること

を告げられた。その時の担当係官はゴミでも見るような目をしていた。慧子は、自分たちが予め全てを奪われて、壊されていたのだということを初めて思い知った。大抵の少女たちは、同じ孤児院の教官か、招待所の服務員という名の娼婦になるかの道を選ばされたが、慧子は須田の学生たちと一緒に工作員を志願した。須田に誉められたい、認められたい、役に立ちたい一心で、社会安全省の工作員養成学校を出て任務に励んだ。

「みな、嘘ばかりついていた。本当のことを教えてくれたのは先生だけです。この国では、みんなの幸せを追い求めると言いつつ、みんなを不幸にしました。当たり前です。誰かを不幸せにしなければ、自分の幸せはないから。幸せになりたければ、奪い取ればいいんです。それが出来ない人に幸せになる資格なんてない」

慧子は何度も須田に想いを訴えた。須田からは、はぐらかすような答えしかもらえなかった。自分から寝室に忍び込んだことさえあった。

須田には党幹部や官僚が必ず抱えている愛人はおろか、妻さえいなかった。

いつもいつも断られるのは、私が子供だからだろう。須田先生は、あの幼女猥褻趣味の変態どもとは違って、いい女、成熟した大人の女が好きなんだ。だから、もっともっと頑張って一生懸命任務をこなして、お役に立って素敵な大人の女になろう。でも、大人ってどうやってなるんだろう。もっと勉強して任務をたくさんこなせばわかるだろうか？

慧子は、任務を終える度に、須田から自分が引き離されているような気がした。成功八割、失敗二割だったが、須田の反応は任務の成否に関らず、常に同じだった。空回りが怖かった。どう足掻いても、須田の側にいられなくなるのではないか。

どうすればいいだろう？　いい方法がある。

須田の教えてくれた通り、自分で考え、自分で選択し、自分で実

行することにした。
「私、随分待ちました」
「そうか、それはすまなかった。新しい世界へようこそ。嘘吐きどものユートピアなど必要無いからな」
癇に障った。まだ勘違いしているのだ。須田の作ろうとするものに、慧子は何の興味もなかった。
「先生は、私に幸せになることを教えてくれました。私は国なんて、他の人なんてどうだっていい。私の幸せに先生が必要なんです」
手品の道具のように、慧子の手には改造マカロフが握られていた。須田の表情が変わった。信じられないものを見た表情だった。
「先生のこと好きですから。もうこうするしかないんです。これなら、私を断ったりできないでしょう？」
身体に押し付け、引き金を引いた。銃音はしない。改造マカロフは、銃身にサイレンサーを組み込んだ特殊部隊用の拳銃だった。
「先生、もう、何処へも私をやらないでください。先生だって余所に行かないでください」
須田の耳元で囁く。須田は何かを言おうとしたが声にならなかった。
「幸せは、すぐ側にありますから。これから、ずっと一緒です」
背中から噴出す暖かい血が、慧子の膝を汚していく。
「また、勉強教えてください。もうお前に教えることなんかない、なんて冷たいことを言わないでください。私はよく勉強するいい子ですから。そうでしょう？」
ざっ、と大勢がざわめくような音を立てて風が駆け抜ける。
〈明星〉を警備している隊員が、慧子にもたれている須田に気づき、近づいてきた。
「どうかなさいましたか？」
「ああ、ごめんなさい。須田先生、御気分がよろしくないようなの」

慧子は心配そうな顔を作った。
「ちょっと手伝ってくださらない？」
「はい」
「助かるわ」
自然な口調と動作で、慧子は隊員の胸に至近距離からマカロフを撃ちこんだ。何が起こったのかわからないまま、隊員は絶命した。
機械音と共に、ゆっくりと弾道弾が移動式発射台から起きあがっていく。目の前にモニュメントが立てられたようだった。歓声。指揮官が報告のために須田を探す。
不自然な姿勢の須田を抱えている慧子に目を留め、不審気な顔をした。地面には隊員が倒れている。
「おい、いったい……」
慧子は笑みを浮かべて地面に伏せる。
その時、周囲から一斉射撃がはじまった。

「ホウオウよりノスリ一番機へ、どうした！」
「ノスリ三番機、指揮を引き継いだ。やられた。五機落とされた」
敵は、かなりの遠距離から撃ち放し式のアクティブ・レーダー誘導ミサイルを撃ちこんできた。
Ａ５０Ｍ大鵬の捜索レーダーが敵編隊を捉える。
敵機は一時、距離一〇〇キロ、機数四、いや六、針路二三〇度に向けて、高度一二〇〇〇メートルを速度八〇〇キロで飛行中。
大鵬からＨＤＤ（ヘッドダウンディスプレイ）にデータが流れ込んでくる。
空中警戒管制機の支援を受けていることを除けば、あらゆる面で不利だった。
「オジロワシ一番機よりマナヅル一番機。ノスリからも目を離すなよ」
レーダーを待機から起動。索敵中追跡モード。ＨＤＤに映る目標を確認する。
「オジロワシ一番機より全機へ。これより攻撃する。ノスリは反撃を回避せよ」
目標はレーダーを避けながら接近中だった。ＨＵＤ（ヘッドアップディスプレイ）に表示される四角形のレーダーの範囲から逃れようとする敵の編隊。自動的に攻撃目標にロックを完了。
「ストレリャート！」
「了解、ストレリャート！」
護たちが先制した。オーソドックスな統制射撃。
セミ・アクティブ・レーダー誘導ミサイルのＲ２７Ｒ、赤外線誘導ミサイルＲ２７Ｔ、一機あたり二発ずつのミサイル八発が流星雨のように、散開する敵編隊に降り注ぐ。護はＲ２７Ｒを誘導した。

敵編隊は巧みに回避運動をとって、チャフ、フレアを捲く。Ｒ２７Ｒを誘導するレーダー照射が振り切られて、ロックが外される。いささか遠すぎた。全弾が回避されてしまった。
「オジロワシ一番機よりマナヅル一番機へ。一〇時方向、高度八〇〇〇に敵機だ。回りこんでくる。気をつけろ！」
レーダー警戒装置が反応する。計器の中央の赤いランプが点滅。敵機にロックオンされていた。

怜人のＦ１４トムキャット飛行隊は、急速に敵編隊との距離を縮めていく。ここ数回の攻撃は、妙に手際がよい。こちらを随分早く発見している。強力なレーダーを持つ、ＭｉＧ２５ＲＢＳ雷雲を何機も飛ばしているのか、あるいは、アメリカ軍にほとんど破壊されたレーダー・サイトの代替として、移動式レーダーでも使って管制しているのかと思っていたが、Ｆ１４のレーダー警戒装置は空中警戒管制機のレーダー照射を受けていることを示していた。
墜してやれば面白いことになる。だが、哨戒圏内を離れることになってしまう。あるいはそれが目的で別働隊がいるのかもしれない。今は攻撃隊を叩くことに集中すべきだ。
「ザウエル〇一より全機へ。スパローを使う。各機自由に射撃せよ」
各機が応答する。
ＡＷＧ９が目標を捕らえた。
「スパローを発射」
「確認、スパローを発射」
ナーセリーが復唱する。
「フォックス・ワン」
六発のスパローが放たれる。ナーセリーがＨＤＤ上でミサイルを敵編隊へと誘導する。
「命中、一機撃墜」
攻撃隊を示す光点が一つ消える。撃墜したのは怜人とナーセリーの一機のみだった。

先ほど敵が放ったＲ２７同様、いささか遠距離過ぎたのかもしれない。仕入れたスパローが不良品だったのだろうか。
たが、当初の目的は果たしていた。敵の編隊は完全に乱れている。翼端が航跡を引いている。間違いない。ＭｉＧ２９ＳＪ飛燕だ。
飛燕に乗っていた怜人には手に取るようにわかった。ＨＤＤに目を落とす。少し遅れてついてきているのが、機種まではわからないが地上か海防の対地攻撃隊だろう。予想通りだった。もう一機対地攻撃隊を先導するように離れて飛んでいる機がいた。
「ザウエル〇一より全機へ、二手に分かれるぞ。ザウエル各機は敵の先行する編隊を叩く。ホウキボシ各機は、後続の攻撃隊を狙え」
戦力を分散せず、二機編隊と四機編隊の総掛かりで、護衛を蹴散らしてから目標の攻撃隊に向かうのが常道だったが、怜人は部下のパイロットたちの能力を信頼していた。どの道、攻撃隊の撃破こそ本命だった。
飛燕の編隊との距離が近接する。
まるで空中戦闘訓練だった。
飛燕は機動性能に優れ、格闘戦と得意とすると言われている。飛燕装備の飛行連隊は、千歳をはじめとして、不要なほど徹底的にその腕を磨いていた。おそらく、叩きこまれた通りに機動戦に引きずりこもうとするだろう。
「近接戦闘になるぞ」
「了解」

七七式疾風を一機失ったが、攻撃編隊は隊形を崩さずに突進する。単独機の護はとにかく周囲を警戒する。味方の目にならなければならない。レーダー、赤外線捜索追尾装置、ともに敵機の接近を知らせる。
護の目視できる距離に近づく。敵もＭｉＧ２９ＳＪ飛燕かＳｕ２７ＳＪ翔鶴だろうと判断する。向かい合って猛スピードで接近しつつある敵機の機種を目視で判別することは、ほとんど不可能だっ

た。レーダー警戒装置は敵の強力なレーダーに捕まえられていることを示しているが、ロックオンはされていない。
「ホウオウよりオジロワシ、マナヅル。一二時、真正面だ！」
「マナヅル一番機、了解。ナホートカ！」
敵機が上空から迫るっていることを示す、大鵬からのデータがＨＤＤに表示される。
護は頭上に目を走らす。二つの黒点。
敵の方が高度を保持しており、有利な状態にあった。
急降下してくる気か？
護は、咄嗟にロールし、左に回避する。
敵機がミサイルを放つ。ランチャーから離れたミサイルが、白煙を背後に吐き出しながら向かってくる。もう航跡が目視できる距離だった。だが、狙ったのは、護の翔鶴と飛燕の編隊ではなかった。弾道を描くように飛ぶミサイルに、機動性の劣る攻撃隊の疾風が餌食となり、また一機が撃墜される。
「しまった！」
護は舌打ちする。気付いていてわざと無視したのだ。余程腕に自信があるのだろう。
敵機が垂直に上昇して離脱する。垂直方向の機動なら、翔鶴も引けをとらない。
護は機首を巡らせ敵機を追った。

怜人のＦ１４飛行中隊は、低空に押し込めようとして頭を押さえにかかる飛燕をひらりとかわし続ける。背後をとらせないように巧妙に機動する。他のＦ１４も怜人にならう。強力なレーダーと長距離攻撃能力を持つＦ１４だが、機動性能でも他の戦闘機に決して劣らない。
しかし、怜人は格闘戦に付き合ってやるつもりはなかった。本来なら距離が詰まらないうちに撃破したかったが、上手くロックオンを外し続けている。ＨＵＤの中の点がぶれる。

飛燕も相手の後方につくため、複雑な機動を繰り返していた。機首を引き起こして仰角をとって急上昇。再度、背後につこうとする。一見、飛燕が主導権を握っているように見える動きだった。
旋回性は向こうが上か。
Gに耐えながら怜人は目視とレーダーで確認した。五機のうちの一機がいつのまにか消えている。

見失った？　いや？
「プレアデスよりホウキボシへ。気をつけろ、そっちに一機いったぞ！」
「ホウキボシ〇一、了解」
やはり、一機だけが攻撃隊の援護に回っているらしい。妙な戦い方だった。
飛燕の編隊は怜人に乗せられ、既に運動エネルギーを使い尽くそうとしていた。Ｆ１４の大推力がものをいう状況に変わりつつある。
Ｆ１４編隊は突如、アフターバーナーを噴かす。垂直上昇して引き離し、狭くループする。翔鶴の時より強いもみくちゃにされるようなＧ。
「ザウエル〇二、左にブレイク」
「了解」
自らが主導権を確立して攻撃していると思いこんでいる無防備な別の二機編隊の飛燕を狙う。怜人は鉛のように重い指で、操縦桿を握って降下する。そのまま、逆落としをかけるように、今まで連携してＦ１４を駆り立てていた飛燕の背後に出る。
ＨＵＤの中の点のような飛燕。
飛燕は回避しようとする。追い抜かしてしまわないように、怜人のＦ１４も追随して飛ぶ。このままだと互いにエネルギーを使い潰してしまう。怜人は回転しながら鋏を描くようなシザーズから、バレル・ロールに移った。
左に回転しながら、自機が背面になった時に敢えて逆に右ラダー

を踏み込んで、機体を右回転させる。空が回る。右の翼だけが失速。一瞬だけ機体は不安定になる。揚力の残った左の翼を軸に右回転して捻りこむように飛燕の背後につく。

ＨＵＤにロックオン表示。

「スパロー」

「捕捉した！」

「発射」

「フォックス・ワン！」

ナーセリーによる短い誘導の後、スパローは飛燕の胴体に命中して爆散する。空の染みのような爆発。

「ザウエル〇二、三時方向」

「了解」

僚機のＦ１４が、今度はブーメランを描くように、飛燕の背後の空間を目指して突進する。

ザウエル〇三、〇四のＦ１４は、すでに上方に占位して旋回する飛燕を追跡する。追われる飛燕は、慌てているのか水平旋回を続けてしまっていた。

スパローが命中する。

飛燕は黒煙を引きずって、空から転げ落ちていく。

澄んだ青に染まった明け方の空に、双方の戦闘機やミサイルの航跡が刻まれていく。殺す者と殺される者が一秒ごとに立場を替え、輪舞を繰り広げながら一枚の抽象画を描く。

怜人の四機のＦ１４は、二機まで減った飛燕を確実に追い詰めていた。

二機の敵機は、ちょうど、カツオの群に飛び込んだカジキのように七七式疾風を追い回す。残りはあと五機。疾風は低高度に降りて、最高速度で目標に向かう。それでも、たちまち二機が叩き落される。

護はノスリ編隊の攻撃を続行している敵機を睨み、背後を目指す。そのまま、後方につける。

レーダーは索敵中追跡モードとなっており、二機を捕捉している。一機を攻撃中に別の機から反撃を受けることは防ぎたかった。護にとっては、チャンスのように思えた。一機は後背部を完全にさらしている。狙いやすい敵に気を取られ、後方警戒を疎かにしていることを願ったが、既にこちらに気付いて反転しようとしている。射撃のチャンスは今しかない。

間に合うか。

もう一機も同様に、旋回してこちらに機首を向けようとしている。

R27RとR27T対空ミサイルを選択する。距離六〇キロ。

発射。二筋の噴炎が伸びていく。

R27Rを誘導するが、目標は旋回して射撃レーダー波から離脱。続いてR27Tから赤外線を妨害するフレアを放出して逃れようとする。だが、近すぎて間に合わない。爆発。破片が降り注ぎ、目標は空中で転倒するように地表へ落ちていく。

護は、残った一機に、同じようにロックオンし、R27RとR27Tを発射する。R27Tは動作不良で、そのまま落ちる。R27Rは発射され、飛翔し目標を目指すが、目標は旋回と電子妨害システムを使用してロックを外す。

逸らされた。

その時、滅多に聞いたことのない警戒音が、耳を打った。N001レーダー火器管制システムが故障したという警告が短く強く繰り

返される。これでもう一発残ったR27Rが使えなくなった。
こんなときに！
敵機は慌てて高度を上げる。正対するために旋回していたのではなく、上方に逃れようとしているのがわかった。増速して追う。なぜか急降下をはじめる。まだ、充分な高度を稼いでいない。妙だった。突然、目標はコントロールを失い、そのまま息切れをおこしたように墜落していく。護にとっては思わぬ僥倖だった。

「マナヅル一番機よりホウオウへ。敵機は片付けた」
護は荒い息をついた。自分が自分ではないようだった。自分の中の自分の知らない存在が、猛り狂っているような気がした。その癖、高所から全てを見下ろし、自分の死さえも範囲外において戦闘を行っている。目が凍みるような幻痛に襲われた。
「マナヅル一番機、よくやってくれた。だが、オジロワシが全て撃墜された。敵はあと一機残っている。誘導する」
「ホウオウよりノスリへ。攻撃を続行せよ」
「ノスリ三番機、了解」
自機のレーダーは故障したままだったが、データリンク・システムによって大鵬が見つけた正確な敵の位置を教えてくれた。R27Rを投棄。使えない兵装を抱えていてもしかたなかった。

「ザウエル〇三より〇一へ。右エンジンが停止、離脱します」
「気をつけろ。無理をせんで脱出しろ」
飛燕の小隊を全機葬った。とてつもないしぶとさだった。空中戦闘は不利になったら離脱するのが、常識だったが、取り憑かれたように交戦してきた。おそらく、攻撃隊の盾になろうとしたのだろう。撃ち漏らした敵機は四機だが、ロシア製最新モデルの対空ミサイル防空網に阻まれて全機撃墜された。地上赤衛隊航空隊も、なかなかいい腕をしているだけに惜しい。

Ｆ１４も一機が撃墜され、二機がエンジントラブルで基地へと引き返した。一機はかなりまずい状態なので、国後の予備の滑走路に降りざるを得ないだろう。よい整備員やパイロットに恵まれた高性能機とはいえ、二〇年以上も前の機体を酷使したのだから当然だった。

残りはＡＩＭ９Ｌサイドワインダー赤外線誘導ミサイルが二発。レーダーに敵影はない。

ホウキボシを呼び出してみるが、応答がない。

地上邀撃管制から、攻撃隊を仕留めにいったホウキボシからの通信が途絶した、という連絡があった。攻撃隊を撃破したのは地対空ミサイル部隊だった。

あと、もう一機いたはずだ。そいつが二機のＦ１４を撃墜したのか？

「まだ残りがいるぞ」

「了解」

後席のナーセリーも何かに感づいたようだった。

護は、危険を承知で低空を飛ぶ。演習の時と同じだった。コバルトから瑠璃色に明るさを増していく空の色。これでは、目視しやすくなってしまう。少しだけ焦りが生まれる。

「ホウオウよりマナヅル一番機へ。二時方向に敵機！　距離一二〇、方位三三〇へ、高度一三〇〇〇を速度一二〇〇で飛行中。会敵予想地点は……」

空中警戒管制機のＡ５０Ｍ大鵬が把握したデータを元に、目標を目指す。息を殺して忍び寄る。急上昇し、目標の斜め右後の空域を目指した。まだ気づかれていない。残った武装はＲ２７Ｔ赤外線誘導ミサイルが一発。短射程のＲ７３Ｍ１赤外線誘導ミサイルが四発。

赤外線捜索追尾装置を使用する。

護は第二撃のため、アフターバーナーを焚いて一気に距離を詰める。あとは近接戦闘しか残っていない。

残った一機はもう逃げ出したのだろうか。いや、そんなはずはない。
怜人の勘が耳元で囁く。そんなはずない、と思って無視しようとするほど、たいてい真実を告げてくれる。
「プレアデスよりザウエル〇一、そちらから見て、八時方向に敵機！　近いぞ！」
レーダー・サイトからの通信が入る。
ミサイル警戒装置が鳴り響く。
「回避！　九時方向！」
ナーセリーの指示で怜人は確認した。垂直に上昇して回避する。上昇している最中に、ミサイルを目視した。白煙を背後に伸ばしてこちらを向いている。怜人は垂直に上昇しつつ、チャフ、フレアを投射する。フレアに惑わされ爆発する赤外線誘導ミサイルを確認した。
そのまま、捻るように旋回して向き合おうとする。
「プレアデスよりザウエル〇一、敵機だ。九時方向」
「いたぞ、目標発見！」
レーダー・サイトとナーセリーが気付くのは同時だった。
ミサイルを近づくための囮にしたのか。
怜人は、ミサイルを回避するためにパワーを使ってしまった。Ｆ１４を旋回させる。振り切れない。背後に滑り込んでくる。
敵ながら、いい位置についた。
敢えて旋回に移る。護の翔鶴はさらに内側に潜り込むため旋回する。怜人はＦ１４のコンピューター制御可変翼システムのロックを手動に切り替えた。高速飛行時の後退翼モードから、着艦時に多用される低速時の直線翼モードに変化させる。機器に負担を与える強引な操作だったが、怜人はやってのけた。アメリカ人は鵞鳥モードと言って無様なものだと見なしていたが、それ程、見っとも無くはない。

Ｆ１４は、失速することなく低速で翼を広げ、化石から蘇った翼竜のように飛んでいた。その上を黒い影が通り過ぎていく。怜人は会心の笑みを浮かべた。再び自動に戻した可変翼が現在の状況に最適の形をとる。

両者の形勢は瞬時に逆転した。

護は愕然とした。敵機を誤って追い抜いてしまった。

もう一度、切り返して垂直機動、旋回で逃げることはできるか。

無理だった。

いや、まだだ。まだ、出来ることがある。出撃前にデミドフが仕掛けたことが護の頭に閃く。主翼端兵装パイロンに搭載されたＲ７３Ｍ１短距離赤外線誘導ミサイルを選択する。ヘルメット装着式照準器は使用しない。

パイロンが逆方向に回転し、Ｒ７３Ｍ１のシーカーが追撃する敵機を捕らえる。

逃れようとする敵の動きに合わせてロールする。どこかで見たことのあるような動きだった。

「捕捉」

ロックオンの表示がＨＵＤに示される。

これで仕舞いだ。

「サイドワインダー」

フォックス・ツー、と宣言してナーセリーが発射ボタンを押そうとしたその時、ドーナツ状をした二つのミサイルの噴射炎が怜人の目に飛び込んできた。ミサイルを真正面から見たときの最も危険な状況だった。

反射的にロールをうって回避する。

「なんだ、今のは」

後席のナーセリーが喚く。

今まで追いかけていた敵機は、確かに後ろ向きにミサイルを放っ

た。
Ｓｕ２７シリーズに搭載可能なＲ２７やＲ７３には、背後の敵に向かってミサイルを発射できるという、前代未聞の奇妙なシステムが搭載されていた。もともと精度の高いものではなく、命中など全く期待できないが怜人の追撃をかわすには充分だった。仕留めようとした敵機は、あっという間に手からすり抜けてしまった。
こんなことができるのは、翔鶴だけだ。飛燕ではない。
怜人は笑いを押さえることができなかった。増速する。
「おい、何をする気だ！」
ナーセリーが怒鳴った。

苦し紛れの後方へのミサイル発射で、なんとか乗りきったものの、もう次の手は無い。
減速し過ぎて位置エネルギーと運動エネルギーを失い、手詰まり状態になってしまった。もう一度、位置エネルギーを取り戻すしかないが敵は背後にいる。もう駄目なのか、そう思った途端、突然、敵機が護を追いぬくようにして旋回する。そしてバンクして真横に並んだ。
戦闘中に、こんな行動をとるわけがない。
撃墜しろ、と言っているに等しい。
悠々と存在を誇示するかのように飛ぶ機体。
あれは……Ｆ１４なのか？
護は、初めて今まで戦っていた敵機がＦ１４だということに気がついた。Ｆ１５やＦ１６、Ｆ／Ａ１８などと並ぶ主敵の一つ。怜人が見せてくれた映画に登場する機体。
なぜ、アメリカ軍のＦ１４が、こんなところにいるのか。

キャノピー越しにパイロットがサインを送ってくる。
「ホウオウよりマナヅル一番機、どうした。応答しろ。ノスリが撃墜された」
大鵬が護を呼び出す。
護は震える手で国際周波数に切り替えた。
「護か」
「はい……」
なぜ、敵として怜人がＦ１４に乗って自分と戦っているのか、全くわからなかった。
「なかなか上手かったぞ。お前は独創性がなくて馬鹿の一つ覚えだ

が、その分、基礎はできている。千歳の生き残りの飛燕は、いい腕をしていたが少々自信過剰だったな」
まるで、空中戦闘訓練でもしていたかのようだった。
「怜人さん、なんで、こんな……」
「どうだ？　いい機体だろ。イランから買ったＦ１４トムキャットだ。翔鶴に勝るとも劣らない。古さを感じさせない」
ただ、凍りついたように怜人の声を聞く。
「勝彦はどうした。鋭や鋼は？」
「鋭さんと鋼は米帝空軍との戦いで……勝彦さんは、敵の襲撃で……」
「そうか。残念だったな」
沈黙。
「もう、勝負はついたぞ。これ以上、戦っても得ることはない。攻撃隊は既に阻止された。俺の指揮下に入れ。新しい生き方を選ぶことは、決して恥ではない」
「怜人さん……どうして、こんなことを。何でマフィアになんか味方するんです」
「さあな。Ｆ１４に乗りたかったからじゃないか」
「真面目に答えてください」
「もう、この国に愛想が尽き果てていてね。ぶっ潰すとか景気のいいことを言う男に雇われてみたのさ」
怜人が政治指導員や党を憎んでいることは知っていたが、本気で国を憎んでいるとは思わなかった。まして、党が崩壊した今、ここまでのことをする理由など見当もつかない。
「弾道弾を使って核を撃ち込もうとしているんでしょう。目標はどこですか。赤衛隊の展開している仙台や札幌、いえ、千歳や三沢なんですか」
「搭載しているのは生物兵器だ。この国を駄目にした愚か者どもにつけを払わせる」
「党の幹部たちはもう拘束されています。赤衛隊と戦うんですか」

「違う。叩くのは人民だ。いつでも被害者面、奴隷になりたがって、人を叩いて落として自己満足に浸りたがる人民とやらだよ。俺たちは人民の敵なのさ」
　それでは大量虐殺だ。マフィアがなぜ、そんなことを企むのか護にはわからなかった。慧子がそんな連中の手先だなんて信じられなかった。しかし、怜人が嘘をついたことはない。
「民間人を殺すだなんて。俺たちみたいな孤児も死ぬんですよ」
「ばら撒くのは、それほど毒性の強いウィルスじゃない。死ぬのは抵抗力の無い者だけだ」
「なおさら……子供が」
　いつか青森市で助けた子供を思い出す。真っ先に死ぬのは親から放り出され、国からも見捨てられた子供たちのはずだ。
「俺は死なない、と信じる。自然淘汰、適者生存だ。別のお前や俺や勝彦や鋼や鋭のような子供たちは、決して死なない。強いからだ。生き残って新しい空を飛ぶ」
　神託を告げるかのような声だった。
「そんなことのために……」
「俺たちの日本は貧しくて人口ばかり多い。それを解決しないと、一握りの強い者が、数ばかり多い弱い者に押し殺されるこの国は変えられないんだ。ケリがついたら祖国統一だ。西側との話もついている」
「そんな……統一のために一般人を殺すんですか。西側の言いなりになるんですか！」
「どうした。急に愛国心にでも目覚めたのか。こんな祖国を守りたいのか？　こんな腐った祖国を。犬猫程度の気分でつけられたお前の名の通り」
　侮蔑しているかのような声だった。
「俺はもう、お前の上官じゃない。お前に命令できない。これからは、自分で選び、自分で全てを引き受ける世界になる。俺についてくるか、俺と戦うかを選べ」

振り仰げば、ただ、青い世界。
「俺はまだ、第三飛行中隊のピロートです。ですから、与えられた任務を遂行せねばなりません」
任務を途中で放り出すことなど考えられなかった。
裏切り者ではあるが、パイロット資格も剥奪されていない。防空赤衛隊から追放もされていない。命令通りに任務を遂行するしかない。
「命令だからなんでもするのか？　お前が俺の立場にいたら命令通りにするのか？　選べ、と言ったはずだぞ」
怜人は厳しい声で言い放った。
祖国を守る。共産主義を守る。そんな意識は護には最初からないし今もない。初めて意識した守るべき存在だった慧子は、一片の雪のような幻だった。もう、命令の他は何も残っていないはずだった。それでも、本能のように怜人と戦うべきだということはわかっていた。護自身の中にある何かのために。たとえ、圧倒的な腕の差があって殺されるとしても、何もしないで離脱したり、怜人の指揮下に入ることなど選べなかった。
「俺は命令に従います。命令に従うことを選びます。怜人さんこそ、投降してください。こんなことは間違っている」
「そうか」
少し笑い声が混じっていた。
「お前らしいな。そういう依怙地なところは」
怜人は笑い出した。
「お前のことを、もっと気にかけてやればよかったと思っている」
声のトーンが低くなる。
「あまり、いい中隊長じゃなかったな。俺は」
「そんなことはありません。怜人さんは、俺の、俺たちの最高の中隊長だった」
三沢に来てわずか二年だったが、いつも、怜人は護の目指すパイロットで、敬意を抱ける中隊長だった。

「ありがとう。護。いつものようにはじめよう。健闘を期待する」
　怜人が繰り返していた言葉が頭の中をよぎる。
　頭で敵を見ろ。地に足をつけないでも、まともに物を考えられる種類の人間をピロートというんだ。
　機体も、敵の動きも、先手をとって読むことが肝要だ。あらゆる動きには必ず意味がある。
　軽くバンクして離れて行く怜人のＦ１４。
「ホウオウよりマナヅル一番機、どうした、敵機が……」
　恐怖も躊躇いも無い。不思議なほど、落ち着いた気持ちだった。空に自分が溶け出してしまったようだった。

「なぜ、敵と話した」
「元部下だ。惜しくて投降の機会をやったが、拒否した」
「内戦なのだな。この戦いは」
　ナーセリーは納得したようだった。
「仕切り直しをさせてすまない」
「構わない。嫌な仕事だな」
「承知の上だ。これで終わらせる」
　怜人は護を惜しいという気持ちを振り払った。いくら元部下とはいえ、そんな態度では礼を失っている。
「レーダーを俺にくれ」
「了解した。存分にやれ」
「感謝する」
　研ぎ澄まされた感覚が身体中に漲る。

「開始だ。一回で決めようじゃないか」
　怜人の声が響く。
　訓練の時と全てが同じだった。五〇キロ離れる。中隊長と部下。今回は確実にどちらかが死ぬ。
　残っているのは、短射程のR73M1赤外線誘導ミサイル二発のみ。護は赤外線捜索追尾装置を垂直走査モードにする。
　双方が相手の鼻面に一撃を食らわせるべく、様子を伺う。凶暴さを剥き出しにした二匹の闘犬が向かいあっているようだった。相手の位置を予測しながら、ナイフを繰り出す瞬間を狙う。
　護は、Su27SJ翔鶴の推力偏向ノズルを左右別々に上下に稼働させた。ロールをうつのが通常の機体より早くなる。
　互いに回避を続けながら接近し、二〇キロ圏内まで近づく。下手に背後につくために旋回に入って、高度やスピードを落とそうものなら、間違いなく怜人に撃墜される。

　怜人のF14トムキャットは、真上に打ち上げられたように垂直上昇し、護の上を通り抜けて、さらに急降下する。下に向けた縦のUターン、急降下半ループのスプリットS。凄まじいGが怜人を襲う。皮膚が引きつれ破れそうになる。Gのため、膠で固められたような指先を操って、サイドワインダーを照準する。HUDの点がぶれる。
　バレル・ロールで護が逃げようとしているのがわかった。
　つい、叱責してやりたくなる。
　同じようにバレル・ロールで追撃する。
　護は円を描くように旋回しながら急上昇する。

垂直機動のバレル・ロールだった。その真後ろを怜人が追撃する。二機で空中に円筒を作り上げているかのような機動だった。
Ｓｕ２７ＳＪ翔鶴とＦ１４トムキャット、二機の描く螺旋は次第に幅を狭めていく。
凄まじいＧが襲う。身体が締め付けられ、脳髄が体外に出てしまいそうだった。闇に落ちる寸前で踏みとどまる。意識が焼き切れていく。
護は歯を食いしばって失神に耐えた。
キャノピーのすぐ向こう側、手を触れられそうな場所に怜人のＦ１４がある。互いが互いの機の周囲を回っている。
こんな状態は長くは続かない。
Ｆ１４の機体下面が見える。
フライ・バイ・ワイヤのリミッターを解除。
バランスを崩す。
その瞬間、翔鶴の推力偏向ノズルを下に向ける。Ｆ１４から離れる。渦から弾き飛ばされたかのようだった。
機体が失速しかけた。落ちながら宙を翔ける。機体下面を天に向け、機体を一〇〇度に傾けた状態のプガチョフ・コブラ。骨まで砕けるようなＧ。眩暈と吐き気。推力偏向ノズルを最大限下に向けて、上空にジェット排気を叩きつけた。その姿勢から、機体の横の中心を軸に反時計回りに機体自体を戻し、護は、翔鶴の機首を怜人のＦ１４の方に向ける。

機体下面をさらしながら、落ちていく翔鶴。

怜人は、護が垂直のバレル・ロールをし損なってバランスを失ったと判断した。ミサイル一発、機関砲一発撃たずに機動で敵を撃墜することもある。少々拍子抜けした。教えてきた護が、こんなにあっさりと墜ちるとは。
「気をつけろ、姿勢を戻しているぞ！」

油断無く目を開いていたナーセリーの声で我にかえる。
キャノピーの端、下方に姿勢を取り戻して機首をこちらに志向する翔鶴の姿が見えた。
翔鶴にできるわけがない。だが、まさか。

翔鶴は垂直上昇していた。

ヘルメット装着式照準器Ｓｃｈｅｌ３ＵＭを右目で覗く。負荷がかかったため、目が潰れそうな痛みを感じる。霞む怜人のＦ１４に首の痛みを堪えて頭を向ける。視界を動かすだけで、ヘルメット装着式照準器を介してロックオンが可能だった。Ｒ７３Ｍ１のシーカー内に捕捉し続ける。ロックオン。残ったＲ７３Ｍ１赤外線誘導ミサイルを放つ。一発目。Ｆ１４のエンジンに向かう。花火のようなフレアが射出されて手前で爆発。
衝撃波で姿勢を崩すＦ１４。
残るもう一発のＲ７３Ｍ１を発射。垂直に近い角度で発射されたＲ７３Ｍ１は、薄い酸素を破って生物のように飛ぶ。
Ｆ１４の左エンジンを直撃する。火球に包まれて形を失うＦ１４。
爆散。
残骸が地表へと燃えながら落ちていく。明けゆく空を彩る流星のようだった。

地面には〈明星〉を警備していた兵士たちの死体が散らばっていた。赤衛隊情報偵察局の鳥井が、数名の部下を連れて指揮をとっている。

鳥井は敢えて、慧子に拘束されて択捉まで連行され、択捉に潜入していた部隊と連携をとって作戦を行っていた。

目的は弾道弾の破壊と須田の暗殺だった。択捉全体を制圧するために、現在、防空レーダーに引っかからない低高度、低速で飛ぶ年代ものの複葉機、Ａｎ２鶉輸送機で空輸された地上赤衛隊空挺団が、紗那や天寧を制圧していた。同時に海岸には、ロシアの認可を得てウラジオストクに逃げ込んでいた海防赤衛隊残存艦艇に援護された揚陸部隊が殺到していた。

「いくつかに爆薬を仕掛けたが、我々だけでは無理だ。森林の中に何台か残している。おっつけ警備部隊も戻ってくるだろう。航空支援が必要だ」

発炎筒が焚かれる。毒々しい紅い煙が一筋、あがっていく。

「なかなか大変ですね」

人ごとのように呟く慧子。

「御苦労だった」

「いえ、私の事情でやっただけです。紙一重でした。先生の答えによっては、あなたたちが死体になっていたでしょうね」

鳥井は須田と直接の面識はなかったが、須田の官僚時代の功績はよく知っていた。

共産主義の計画経済を妄想と指摘して改革を担い、現実主義、実利主義者を自認していた男が最後に計画していたのは、合理性の欠片も無い単なる虐殺計画だった。

彼は最後まで自分の計画を信じていたのか、それともある程度感情によるものだと自覚していたのか。
「今、海防赤衛隊の虎の子が向かっている。前線航空統制官に誘導させる予定だ」
「何度か空襲があったみたいですけれど、うまくいかなかったのですか？」
「成功は期待していなかった。今までの攻撃は、全て陽動と敵の防空能力を削ぐためのものに過ぎない。犠牲になった隊員たちには申し訳ないがね」
「そんなことだろうと思ってました」
弾道弾の列が地上に影を落としている。ちょうど、墓標のようだった。
「しかし、疑問です」
部下が口にした。
「本当に、なぜ、こんなことを？　経済的には何の意味もない行為ですよ」
「真っ当な資本主義は人権を保障した法の下でないと決して成立しない。誰が自分の生命や財産を奪いかねないような体制の下で、努力して自身の人生を築こうとするだろう。須田は自由な経済地区を築くと言っていたが、個人を相互に尊重しない自由など自由ではない。やはり、須田は共産主義者さ。官僚独裁の下で今度はマフィア的なゴロツキ資本家を掻き集めて生産性を上げようと考えた。他者の権利を踏みにじる究極の放任経済こそ、あらゆる権利を剥奪した政治犯を強制労働させるのが得意な共産主義そのものではないか。あるいは、彼が憎んでいたのは、無力さや無能そのものだった。それだけだ」
「そんな、子供じみている」
「先生を馬鹿みたいに言わないでください。怒りますよ」
一瞬だけ鬼女のような表情を作った慧子が、鳥井の部下を睨みつけた。

「私は指揮所を壊しておきます」
「いいのか」
「私のことはお気になさらずに」
踵を返す慧子。
「あんな女、信用するのですか？　二重スパイどころじゃありませんよ。いったい、どれだけの組織の工作員を同時にやってきたんでしょうか」
「いいんだ。あのままにしてやれ」

「全防空部隊へ。作戦終了。直ちに撤収し、駐屯地で指示を待て。行動中は無線を封鎖せよ。繰り返す。直ちに撤収せよ。以後、指揮所も無線を完全に封鎖する」
指揮車両内に入った慧子は、弾道弾部隊の周囲に展開している防空部隊に指示した。
「了解」
全ての通信を切る。車両の外付け工具からスコップを持ってきて、通信機や西日本製のノートパソコンを破壊し、何本もまとめられた蔦のようなケーブルを引きちぎる。思い切り、力を込めて。なんとなく楽しかった。
「これくらいでいいかな」
独り言を言って汗を拭う。
護のことが頭に浮かぶ。
なかなか好みだった。ああいう子も悪くない。今頃、膝小僧を抱えているだろう。可哀想だ。けれど、私は欲しければ獲る。人からでも力づくで奪い獲る。いらなくなれば捨てるだけ。私が幸せを求めることは、誰にも押し止められはしないし、誰にも譲らない。あの子のような間抜けなお人よしじゃない。
もしも、あと十年くらい早く、同じくらいの年に生まれていたら、あの子のことを先生より好きになれただろうか。護ならば壊れた私に翼をくれて、空を飛ぶように私を連れていってくれただろうか。

そう、あの年頃くらいだと、好きな人と一緒なら、二人一緒なら、本当になんでもできるって、どんな明日でも手に入るって、まだ信じられるから。でも、「もし」は無意味だ。私が好きなのは先生だから。

「もし」を須田はとても嫌っていたことを思い出す。

いいかね、同志紫藤。仮定の話をしても、現実には何ら寄与しないのだよ。仮説はともかく、仮定の状況をああだこうだ言うのは無意味だ。

はい、先生。

よし、もう一度、よく考えてみよう。

指揮車両から出て、隊員たちの休憩用テントに入って、インスタントコーヒーをカップに入れる。湯を注ぐ。砂漠の礫砂のようなコーヒーの粒が湯に溶けていく。本物を味わいたかったが仕方が無い。授業後の轢きたての本物のコーヒーは本当に美味しかった。ミルクと砂糖をたっぷりと入れる。

須田が持ち込んでいたプレイヤーで、二人が大好きな新世界交響曲のレコードをかける。

コーフェを一杯飲んだら、先生と一緒にいよう。

青蒼気圏　web. ver　〈43〉

空には戦いの痕跡さえ残っていない。

静かな一日のはじまりを示すかのような、穏やかな朝日に成層圏は満たされている。

自分の呼吸音が煩わしい。一つ、唾を呑み込む。護は計器に目を落とす。燃料も残り少ない。無茶苦茶な機動を行ったため、エンジンは、瀕死の病人が咳き込んでいるかのような嫌な音を立てている。機械装置状況指示器が、右主翼のフラップ、左水平尾翼と垂直尾翼のラダーが稼働しないことを知らせている。水平飛行だけでも精一杯だった。

生き残った実感も勝利の甘美さもない。戦闘の昂揚感が急速に醒めていく。直接、大気に身を晒しているようにひどく寒かった。

訓練では、一度も倒せなかった怜人を倒した。

アメリカ軍と戦った時のように、顔も知らない敵を殺したのではない。最も近づきたいと願っていた怜人を自分のこの手で殺した。

「マナヅル一番機、どうした。無事か。マナヅル一番機どうした！」

通信に護は何も応答しなかった。

失敗した。防空赤衛隊に任務を果たす力は残っていない。

こうなることを見越して怜人は戦ったのではないか、という考えが頭をかすめる。

空中戦闘で勝つこと、撃墜数を稼ぐこと自体は目的ではない。個々の戦闘における勝利より、如何にして作戦全体の目的に貢献するかを考えろ、と怜人はいつも言っていた。弾道弾が発射されるまで、敵を近づけさせなければ怜人の勝ちだった。

弾道弾を破壊する方法はないか？
ない。いや、一つだけある。方法が。弾道弾を少しでも破壊できる武器が、この手にあるじゃないか。
低空に下りる。ＨＤＤの航法モードで方位、座標を確かめる。銀の波紋を刻んで輝く海。伸びていく黒い地表。択捉だった。海も地上も、ひどく曖昧なものに見えた。護は目を凝らした。
再度、大鵬から呼び出される。
「ホウオウよりマナヅル一番機、ええい、どうした」
「マナヅル一番機よりホウオウへ。択捉上空に到達。俺一機だけだ」
「無事なようだな。高度をとって対空警戒に当ってくれ」
了解、と護は返さなかった。
微かに糸のような紅い煙があがっているのが見える。発炎筒だろうか。目標地点は、あそこではないか。待ち構えているはずの地対空ミサイルなどの防空部隊を警戒する。
このまま、あの真上に行って機関砲を使い、操縦桿を押し込んでしまえば任務を達成できる。慧子の顔が浮かぶ。
慧子を守れないのなら、慧子が待っていないのなら、帰投する必要などもうない。慧子のいない地上などに。

慧子は、膝の上に須田の頭を載せた。
そっと瞼を閉じて髪を撫でる。
どれだけ、こうしたかったか。やっと願いが叶った。
テントからは最大音量の新世界交響曲。
明るい南の空を見上げた。綾なす雲の隙間から、琥珀色の光がうっすらと透かしを入れたように洩れている。
空が明るい青色に輝いていく。天上の大伽藍が今、目の前に下りてきている。そんな幻を抱くほどの光景だった。
慧子は眼鏡を外した。
真正面から軽やかな朝風が吹きぬける。髪留めも外す。髪が解放

され風に泳ぐ。まるで新しい生命を得たようだった。
目を凝らす。南の空に機影が一つ。
目で追うと、鳶のように大きく弧を描きながら飛んでいる。
あれかしら。いいえ、攻撃隊を呼び寄せているんだわ。
東からの清浄な光が斜めから差し込み、澄んだ黄金色の眩しさに思わず目を細める。
さあ、早く、私たちを焼き尽くしにきて。
新世界交響曲は、空で演奏されているようだった。

「マナヅル一番機、二時方向を見ろ。素晴らしいものが見えるぞ」
護は目を下に向ける。
何かが一瞬で低空を駆け抜けていく。かなりの大型機。海防赤衛隊の虎の子、ロシアに避難させていた対艦艇攻撃用の旧ソ連製爆撃機、Ｔｕ２２Ｍ３蒼山だった。西側ではバックファイアの名で恐れられた。対艦ミサイルを搭載し、アメリカや西側の艦艇を攻撃するために配備された蒼山は爆弾を搭載していた。
集中豪雨に土が跳ね上がるように地表の一部が剥ぎ取られる。その上を、また大型機が通過した。地表でマッシュルームのような黒煙と炎が膨れ上がり、周囲を呑み込む。島にへばりついてきた潅木が燃え上がる。ナパームを使ったのだ。記録映画で見たアメリカ軍のベトナム攻撃そっくりだった。
「命中！　命中！　攻撃成功！」
大鵬からの興奮した声が届いた。護は何の感慨も抱かなかった。

レーダー警戒装置に反応。下方の脅威。中距離の地対空ミサイルレーダーに照射されている。弾道弾の対空護衛部隊がようやく気がついた。
護の翔鶴は一気に上昇、機体を捻るようにしてシザーズ機動に入った。ミサイルを振り払おうとする。推力が足りない。

急かすような断続的な警告音が大きくなっていき、赤い警告ランプが灯る。
ロックオンされた。
機動でかわそうとしたが、もう翔鶴自体、無理な動きはできない。
全周囲を警戒する。
護は、右下方に黒い地面を背景にして、傷のような微かな白煙を引きずりながら動いている何かを見つける。
ミサイルが、目視できる程の距離まで近づいてきていた。ひどくノロノロとした飛行をしているように見える。発射されたミサイルの噴射炎が序々に円形を成していく。確実にこちらを捕捉している証拠だった。
ありたっけのチャフとフレアを撒く。
カートリッジの残量が、零になる。
さっきまで、もう死んでも構わない、慧子のいない場所に帰っても仕方がない、と思っていたのに、反射的に護の身体が動く。人間のあらゆる思考を拒否する混じり気の無い恐怖が、護を駆りたてていた。
ミサイルがチャフの雲の中に突っ込む。
至近距離での爆発。破片が、右の垂直尾翼と左の主翼を引き裂く。
バランスを失い横転する翔鶴。
護は意識を失う寸前、Ｋ３６ＤＭ脱出装置のハンドルを引いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3609x/

青蒼気圏　web.ver

2011年10月29日02時18分発行